明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可
（每月一回一日發行）

女子文壇

四年
第四號

明治四十一年
三月
一日發行



桃花



富岡まさ子筆

桃花



富岡まさ子筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇第四年

三月一日發行

毎號 皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

本　欄

【圖　畫】

【美　文】

▲口　繪▼





第四號目次

愛讀諸孃に捧ぐ



辻本天然色製版印刷

パンジー (Pansy.)

投稿〆切は愈よ切迫せり

女子文壇臨時増刊大懸賞募集

文壇の花

文才詩才ある諸嬢の見免すべからざる新事實は本社に於て企てられんとす從來年に一冊宛發行し來れる**女子懸賞文集**の**代り**とも見るべく更に**大懸賞**を以て諸嬢の**新作を募り**一冊子となして**『文壇の花』**と名づけ來る**四月十五日**博く江湖に其才華を示さんとす、之れ一個の新しく編輯されたる女子作文の模範的良書なり、選評の懇切なるは本社が是迄の經驗に徵して諸嬢の熟知せらるゝ處なれば復た敢て喋々せず、請ふ左の**方法**に據り**奮つて投稿**せられんことを希望す

編輯局選評

▲大懸賞投稿募集十種課目

●甲種

小說……總振假名付一行廿四字二百行限

●乙種

お伽噺……總振假名付一行廿四字百行限

美文……一行二十四字五十行限

論文……一行二十四字三十行限

●丙種

日記文……一行二十四字三十行限

書簡文……一行二十四字三十行限

新體詩……總振假名付二十行限

短文……總振假名付一行廿四字五行限

和歌……一首限

俳句……一句限

（方法は次頁に詳しくあり就て見よ）

投稿三月五日〆切

文壇の花大懸賞品

種別	賞	賞品	數量	價格	人數
甲種	天賞	金貳拾圓		（正金を呈す）	一人
	地賞	金拾五圓		（正金を呈す）	一人
	人賞	金五圓		（正金を呈す）	一人
乙種	天賞	絹地袴	壹着	（價格金七圓）	六人
	地賞	反物	壹反	（價格金五圓）	六人
	人賞	懐中化粧道具	壹函	（價格金參圓）	六人
丙種	天賞	帯地	壹本	（價格金四圓）	三人
	地賞	縮緬帛紗	壹枚	（價格金貳圓）	三人
	人賞	蒔繪硯箱	壹個	（價格金壹圓）	三人

▲投稿者心得▼

○投稿は一人一章又は一首限りとし、題と文體とは各自の隨意とす。
○投稿用紙は半紙又は原稿紙に限る、字體は楷書、假名は平假名を用ふること、但し和歌俳句は一首或は一句を半紙半枚に認むべし。
○投稿は各種類を異にするごとに必ず別の用紙に認め、題の上に各その種目を書し、題下には必ず住所姓名を明記すべし。
○投稿には句點を施すべし、圈點は決して附すべからず。
○投稿は女子文壇社編輯局宛にし、封筒には必ず『文壇の花原稿』の文字を朱書すべし但し各種取交ぜ開封にて差出せば三十匁迄郵税二錢なり
○投稿中には他の用事の文句を記すべからず。
○投稿は必ず自家の作物たるべきこと、若し剽窃の疑あるものは當選無効とす。
○當選者の肖像は寫眞版にして挿入す。發表前に通知を受けたる者は差支なき限りは送付ありたし、用濟の上は返送すべし。
○投稿は一切返附せず、又不足、未納税のものは受取らざるべし。
○當選者へ懸賞品送付は發表一ヶ月後たること。

文壇の花は定期増刊にあらず臨時増刊なり即ち『四年第六號』とし來る四月十五日發行す

●文壇の花 紙數二百五十頁 口繪插畫澤山挿入

▲定價金貳拾錢 郵税貳錢（凡て例號の倍數となる）

▲投稿及發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 女子文壇社

直接申込愛讀諸君へ謹告

『文壇の花』は來る四月十五日を期し號を逐ひ臨時增刊（是は年四回の定期增刊と異なるもの）の上例號に倣ひ送本致します、都て例號の倍數に相當する故定價も亦二册分となります、假令は第四卷十六號迄前金お拂込の分は夫が爲め第四卷十四號迄に繰上る譯てすから其御積て之に相當する分至急お拂込を願ます。



營業案内御入用ナレバ此切取相添御申越シ被下度候

發賣御案内 造花用電燈

盛籠用。花輪用。花簪用。技花用等各種
營業概目。造花半製品。造花用染料。造花用器具
摘ミ細工材料。金銀モール。摸寶石。電氣用眞線

東京市日本橋區横山町壹丁目十六番地

美術造花材料商 天野卯兵衛商店

(特長電話浪花一六四三)(振替貯金口座四九七〇)

切取線

縣　郡　町村

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

報知新聞記者熊田葦城著

女武士道

菊版四百五拾七頁
定價八拾錢
郵税拾二錢

嗚呼『女武士道』出づ何が爲めにか出づる、世を憂ふれば也、時を慨すれば也

今や士に氣魄なく、女に節義なし、滔々たる天下相率ひて浮薄に流れ、輕佻に失し、忠勇義烈の事復た見るべからざらんとす、國家の前途豈寒心に耐ゆべけんや、著者の筆を把つて『女武士道』を草する所以、實に之を憂ひ、之を慨するの餘に出づ

此篇輯むる所一百人、勇婦あり、烈婦あり、貞婦あり、節婦あり、其事蹟、其性行、俱に千古に傳ふべきもの、行文簡潔能く之れに適ふ、一たび卷を繙けば筆上涙あり、紙上聲あるを覺ふ、其曾て報知新聞紙上に掲げらるゝや滿天下の士女翕然之れを歡迎し、之れを愛讀し、賞贊の辭を贈るもの數百人、皆曰く現時最要の好著なりと、切に集めて一本を爲さんことを慫慂せらる、其稱揚の厚き殆と他に其比を見ず

是に於て出版して以て世上の切望に應ぜんとす、其裝釘の美や以て机上を飾るに足るべく、而して其內容の美や以て賢者の德を修むるに足るべき也

嗚呼士道衰ふれば國も亦た衰へ、女德亡ぶれば家も亦た亡びん、士道を振作せんと欲するもの此書を讀まざるべからず、女德を涵養せんと欲するもの亦た此書を讀まざるべからず、此書を備ふるものは、其れ能く健全なる家庭、高潔なる淑女たるを表するを得ん

大方の諸君よ乞ふ其期に後れず陸續購讀せられんことを

發行元 天地堂

東京市本郷二丁目二十四番地
電話下谷八百五十九番

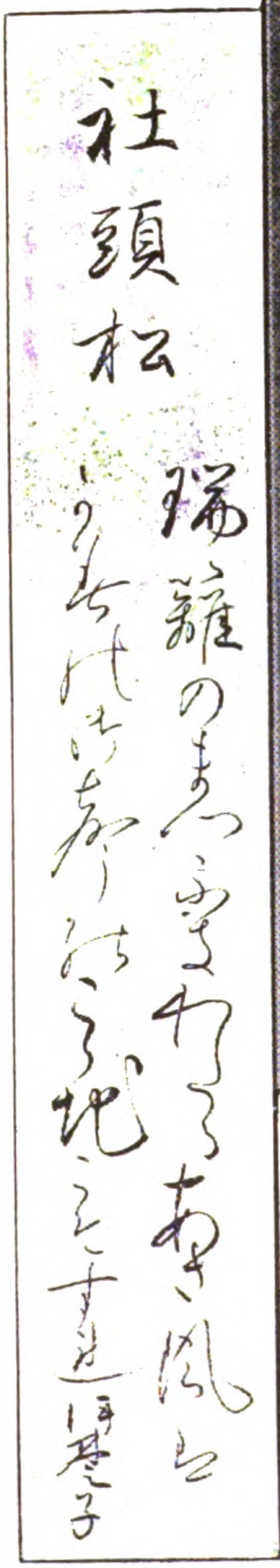
大賣捌所

東京 東京堂 上田屋 北隆館 東海堂
至誠堂 文林堂 文榮閣 京都 東枝

(乙の四)

光榮ある閨秀歌人（一）



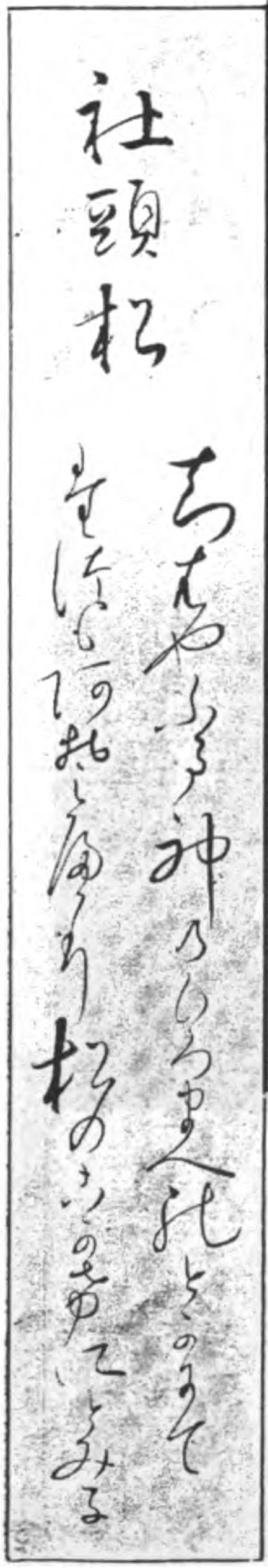


徳大寺伊楚子と筆蹟

伊楚子孃は侍從長徳大寺侯爵の第五女、學習院女學部の出身にして、今年の御歌會始に預選の榮を辱ふせられたり

光榮ある閨秀歌人（二）





鷲尾とみ子と筆蹟

とみ子女史は神戸に生れ大日本女學會に入りて大口鯛二氏の教へを受け徳大寺孃と仝じく今回預選の光榮を得られたり

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

商標登錄 壽美禮おしろい

壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用て御顏肌を艶麗ならしめ淸々しく天然と色白きに至るへし殊に衣服、半襟等のよごれざるは本白粉の特色也『菫おしろい』は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會祝席雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品也『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱其他に於て上流社會に益々好評を博しつゝ大流行せり



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 定價（大壜二十錢 小壜十二錢）

水製 定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）

錫栓附乳白硝子壜入

西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年間研究の上製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗ひに御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろしく水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ御入浴の際用ふるを便とす

綠、藍、紅彩蝶香ひ 罐詰八錢

別製罐詰 五拾錢

大袋入二錢 小袋入壹錢

登錄商標

西洋色白くなる あらひ粉

SUMIRE
Washing
Powder.

壽美禮 あらひ粉



製造本舗 東京東兩國元町（兩國橋際）

壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之に付御近邊にて御求めを乞ふ

世界唯一 **麻病消渇の根治新薬**

麻滅(りんめつ)

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範薬なり、本剤はありふれたる普通の賣薬と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新薬を主剤とし是を内服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製剤せし新薬に付必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌剤の如き迂遠無効有害の姑息薬と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ薬價不廉なり用薬者豫め之を諒せよ

輕症は壹剤重症は特別製分にて

薬價壹剤壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割増しの事

専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館薬房**

白色特効 **ペーアス石鹸**

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず曾だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白**くし、**粗糙質**を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附著し蕩るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む)

輸入一手 専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館薬房**

癩病根治新剤

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病状菌の媒介によりて傳染症たることを發見せり、本剤は此確乎不抜の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新薬にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他の類似薬の比にあらず、患者は彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣薬に誤らるゝことなく又古來より傳へられた血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本剤を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は一二剤重症は特別製分以上にて治療の目的を達す、薬價送料共壹剤五圓拾錢特別製分拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

梅毒根治新剤

本剤(薬名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の薬なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効新薬なり故に黴毒及黴毒に継發して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**するを確證す從來醫療賣薬等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本剤を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。薬價壹剤分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送薬す郵便切手代用貳割増しの事

●以上貳薬 専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館薬房**

眞正極秘 **粋珍書案内**

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粋士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黒門町廿番地 **東雲堂書店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

毎月二回

秀才文壇

戊申文壇之急先鋒

【各欄毎號撰評分擔】

●美文……小川未明君
○和歌……尾上柴舟君 佐々木信綱君
●評論文……編輯局
○新體詩……馬場孤蝶君
●寫生文……高濱虚子君
○漢詩……小笠原盧舟君
●十行日記……小川未明君
○俳句……高濱虚子君
●五行文……矢部白雨君
○短篇小說……徳田秋聲君
●六號文壇……○スケッチ

正價 一冊郵税共十一錢●六冊全六十三錢●十二冊全一圓廿五錢●廿六冊全二圓四十四錢(增刊四月、十月の廿日發行)

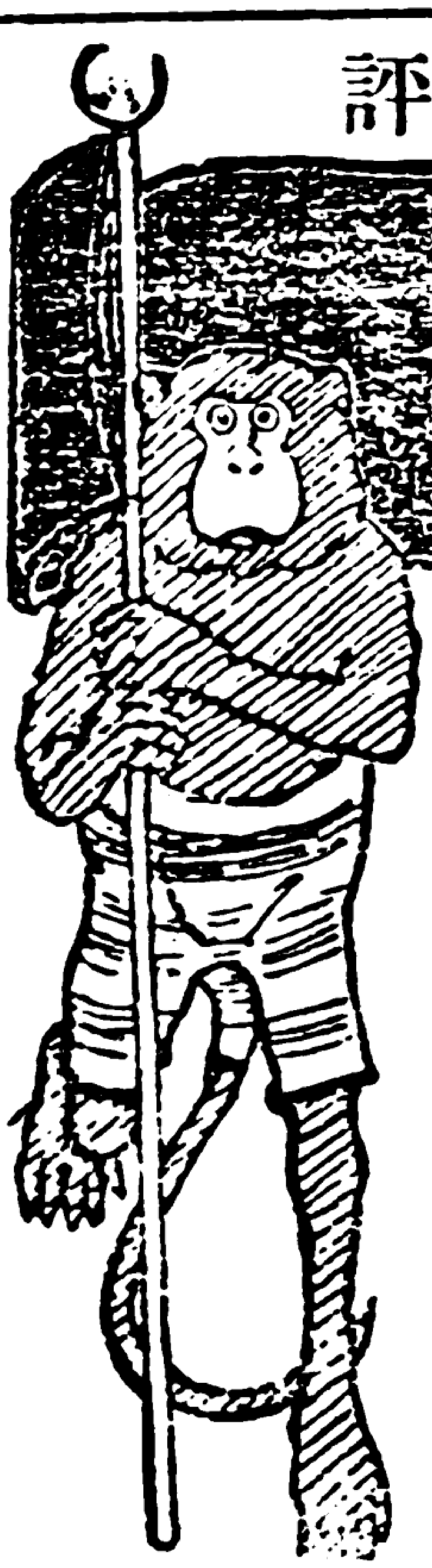
第八巻五號 三月一日發兌

第八巻六號 同十五日發兌

發兌元 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 (振替貯金口座一九五五番)

●賣捌店到る處にあり

第三巻第三號(製本出來)……大好評



少年之友

○花吹雪(石版五色刷)……宮川春汀畫
○少年繪手本(石版二色刷)……古洞秀榮
△犬はり子△乙女△つばめ△かひ
●ブン〳〵獨樂(唱歌)……少年子
○藁から黄金……花園波消
●酒保……秋賴三
○三月の日記……日記係
●猿ケ島探險(つゞき)……淺香爛山
○豆の木……宮地竹峰
●海鳥……はくう譯

懸賞繪探し(猶本號には新案少年智識競爭の懸賞あり)

少年文壇 ○普通文○日記文○四行詩○はがき文○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟○スケッチ

無比廉價 一冊金五錢 税五厘○六冊郵税共金廿七錢○十二冊金五拾四錢(郵券代用一割增)

發行元 東京神田旅籠町一丁目 文光堂

誌友寫眞（五）



（京都）上羽きく子

（茨城）須崎せい子



（大阪）竹原きくい子

（宮城）藤田もと子

（山城）村田まさ子







續々御寄送を願ます、掲載濟の上お返し申します

誌友寫眞（六）



（八王子）井澤菊江子



（大阪）木田千代子



中（小樽）北澤文子

中（信濃）青木みゆき子



（横濱）村田竹子



（上總）四之宮あき子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇

●第四卷第壹號　目次

增刷出來紙數百六十頁
此分に限り定價拾貳錢

口繪　泰西名畫　愛吟　光澤紙原色版刷
寫眞　閑院宮殿下家庭　誌友肖像外數葉

○新年の辭…………記者
○名流婦人の處女時代▲三輪田眞佐子▲跡見花蹊▲鳩山春子▲羽仁もと子▲佐藤爵子▲三宅花圃▲大塚楠緒子▲與謝野晶子▲藤井環子▲榊原蕉園▲鷲山彌生諸女史の談片
○英文…▲新年▲指太郎　其(二)…………河井道子
○懸賞新作詩文第一回披露…滿紙に溢る
○死後までも…………小栗風葉
○非牧者…………佐野天聲
○女裝…………徳田秋聲
○乘合馬車…………窪田空穗
○角…………岡田八千代

【附錄】（各編とも挿畫入）

●第四卷第二號　目次

增刷出來
定價金拾錢送料壹錢

口繪　泰西名畫　花苑　光澤紙原色版刷
寫眞　小笠原女禮式作法（其二）其他誌友肖像外數葉挿入

○自分の價値…………記者
○名流婦人の處女時代▲幸田延子▲嘉悦孝子女史の談片…………
○盗人…………文學士　横瀬夜雨
○冬の旅…………中村枯林
○彼如何にせし（小說）…………齋藤弔花
○新進作家一口評…………記者
○英文…▲冬▲金言▲六羽の白鳥…………河井道子
○懸賞新作文第二回披露…滿紙に溢る

低廉。無敵。大好評

▲發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　女子文壇社
（振替口座第壹七貳九番）

○最寄書店になくば發行所へ御申越を乞ふ取揃あれば直に送本す

竹柏會は佐々木信綱氏指導のもとに清新なる和歌を研究せむとする會なり

竹柏會は師友に乏しき人の爲に和歌の添削質疑に應ず

竹柏會は會員の機關として每月一回文藝雜誌「心の花」を發行す

竹柏會に入會せられむとする人は郵券貳錢を送られなば規則書を送附すべし

東京市神田小川町一
電話本局一一一四番
竹柏會

廣告勸誘員入用

廣告募集に經歷あるもの至急入用です速に來社あれ、面談の上採用します

四十一年三月

東京市京橋區大鋸町十一
女子文壇社

坐ながら手數なく安心買入の最便法



買物安全輕便法

今般本社にては愛讀諸孃の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌、文房具、化粧品、西洋小間物、玩具**其他有らゆる百般の物品を手數料申受けず總て**定價の五分引**にて御用達致しますから遠慮なく多少に拘らず左記の注文心得により御申込を願ます

申込心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に定價の五分引に相當する金額と郵便小包送料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便、普通運送便にて送り届けます

○問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります

▲申込は總て「女子文壇社買物用達部」宛にして下さい

▲右の外諸學校の校友會誌を始め一般の印刷物及本板、寫眞版の製版をも迅速鮮明に御引受け可申上候

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
(郵便振替貯金口座第壹七貳九番)

女子文壇社買物用達部
(電話本局六百七番)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秀才文壇春季增刊

懸賞文　大募集

青年文士之檜舞臺



紙數二百六十頁　本號ニ限リ　正價金二十錢　郵税二錢

卷頭執筆大家（○吉江孤雁氏○柳川春葉氏○小栗風葉氏○岡田八千代氏○小川未明氏○中村星湖氏○西村醉夢氏○眞山青果氏○德田秋聲氏○高濱虛子氏○其他數氏執筆）

（一）短篇小說……德田秋聲選

（二）美文……小川未明選
寫生文……高濱虛子選
評論文……中島孤島選
新體詩……馬場孤蝶選

（三）十行日記……小川未明選
五行文……矢部白雨選

（四）和歌……佐々木信綱選
仝……尾上柴舟選
俳句……高濱虛子選

○スケッチ（風俗人物に限る、半頁大、縱、横とも隨意）山中古洞選

四月廿日發行

賞品目

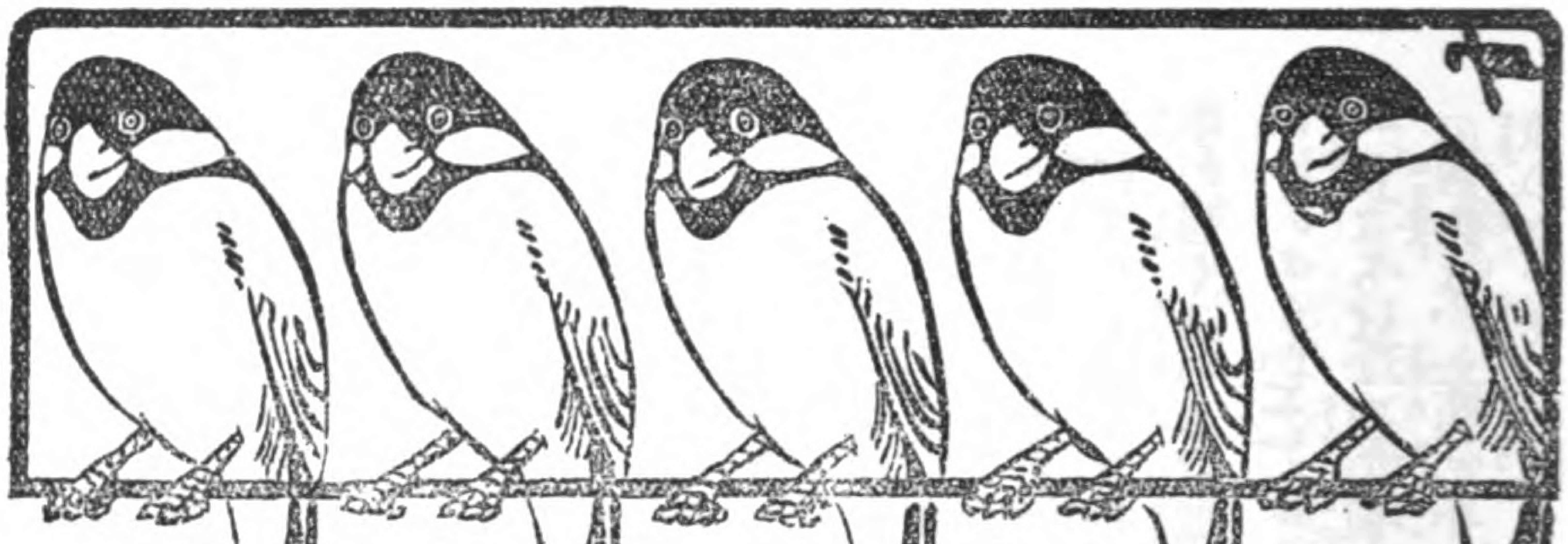
（一）一等賞…銀側懷中時計一箇
二等賞…舶來中折帽子一箇
三等賞…上等小倉袴地一反

（二）○甲賞金三圓　○乙賞金二圓
○丙賞金一圓五十錢（以上正金）

（三）○甲賞金一圓五十錢
○乙賞金一圓　○丙賞金五十錢（以上圖書切符）

（四）天（各選者の著書一冊）地（美文良材一冊）人（本誌三冊切符）
スケッチ　天（萬年筆一本）地（スケッチブック）人（仝上）

◉原稿締切は三月十日限り
◉封筒及原稿には必ず『新綠』原稿と朱書せらるべし
◉其他行數字詰等は每號の規定に準ず



女子文壇四年四號

明治四十一年三月一日發行

沒書嘆

沒書の靈、嘆いて曰く私の作つたものは、他の作と比べて自分では劣るとも思はない、幾日も幾夜も考へて幾度も書直して投書した、屹度載るであらうと思つてゐたのに選者は用捨なく沒書して了つた、字の書き方がまづいせいであらうか、投稿規則に外れてゐるせいであらうか、否、規則にも外れてゐない、書き方も然うまづくはない、何故沒書になつたか私には分らないもう此れて幾度も沒書になつた、あゝ悲しい〳〵、私には文學の才が無いのであらうか、それとも選者に眼が無いのであらうか、怨めしの活字よ、何故私の名を紙上に印刷してくれないのであらう。

此時、詩神出現れて宣言く、あゝ愚か〳〵、汝沒書の亡魂、未だ宙宇にさまよふて地下の永眠に安じないのは汝の心得違ひであらう、汝の作は汝自身は好と思つても、汝より好き作を多く作り、多く見てゐる選者は汝の作に動かされなかつた、汝の作の文字は美しい、如何にも他の作には劣けない、けれども他の作の眞作に過ぎない、汝自身の眞實は文字に表白れて居ない、汝は名を出してもらひたい爲に作るので、自分の眞實を表白さうと思つて作るのでないから、其んな失望に陷るのであらう、再び蘇生て眞實の姿で現れよ。

三月〔大〕

日曜日　一日　八日　十五日　廿二日　廿九日

春季皇靈祭　廿一日

雛祭　三日

雪の歸路（小說）

江見水蔭

「一」

母なる女敎師の學校より歸り來べき時とはなりぬ。七歲になる姉と、五歲になる妹とは、常の如くに窓を開きて、其姿の次第々々に大きく明けく成りて、後には其笑ましき顏のあり〳〵と見ゆるまで、待たんとは搆へたり。

さるに、雪は今朝より降り止まず。軒の氷柱の窓の格子と並びて行手を遮ぎる。他に、七八間先きなる門の柱すらも見るを得ず、紛々たる雪の飛び散るさへ、手の屆く邊のみぞ認められける。

「二」

常ならば、門の前の小流に渡せる土橋より、幾曲りの細路は、空田の中を縫ひつゝ長く〳〵延びて、石地藏の立たせ給ふ前より銳角に折れて東の方に行き、それより用水池の邊を過ぎて、此所に一軒の茶店ある處より、二三町の先ぞ雜木山のだら〳〵小坂、其所まで一目なるを。

「三」

學校は雜木山の向手なり。開放の鐘の音の響き渡ると間もなく、子等は散々に家路へと歸るなり。少し遲れて母なる人の姿は、だら〳〵小坂にあらはるゝなり。母樣よ、母樣よとて、姉、妹、手を打ち、足踏み鳴らし、窓よりは見るなりけり。母の姿の茶店の陰に隱るゝは、束の間なれども、そを長きわかれかの樣に二人は、いとゞ心細くも思ふなり。池のほとり風強く、袴の裾を吹捲う見ては、小さき心の唯はら〳〵として、早く〳〵と叫び合ひ。やがて石地藏の前を曲りてし時には、正面に此方向かるゝが嬉しく、母樣は今、打笑まれたり。否、物思はし氣にこそなど爭ひ合ひ。既にして田の中を幾曲り、向きの異なる每に、其顏の明らかに見え出して、薄き髮、瘠せたる頰、其所に淋しき笑の覺束なくも浮び出るを見得るに至りては、聲を限

りに、母様、母様、とは呼ぶなり。
小流の橋を渡りて、門のほとりまで歸り着きたる時は、二人は既に飛出して、右より左より母に縋りつき、今日もおとなしく留守したる事を、ほこり顔に告ぐるなりけり。

「四」

今日は鐘の音も聴えざりき。子等はいつ歸り散りけむ。母の姿見て待たむ樣なし。だら／＼小坂、茶店の陰、池の端、田の中、何處を今したどり給ふや。
雪の路のさぞ歩みにくゝて、心のみ急ぎ給へど、はかどりかねて居給ふや知れず。せめて門近くの路を開くに、雪掻き捨てずやと、姉の言出るに。それ好しとて妹の勇み立ちぬ。

「五」

妹には毛糸の頭巾あり。姉は前掛もて頭を包みぬ。手に餘る塵取、丈に過ぎる竹箒、しもやけに、わくら葉の如くなる手に手に取りて、二人は庭におりたちぬ。
門までは忽ちに路の開けたり。土橋の雪は小流に掻落しぬ。
田の中の小路に入りて、妹先づ腕のだるきを覺えたれど、母様の歸り給ふ路をつくるなればとて、姉の勵ますにつれ、又一しきり雪を掻きぬ。
既にして姉の方も、いたくつかれにけり。しかも未だ母は歸り來らず。雪は益々降りしきりて、開きたる路を又閉がんとはすなり。
妹は塵取を捨て、泣き出さむ計りに、ふるえ立ちぬ。手のかじけたればなり。姉は急ぎて、妹を抱く樣にし、其氷よりも冷めたき手を、わが懐にさし入れしめつ。既や此所より地藏様の前までは遠からじ。せめて其所まで掻き開かずやとて、勵まし立てぬ。

『六』

さらばとて妹の、手に塵取を再び持ちぬ。唯持ちたるのみにて、妹に從ひぬ。
姉の手も亦、かじかみて、如何とも仕難くなりにき。竹箒を捨て、塵取を捨て、二人は地藏尊の前に相抱

きて、わな〱と打をのゝき、泣くに聲をさへ得立てず。雪益々降りしきり、風さへも加はれり。地藏の肩に積まれたる小石すらも、雪に隱れたり。二人は紫ばめる頬も、赤ばれの手も、今や唯白の一色とのみ變らむとす。

『七』

父は雪に輿を持つ村詩人なりき。母は學校の歸りを廻り路して、某寺の墓地に入り、碑前の雪に、温かき涙をしたゝらして、ぬかづきの石面を見るまでは去らざりき。

母は家に歸りぬ。子は二人とも居らざるに驚き、狂氣の如く走り出しぬ。

路は母を子等の方へ、自然に導きぬ。

母と見るや二人の、初めてこの時、聲をあげて涙出しぬ。

母は、あまりの事に、唯、石地藏の如く立ちて、少時は成さむ樣を知らざりけり。石地藏尊の母に代りて、泣きたげに、之も唯泣たせ給ふ。

雪は益々降りしきりぬ。

（完）

書簡文のはなし

文學士　武島羽衣

書簡文は日記について最普通なる文章であるにもかゝはらず、從來のものにはいろ〱の缺點があつて、これを正しく書かうとすることはなか〱むづかしい。その缺點則人々のおち入りやすい誤謬にもいろいろあるが、次に思ひついた最普通なるものゝ二三をあげて見やう。

○御の字の使ひかた

御といふ字は尊敬の意味をあらはす添へ辭なるとは誰も知つてをる。されば人の物とか人の言語とか人の舉動とかを尊敬していふ時にのみ用ゐるものであつて、自分の事につけて使ふべき言語でないといふとは誰でも知つてをるとてある。しかるに書簡文にはしばしば自分の事をいふのに御といふ字を用ゐることがある。「明日御訪問いたすべし」とか「君に御願ひがあり」

とかいふことは決してめづらしい事ではない。これはちよつと考へると、をかしいやうてはあるが、しかし今日てはさしつかへがないのてある。さうかといふていかなる場合にも自分のことに御といふ言語をそへてよいかといふに、それはさうとはいはれぬ。しからば、いかに判斷したらばよいかといふに、他人の事をいふ時に御といふ言語を附けるのは無論の事、自分の事ても他人に關係してある事をいふ時には、向うの人を尊ぶとからして、其人に關係したるわがしわざや物といふ事からして自分にも御といふ言語を添へるのてある。文法上の言語ていへば向うの人を賓格か副賓格かにもつ自分の事物には御といふ言語をつけてもよいのてある。自分が訪問するのを御訪問といふてよいのは「君を御訪問申すといふ意味て」君をといふ賓格をもつてをる言語てあるからてある。また自分が依賴するを御依賴申すといふてよいのも「君に御依賴申す」といふ意味て、君にといふ副賓格をもつてをる言語てあるからてある。これに反して「先日わが母の家を御訪問いたし候ふ」とはいはぬ。なぜかといふに他人といふ事には何の關係ももたぬからてある。

申すと候ふといふ言語の使ひかた

申すといふのはいふといふ事を謙遜していふ言語てある、これに反していふことを尊敬していふ時のはのたまふといふのてある。てあるから申すといふのは自分がある事をいふ時に使へるけれども、人がいふとには用ゐてはならぬ。「御申しのべの一條は承知いたし候ふ」とか「御申しこしの事につき御返事申しあげ候ふ」などいふのは、本當は正しくないとしらねばならぬ。かゝる場合には「述べたまひし一條」「のたまひこしたまへる事につき」などいふ方がよいのてある。

また候ふといふのはありといふことを謙遜していふ言語てある。その反對て尊敬の意味のあらはれてをるのがおはすてある。されば候ふは申すと同じく自分の事にばかりつけていふのが正しいのに、しば〳〵他人の事につけて用ゐる人がある。

御都合よろしく候はゞ御入來なし下されたく候ふ

などは普通にいふことてある。あるひは

先日おほせ候ひし一條は委細承知いたし候ふ

などもまた誰でもいふ事てある。しかし考へて見ると、都合のよろしいといふのは自分の事てはなくて對者の

事である。その對者の事をいふに候ふとは甚だをかしいてはないか「先日おほせ候ひし」もさやうである、仰せといふは向うの人をさしたのである。その人の働作をいふに候ふとは禮を失したものといはねばならぬ。かやうな塲合には必ず、

御都合よろしくおはせば御入來なし下されたく候ふ。

先日おほせたまひし一條は委細承知いたし候ふ

といはねばならぬ。候ふなどいふはあまりしば〱書簡文中におこつてくる言語であるから人が全く不注意にてすごしてをるけれども、よく注意をしてもらひたい。

一筆申しあげ候ふ

手紙のかきだしに、だれでもこの文句を使用する事であるが、しかしこれはいづれの塲合にも用ゐるべき言語ではなくて、それ〱限つて用ゐるべき塲合がある事を忘れてはならぬ。則一筆とは讀んで字の如して、ほんの一筆といふ義で、おちついて書かず、ほんの口上がはりの一筆といふ事である。であるからいそぎのをりとか、簡略にかくべき塲合とかにのみ書き出すべき言語で、おちついて書くべき手紙や、尊敬すべき人のもとなどにおくる時にかくべき文句ではないのである。

拜啓、しかれば

これもまた、手紙の紋切形で、よくかく文句であるが、はなはだ不得要領の意味である、しかればのしかはさうといふ意味であるからしかればはさうある故にといふ意味である。ところが突然、手紙の初に用ゐられては何を受けてしか則さうといつたのか、すこしもわからぬ。さうある故にといふからには必ずや前にどうあるといふ意味がこねばならぬ。その意味もないのに。突然さうある故にといふのははなはだをかしいてはないか。これは書簡文には必ず除いてもらひたいと思ふのである。

あら〱かしこ

婦人の手紙のおしまひにはしば〱用ゐる言語である。しかし、あら〱といふのはかしこに附く言語ではなくて全然その間は無關係である。それであら〱だけはかしこを限定してをるのではなくて上の文句の

終につく意味てあらうと思ふ。則ある文意をのべ來りて、その文意を十分つくさゞるをいふためにあら〳〵とつゞけていつたので、あら〳〵申しのべ候ふといふ意味を言語を省いてかくいうたのてある。さういつて下にかしこと止めたのてあるからして、爾今はこの言語を用ゐんとするならば、あら〳〵かしことつゞけないてあら〳〵を前の文句の終につき、かしこだけ別にしるしておく方がよいと思ふ。

手紙と書簡

手紙と書簡とは全く同じ意味に用ゐられてをるけれどもよく考ふれば區別がある、書簡は普通の言語てあるからいはずして、手紙の手は手簡、手箱などの手て手ぢかのといふ意味てある。されば取いそぎのをりからとか、立派な紙を用ゐずにすむといふ塲合などには手紙としるしてさしつかへはなけれども、表だゝしい時、十分の敬禮を拂はねばならぬといふやうな時には手紙にかくとはいふべからざることてある。

名流婦人の

處女時代

裁縫と學問

棚橋絢子

私には弟妹が澤山御座いまして、皆私より少年なものばかりで御座いましたから、私が一人で引受けてその世話を致しましたので、それ等の着る衣服は皆私が縫ふてやりますし、妹達には髮も結ふてやらなければならず、お化粧ひもしてやらねばなりませぬので、なかなか忙しう御座いました、書物は性來が好きで御座いましたが、只今申しますやうに、一つは弟妹のもの達の世話に忙しく、又一つには、其頃は女に學問は要が無いと申されて居ります頃でしたから、僅に暇を見ては經典餘師などで……それも初めのうちは師匠に就かず、獨學しましたので、後に弟が奥野小山先生の門に入るやうになりましてから、漸く私も免されて、四書五經の素讀をうけましたやうな譯でした。

愛讀しました書物は、古文眞寳、蒙求などで、中にも古文眞寳のうちには、ちよい〳〵面白い文章が御座い

ますので、よく讀みました。其外には經典餘師、四書五經など讀みましたが、何れも重に素讀ばかりで御座いました。

習字は、女の一つの嗜みで御座いますから、名前位は奇麗に書けねばならぬと思ひましたが、何うも其頃は皆御家流で御座いまして、父などは左樣でしたが：：私は何か最う少し變つた書風をと思ひまして、米庵先生のお弟子でありました、三瓶信庵と申す先生に就いて習ひました。

遊藝は兩親とも出來ましたが、私は餘りさういふことを好みませんので、：：：：それでも松竹梅くらゐは何うにか彈ける位までには成て居りましたが、何しろいろいろ家事の方が忙しう御座いましたので、餘り身も入れませんでした。樂みと申しましては、心學道話を聞きますのが、一等樂みで御座いました。お友達抔と遊びますには、矢張り何か彈いて遊ぶとか致しました。

その頃の希望と申しましても、私どもの若い時分には、「女の兒を持つのは盗人に入られるやうなものだ」とか「女の兒を澤山持てば家の棟がくづれる」とか云はれました頃で、女は誠につまらぬものにされた居りましたから、父などもよくさう申しまして、女の兒程たより無いものは無い、折角丹精して育て上げても、漸く手助けになるやうに成つたかと思ふ頃には、人のところに嫁けなければならぬ、男ならば大きくすれば相談相手にも成るが、女では何うすることも出來ぬから、せめてお嫁に遣るならば、餘り立派でないところに遣つて、折々此方から訪ねて行かれるやうなところにしたいものだと云ふことを申して居りました。それに父もよく申しますことに、女と云ふものは縁付いてから、若し不幸にして夫に早く別れるやうなことでもありますと、誠にみじめな目に逢はねばならぬから、平素萬一にも何うか云ふことの有つた場合に、後で分らぬことの無いやうにして置かねばならぬと申しまして、父は始終家のことは何一つ、自分が居らなくとも不便を感じないやうに、母に打明けて置きました、母も確りいたして居りましたから、何事でも父が留守だからと云つて、分らぬことの無いやうに成て居りました。

て、私も考へますのに、「女は三界に家無し」と云つて、如何しても一人立ちて事を爲ることの出來ぬと云ふのは、誠になさけ無い次第でありますから、何うかして自分は獨立して、一生獨身で暮して、何か一つ爲し既げて見やうかと思ひましたことも度々御座いました

が、又女と生れて終身夫を持たぬといふのは、倫に外れたことて御座いますから、何うにかして假令女と生れても、何處か確りしたところが有るやうに成らねばならぬと考へましたが、學問しやうと思ひましても、おもふやうにまゐりませんし、尤も女でも其頃、學問を專問に修めた方が無いては御座いませんてしたが、さう云ふ人達は詩を作つたりなどしまして、隨分男子も及ばぬ位な破倫の行を致しましたので、さふいふ人達の仲間入りをするのも、餘り好ましく御座いませんてすし、又、父は決して學問させるのを厭つた譯ては有りません、何方かと云へば寧ろ學問させたかつたのかも知れません、自身も書見が好きてありまして、平素は忙しいので、緩々書見も致して居られません身てしたが、雨ても降ります時には、斯う云ふ日には落付いて書見するのが宜しいと申しまして、自身も何か讀みますし、私どもにも勸める位てしたが、何分にも世間が只今申しますやうな時代てありますし、家の方も忙しかつたものてすから、到底も學問に依つて身を立てることは出來ませんてしたので、自分は一層裁縫を取得にして置いたならば、何處へ行つても、衣服を着ぬ國は無いのであるから、今後よし何ういふことが有らうとも、さう困ることも無からうと思ひました、それには縫はねばならぬものが家に何程も有りますし、お針をしてやりますれば、自分が忙しくて落付いて坐つて居ることが出來ませんてしたので、母も大層喜びますものてすから、自分にも張合ひがありまして、勵んて致しましたので、裁縫だけは餘程精出して習つた積りてす。只今は最う餘り致しませんが、遂此頃までは、家内中の縫物は何もかも大抵私一人て、用事の暇を見ては致しましたのてす。

然し、裁縫ばかりでも誠に心細い次第てありますから、何うか心の沙汰になることも疎かに爲まいと思ひまして、之は幼い頃から心學道話てよく聞きましたことてもありますし、自分てもさう氣付きましたので、學問のことは如何なる塲合ても始終心がけて居りました。

結婚いたします塲合にも、夫となる人が學者てありましたから、(記者曰、棚橋先生の夫君は盲人にして、朱子學派の儒者なりき)此人に嫁いだらば、何うか自分も書物を讀むことが出來やうし、又、猶深く修養することが出來るだらうと思ひまして、喜んてまゐつたやうな譯て御座いました。

が、緣付いて見ますれば、子供も出來ますし、引續い

て維新の革命で、財產も國の爲めに差出して了ひ、種種の困難に遭遇ひまして、思ふ樣にはまゐりませんでした、よく只今も家内のものに、若い頃自分の思ふやうに學問するとが出來たならば、今頃は最少し何うにか成て居るであらう、と話しますので御座います。

師の恩

瀬沼夏葉

處女時代の追懷……是程優しい、快い、懷しい感想は又とない、又此の時代の總ての事柄程、一生の記憶の中に、深く刻まれて居るものはないのである。

自分が處女の時代に於て、最も深く心に印象を留めた其れは、終生忘られぬ師の恩である。

自分が丁時八才の頃、鄕里なる高崎の教會へ、今の二コライ大主教が、巡回なされたことがあつた。――自分一家は其頃、高崎正教會の抑の草分、もう疾くに正教信者であつた。――私は母に連れられて、若干の信者等と共に、前橋まで主教閣下を、お迎に出た。馬車の道すがら、主教は自分を甚く愛でられ、膝の上に抱き上られ、而してかく仰せられたのである。

「もう少し大きくなつたらば、東京の駿河臺の我が女學校にお出なさい學問して好い人になりなさい」と、別れに臨んでも又、主教は母に此言を繰返へされた。

其翌年私の母は死んだのである、母は臨終の際に自分を招んで、『屹度お前は東京の女子神學校へ入つて主教樣の側で立派な人になつてお呉れ。』と心に神と主教を賴んで、心安らけく永き眠についたので。

明治十九年、丁度自分が十一才の秋、父に連れられて初めて東京駿河臺の、女子神學校へ入學した。其時分自分の親戚や、知人等は皆密かに自分を冷笑つた、彼の我儘な、お轉婆娘が、如何して一人で東京に放されて、辛抱が出來るものかと。

然し、自分は母の遺言もあり、又學問が好きであつたので、父が別れを心配した程にもなく、涙一滴零しもせずに、父を故鄕に歸したのである。

處が、其年十二月二十五日、試驗が終んだ計りの土曜日の朝まだき、六七人の友達と火鉢に倚つて、蜜柑を食べてゐると、火事だ火事だ！火事だ火事だ！瞬間にして、校中はさながら鼎の沸くが如く、阿鼻喚叫、四十名計りの生徒等は、一際に玄關から、はだしのまゝ戸外に飛び出した。自分も全て夢中で、門をさして湯室の側を走り過ぎた時、もう湯室は一ぱいの火で、黒

煙にほつと計り呼吸を整へられた。門まで來ると、恰度ニコライ主敎が駈け着けられたのに、はたと行遇ふた。數十人の女生徒は、忽ち其周圍を取りまいて、思はず、其の黑の猶太服の裳にすがつて、氣もゆるんでか、聲高く泣き出した。主敎は我等をいたわつて、早く逃げなさい、本館へ——本館とは主敎館のこと——而して自分等は、數人の男の開き得ぬ、中の大門を、主敎の自ら力を限り開かれたのを、後に見ながら、本館さして逃げ去つた。

自分は其時本館の窓から、燄々天に漲つて、今朝まで住んでゐた我校舍の燒け落つるのを、つい終へた計りの試驗の問題の中の、ソドムゴムラの火事の事を聯想しながら、見て泣いてゐた。火が全く消えてから、自分は燒跡へ行つた所、何うしたのか、自分の緋鹿の子の帶の端が、黃色に變つて燒け殘つてゐたのを見たが、何とも云へぬ、心細い思ひがした。

其れから自分は、東京の親類に預けられて、半月計りゐる中、學校の假校舍へ引取られた。

全七年の間、自分は此の學校で敎へ育てられ、十七の年の夏、遂に全科を卒業した。此の間自分は如何計り、主敎閣下の恩と、慈とを感じたか……。

入校してから一年の後、殊に自分は公費生とせられ、折々は衣服までも與へられ、病氣などの折は、むさくるしき自分の室へ、主敎閣下はわざ〳〵尋ねられたことさへある。又、自分は聲が大きく、高く强いので、唱歌隊の中では殊更に、ひゞいて聞える、主敎はそれをいつも興じられて、外國の客など見える時は、乾度自分を引出して紹介して、何か歌へと仰せられる、自分が眞赤になつて、小さくなつてゐるのを見て、手を拍つて笑はれる。よく唱歌の敎師と、自分が衝突して、泣いて訴に行つたことがまゝあつたが、其度、主敎は敎場へわざ〳〵出て來られて、敎師に色々と注意を加へられる。何時の事であつたか、猶且、唱歌の稽古の時、自分等が不從順でもあつたが、何か敎師は癇癪を起して自分等を打つた事がある、勿論强く打つたのではないのであるが、自分等は殘念で堪らず、舍監の女敎師を以て、主敎の許へ訴へた。すると其朝直ぐ、主敎は唱歌の敎師を同道して女學校へお出になり、直接に事の次第を聞取られ、大に唱歌の敎師を責められた。

「お前も子供を有つてゐる、而して自分の子供は可愛いであらう、其れては猶且同じである、此の女生徒等は皆我が子供等である、以後は必らず注意せよ打つて

はならぬぞ」と仰られ、自分の頭を撫て、涙を拭て下さつて『何を泣く』と仰せられた其慈み深き面影。試驗に自分が順番より下つた時などは、奈何云ふ理由て下つたのてあるかと、色々に教師等に問はせられて、御心に掛けられる辱けなさ。卒業して後は、たゞ自分一人、級の中て學校に殘されて、教師となることになつた、これも主教のお陰てあつた。て、自分は實に此の重荷に堪えぬ程の鴻恩を、明けても、暮れても思つては、是非數ならねども此身を犧牲として、受けし師の鴻恩に報いたく思つた。

教師となつてからは、割合に餘暇があつたので、好める文學を研究した、此の時分、「傾國美談」や、『谷間の姫百合』を讀んだ。『靜使者』を讀んで、露西亞に行つて見たいと思つた。「女學雜誌」と云ふ、巖本善治氏の發行された雜誌も愛讀した。自分等の學校からも、明治二十四年の秋から、「裏錦」と云ふ雜誌を發行した、此雜誌に自分は初めから、覺束ない筆を執つてゐた。其後、內田不知庵の『罪と罰』が出たが、自分はそれを見て、是非露西亞文學を研究したいと云ふ望を起した。我等の學校は、男子部の方には露語が入つてゐたが、女子部の方には入つて居らぬ、それて自分はまだ此の時分は、「アズブカ」のAも知らなかつたのてあつた。而して自分は露語を學ぶには、誰を教師として、奈何云ふ方法を取つて、學ばうかなど云ふ問題は考へぬ。云はゞ、まだ其機會が來なかつた。

明治二十七年の四月の末、パスハの祭の過ぎた光明の週間、庭には八重櫻が散りかゝつて、仄白く、薄明い、暖い夕暮、主教閣下は一人の外國人のお客を伴れて、女學校へお出になつた。旋て大廣間の教場のピアノには、蠟燭の火が點されて、舍監の女教師は、生徒と、女教師等を、此の教室に集まるやうに命じた。而して主教は立つて此の客人を紹介した。

「此のお方は、日本の大學のプロフェツソル、ラファエル、グスタヲウヰチ、ケーベルとお仰る先生て、世界一のピアニスト、ルビンシテインの弟子てあつて、ピアノを大層よく彈かれる方てす、それて今何か貴方々に彈いて聞かされる樣に、私が賴みましたから、よく皆樣聞きなさい』あゝ是がケーベル先生て有た……。

ケーベル先生は此時露國民謠、『鶯の歌』、『リゴレット』などを彈かれたのてあるが、たゞ呆氣に取られた許りて、何だか其時の感想は思ひ出せぬ。

其時ニコライ主教は、自分と外に女教師の先輩の二人

とたゞ三人を撰んで、ケーベル先生に弟子となることを頼んだ、先生は快く承知して、毎週、金曜日毎にお出になつて、教授する事を約束された。

何と自分等は幸福であつたらう、思も寄らず斯る教師に就いて、ピアノを學ぶことが出來たとは。其れより全三年、日に二時間づゝピアノを練習した。隨分夢中で、負けぬ氣になつて勉强した、自分の番の時に鈴がチリンと鳴り初めると一所に、駈けだして行つて、ピアノの蓋を明けるのが常であつた。

而して、それからケーベル先生のお出になる度々に、主教も共にお出になつて、自分等に通譯の勞を取つて下された。

明治二十九年の頃は、もう我が文壇でも、大分露西亞文學鼓吹の聲が高まつて、トルストイ、ツルゲーネフ、ドストエフスキイの名は知れ渡つた。其中にツルゲーネフの『片戀』が出た。自分は其れを讀み終つた時、もうどうしても露西亞文學を研究したい念慮が抑へ切れず、其上日頃より、若し能ふべければ、受けし師の恩の萬分の一にも報ひん爲、獨身の生涯を立て、專ら教會の爲に盡さんとの理想を描いてゐたので、さうなれば露西亞文學を研究するにも、大に好都合であることゝ、思ひ切つて、此の由を舍監の女教師に語り、同道して貰ふて主教の許へ行きて、自分の理想を詳に話つた。主教は始終を聞き終つて、優しい冷笑を顔に泛べられ、自身圖書館へ行つて、露西亞語の「アズブカ」の本を取り出して、自分に與へた、自分は其日から、或る親切な教師に就いて、露語を學び初めたので。斯くて一年經つか經たぬに、自分は又此の獨身生活の決心を翻して、結婚を急ぐ心となつた。主教は此の時にも、最も喜ばれて、『貴方の爲にはその方が得策である』と賛成して、色々と力を添へて下された。

自分が紅葉山人に弟子となつたのは、結婚してから二年目で、自分は結婚してからも、露西亞語を研究し、文章を續けて書いてゐた。

芝居好き

岡田八千代

眞面目に這入つた學校と云ふのは富士見小學校位のもので、此處は落第をしないと言ふ計り、級中の意氣地無しでよく皆さんの仲間外れにされました、夫に母が双子の着物に襟を掛けないで着る程可笑しいものは無いと言ふ樣な昔好きでしたから、大抵黑繻子の襟の

掛つた着物を着て、袴を穿くやうになつてからも成可く穿き度くなかつた位で、遅刻はし通し、地理や歴史の筆記は溜り通し、或時なんどは、如何しても書いて行かねばならぬ仕義になつて、夫も其日の朝遠い従姉に當る人と、母とに手傳つて貰つて、自分も泣き乍ら書いて持つて、先生に出した事もございました位ですから、末から二三番でやう／＼卒業したのも無理はございますまい。丁度其高等二三年の頃に紅葉先生の金色夜叉が讀賣へ出だしたと存じますが、確か貫一が病院に這入つてる處へ誰かゞ尋ねて來る處で「あらず、あらず。あらず」と切つてあつた處などは大騒ぎして樂しんだものでした。小學校を出てから何でも生意氣にならぬ學校をと言ふので外の友達一人と職業學校へ這入つて圖畫と裁縫を習ひましたが間も無く畫を刺繍に變へて終ひ、裁縫も上手く行かないので二年間で止して後の一年は刺繍計り遣りましたけれども、その頃はあの學校も今のやうでは無く、袴等は穿くと叱られる位で、御座なども何處でも好きな處へ座つて好いと言ふのですから業の進みやう譯はありません、何時も話しをするか居眠り位なもので、何でも一週に一遍、中島徳藏とか言ふ先生の修身がございましたが、何時も眠つて終ふので、中に剽輕な友達が狂歌のやうなものを書いて遣して能く笑はれた事がございました、其時分丁度矢張り金色夜叉を川上が芝居でやり出した時て、能く川上の身振をしちや廻りの人に話したり、冬の日のお晝の時間などは火鉢の廻りで屹度芝居話しが始まつて、幼さい時から三崎座を見て居ましたので、其女役者の名を言つて好きだの嫌ひだの騒ぐので芝居などを餘り知らぬ生徒などは、酷く驚いて終つて、なんてぇ種々私の身を想像したと見えたんてございますね。とう／＼大野暮の母の事を藝者上りだなど、噂を立てた人もございました、考へて見ると隨分親不孝な譯でございますねえ、覺え違ひか知りませんが、確か其頃讀賣には矢張り紅葉先生の西洋娘氣質が出て居て、島崎さんと言ふ奇麗な奥さのん生徒さんと毎朝其話しをするのを樂しみにしたと存じました。小説は幼さい時から大好で大好で「鐵假面」、「死美人」、「孃一代」などと言ふ譯しものを夢中になつて讀んだ事もありました。最も好んで讀んだ本と言ふのは其頃には無かつたと存じますが、後には鏡花先生のものに大分夢中になりまして、大低な小説好きの友達には讀ませなければ承知が出來ない位でした、其故か妙に變つた異

似がしたくて、暴れて見度くて、始め割烹を習ひに行つたのが緣て、成女學校へ這入つてからなどは、先生の言ふ事などは全て聞かず、曲け拔いて勝手放題、仲間の二三人と其頃ては立ち上つて芝居の眞似をするやら、裁縫の時間には大抵後を向いて小說を讀んて居たやうな始末、其中に其頃から段々流行出した懸賞小說へ出して見度くて出して見度くて、夫ても原稿用紙と言ふものを知らないので、帳面に罫を引いて書いて見た事もございました、けれども何れも之れも鏡花張りて、其中兄が友達に頼んで吳れて始めて、婦人世界へ出た「――」(題を忘れました)なども全て泉先生の下手な聲色を遣つてるやうなのてした。何ても出る人物が蛇が嫌ひて華族が嫌ひて、「之はまた如何したものと言ふやうな文を入れなければ小說にならないと心得て居たのてございますもの、上手くなれやう譯は無かつたのてございます。夫ても紅葉先生も相變らず好きて、金色夜叉の貫一の夢の處を淸方さんがお描になつて烏合會展覽會へお出しになつた例の「貫一は道無き道の木を攀ぢ云々」の處などは競走して暗記するやうな騷ぎてした。其頃迄國文なんてものは少しも存じませんて、此學校て始めて文典も習ひましたし、大鏡、保元物語り、なども敎はりましたが、少し立つともう生意氣になつて終つて、國語の先生が、中返りと書いてあるのをなか返りと讀んだとか、水道尻をみづみち尻と讀んだとか、田舍出の方には仕方の無い事を咎めて騷ぐので、特別撰科の「やつちやん」と言つたら大の憎まれものてした。或先生などは如何言ふ意味からてすか、私とも一人の友達とを捉へて「貴女方は一種の虛無黨てすね」と言つた事もありましたけれども、そんな時なども返事もせずにプンと怒つたものてした。一葉先生のものを一生懸命に讀んだのも其頃て、紫式部を人は賞めるけれども、式部日記には淸少納言の惡口があるからと言つて源氏は明石あたり迄どうやら斯うやら讀んても餘り好きにはならず、淸少納言は、惡く言はれるけれども夫と指して人の惡口を言つて無いからと言ふので枕草紙は繰り返し讀みました、矢張り其頃好んて讀んだのは一茶や蕪村の句集、讀む外に好きだつたのは手紙の遣り取りと芝居位、稽古事も一つ二つは嚙りましたけれど、皆教へる人に依怙贔屓があるやうなのが嫌なので止めて終つて、何れも滿足に出來るものはございません。

愁の曲

北原白秋

あかき木の實

暗きこゝろのあさあけに
あかき木の實ぞほの見ゆる。
しかはあれども晝はまた
君といふ日にわすれしか。
暗きこゝろのゆふぐれに
あかき木の實のほの見ゆる。

瞳

涙ながれぬ君が頬に、
涙ながれぬ、すべもなく、
かくてゆふぐれ、ほのぼのと
瞳むかへる君みれば
わかき心のわが姿
ほのかに濡れてうち顫ふ。

とらはれ

心も空もうるはしく
あこがれそめしわが戀よ。
さあれ、薄闇ほのぼのと
牧の光も消えゆけば、
青き獸のにほひして
かすかに顫へかへりくる、
あゝとらはれのわが戀よ。

かへりみ

みかへりぬふたたびみたび
暮れてゆく歩のこゝろ
なにか欲り、さしもたゆたふ。
あはれ、きけ、野邊の番紅花
はや紅きにほひに滿つを。

青き愁

嘆けよ、青き實の色に、
また日に燃ゆる青柏
その葉にむせぶかなしみを。
嘆けよ、玻璃に、さと觸れて
たちまち頻吹く火の酒を。
嘆けよ、わかき接吻に
はじめて顫ふわが胸を。

that the King of the country was hunting and his huntsmen came to the tree on which the maiden was sitting. They called to her and said,—

"Who are you?" But she made no answer. "Come down to us." said they. "We will not do you any harm." She only shook her head. As they kept on talking she threw her golden necklace down to them, and thought to content them thus. They kept on asking her, and then she threw her girdle down to them; and as this did not help matters, she threw down one pretty thing after another. At last the huntsmen climbed the tree and fetched the maiden down, and let her before the King. The King asked,—

"Who are you? What are you doing in the tree?" But she did not answer. He put the question in every language he know, but she was as mute as a fish. As she was so beautiful, the King's heart was touched. He put his mantle on her, took her on his horse, and carried her to his castle.

(continued)

君主出獵し，從者は廻り走りて，終に少女の樹下に來り一齊に呼はりて

誰なるぞと問へど，何の返事もなし.『降りておいで，決して何ともしないから』と云へば，少女は左右に頭をふりて肯せず。却て金の頸環を取りて狩者に投げつけ彼等に滿足を與へんと謀りたるものゝ如し。下よりは尙呼びつゝけ居りければ，次に少女は帶を投げよこし，其にても何のよき結果なきを見てとりたる彼は，其よ，これと，身につけし美はしき品を悉皆投與せり。終に狩者の一人樹に上りて皇女を捕へ，彼を木よりおろして，王の前に引き出せり。

王は又

『御前は何と云ふ名か？樹上にて何を熱心になし居りしや』と尋ぬるも返事せず．王は彼の知り居る丈に多國の言語にて尋ねしが彼女は魚の如く何も默然たり。彼女は又美人なりけるに王の心動き，彼女に己が外套を被せ馬上に置きて宮殿に伴ひたり。

（つゞく）

"No," they replied, "only for one quarter of an hour each evening can we lay aside our swan's skins and have our real bodies; after that, we are once more turned into swans."

"Can you not be set free?" said the girl weeping.

"Alas, no, the way is too hard! For six years you may not speak nor laugh, and in that time you must sew together six little shirts of starwort for us. And if one single word fall from your lips, all your work will be lost." And when the brothers said this, the quarter of an hour was over, and they flew out of the window again as swans.

Now the maiden said to herself she would set her brothers free if it cost her life. So left the hut and went into the midst of the wood, climbed up into a tree, and there passed the night. Next morning she went out and gathered starwort and began to sew. She could not speak to any one, and did not wish to laugh; she sat there and looked at nothing but her work.

When she had already spent a long time there, it happened

『出來ないのだ．我々共は毎夜只十五分間丈烏の形を去りて本躰になるを許可されて居るだけだ，其時間が過ぎると，又直に白烏に變化する浮身である。』

『自由の身になられないのですか』と少女は涙ながらに問へり。

『嗚呼，悲しい事だ，然うなる道は在つても六ヶ敷から駄目だらう。其は若しお前が六年間笑もせず，一言も口をきかず，其間に我等の爲に星葉草にて，六枚の襯衣を縫ひ呉れると人間に復へれるが，併し其に着手しても中途にして一言でもお前の口から出たら，勞力皆無駄になつて仕舞ふのだ。』かく物語り居る中に，既に時間の迫りて兄等は烏となりて窓より飛び去れり。

處女は假令己が命をかけても，兄等を元の身にせんものをと心にて誓ひ，小屋を出て，森中に入り木上に一夜を明したり。翌朝處々を歩みて星葉草を採集し，襯衣を縫ひ初むるも愛らしゝ。

彼女は誰とも談る事能はぬ上に，又笑ふ事勿れかしと念じつゝ，樹上に座して，仕事の外何事にも注目せず，熱心不亂に働けり。

暫らくかくの如き生涯を一所に送り居けるが，某日其國の

The Six Swans.

No. II.

The King was sad, but he did not think the Queen had done this wicked deed, so he wanted to take the girl away with him. But she was afraid of the Queen and begged the King to let her stay just this one night more in the castle. The poor girl thought,—"I can no longer stay here. I will go and seek my brothers." When night came she ran away and walked and walked without stopping until she could not go one step farther. Then she saw a hut and went into it. and found a room with six little beds. She crept under one of them and there on the hard ground she meant to lie all night, but just before sunset she heard wings, and saw six swans come flying in at the window. They dropped to the ground and blew at each other, and blew all the feathers off. Then the maiden looked at them and knew her brothers, and was glad and crept forth from under the bed.

"You cannot stay here," they said to her. "This is a robber's hut; if they find you, they will kill you."

"But can you not take care of me?" asked the little sister.

六羽の白鳥

其二

王傷く愁を催したれど，皇后斯る陰謀を廻らせりとは氣付かづして，皇女を宮殿に伴ひ歸らんとせり．然れども女は后を恐るゝ事甚しく，何卒今一夜を此住家に明かさせ給へと懇願し，思ひけるは，我最早此處に止るべきに非ず，いざ行きて兄上等の行衛を尋ねばやと。其夜彼女は家を出て，霎時も休憩する事なくして，終に一歩も進み得ぬまで所々を徘徊せり。既にして淋しき庵あるを見，急ぎ其内に入れば，六個の寐台の裝置しある一室あり，彼女は寢台の下に這ひこみて，硬き床上に一夜を送らばやと思ひしが，丁度曉前に何やら羽擊の音するにぞ注目すれば，六羽の白鳥飛入り來りて相互に吹合ひて羽毛を悉皆吹落したり．少女は熟見すれば己が兄上等たるに氣付きて寢台の下より喜び踊り出てきぬ。

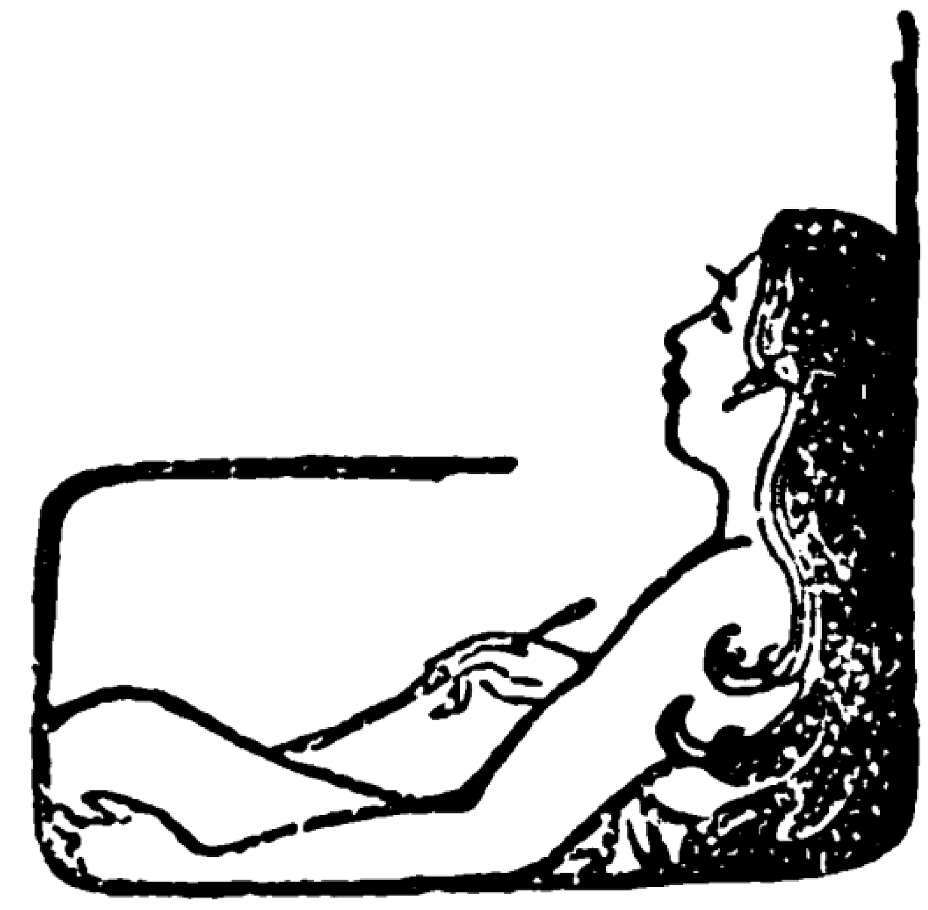
『爰に居ては大變だ．此は盜賊の巢なれば，見付けられると，直ぐ殺されるよ』と兄等は云へり。

『貴兄樣方が私を保護して下さらないのですか。』

英　　文

（第四年第三回）

女子英學塾講師 河井道子



God's Garden

Saints are God's flowers,
fragrant souls
That His own hand hath
planted,
Not in some far-off heavenly
place,
But here and there
and everywhere,—
In lonely field, or crowded town,
God sees a flower when He
looks down.

Some wear the lily's stainless
white,
And some the rose of passion,
And some the violets heavenly
blue,
But each in its own fashion,
With silent bloom and soft
perfume,
Is praising Him who from above
Beholds each lifted face of love.

(Henry van Dyke)

神の園

聖者は凡て　神の花
薫床しき　淸靈ぞ,
神自からが　手植しは,
幽遠たるの　天ならず,
あるは閑雅の　仙境ならで,
此處や彼處と　何處にも,—
淋しき野や　道,衢,
神の下界を　見給へば,
花ぞ咲なれ　薫るなれ。

あるは汚點なき　白百合や
赤き情の　薔薇の花,
蒼天似たる　菫花など
思ひ思ひに　咲香ひ
愛のはんばせ　高きより
み給ふ神を
稱ふなり。

文學雜誌一口評

▲早稻田文學　十年前の早稻田文學は春の舍おぼろ氏の全盛期、今の早稻田文學は島村抱月氏の全盛期、前期の早稻田文學は近松を明治に復興せしめ、沙翁を日本に紹介した、今の早稻田文學は自然主義鼓吹の先頭となつた、兎に角、文藝上には意義ある活動をするが、早稻田の早稻田らしさにほひは段々に除くやうにしたらなほ雜誌が大きく見えるだらう。

▲帝國文學　何と言ても論說には貫目がある、其手習草紙的の雜報には折々力んでみるが一向世間ては對手にしない、海外騷壇は有益の文字もある、創作は振はない、賣らうと云ふつもりで編輯する雜誌てないから全體にさつぱりして嫌味の無いのは確かだ。

▲新小說　盛衰はあるが文壇の檜舞臺たる品位は保つてゐる、新しい作家も歡迎せねばならず、古い作家も捨てられないと云ふので、編輯が垢拔しない、古座敷を處々變更したやうて見ともない、けれども大勢は爭はれない、此雜誌が存續されてゆくなら、追々に面目が改まつてゆくてあらう。

▲文章世界　世に出て日は淺いが發行所が發行所だけに早くも文壇の一勢力となつた、記事の項目の選び方も良く、後進にも便利だし、先進の人も一寸見ずには居られない、時々鼻息の荒い氣焰も吐く、昔の文藝共進會や筆戰場が合併されて、文藝倶樂部となつたやうに、文章世界の將來は文藝倶樂部の位置に直るべきものであらう。

▲中央公論　元來は文學雜誌てない筈てあつたが、今の文學雜誌として重きを置かれてゐる、年に二三回の增刊に小說を載せるからてあらう、それも問題になるやうな作を載せるだけ此雜誌が文學に重きを置て居ることが分る、併し何處となく偏り過ぎた雜誌て、すみずみまて手が達いてゐない。

▲明星　詩歌中心で起つた雜誌としては舊い方てあるから、名前は知られてゐるが、其割に博く讀まれてゐない、博く讀まれることを目的としてゐない、雜誌の中ては最も高踏派に屬する、或る側には潛かに恐れられて居るかも知れぬ、缺點は濕ひが乏しいやうに思はれる。

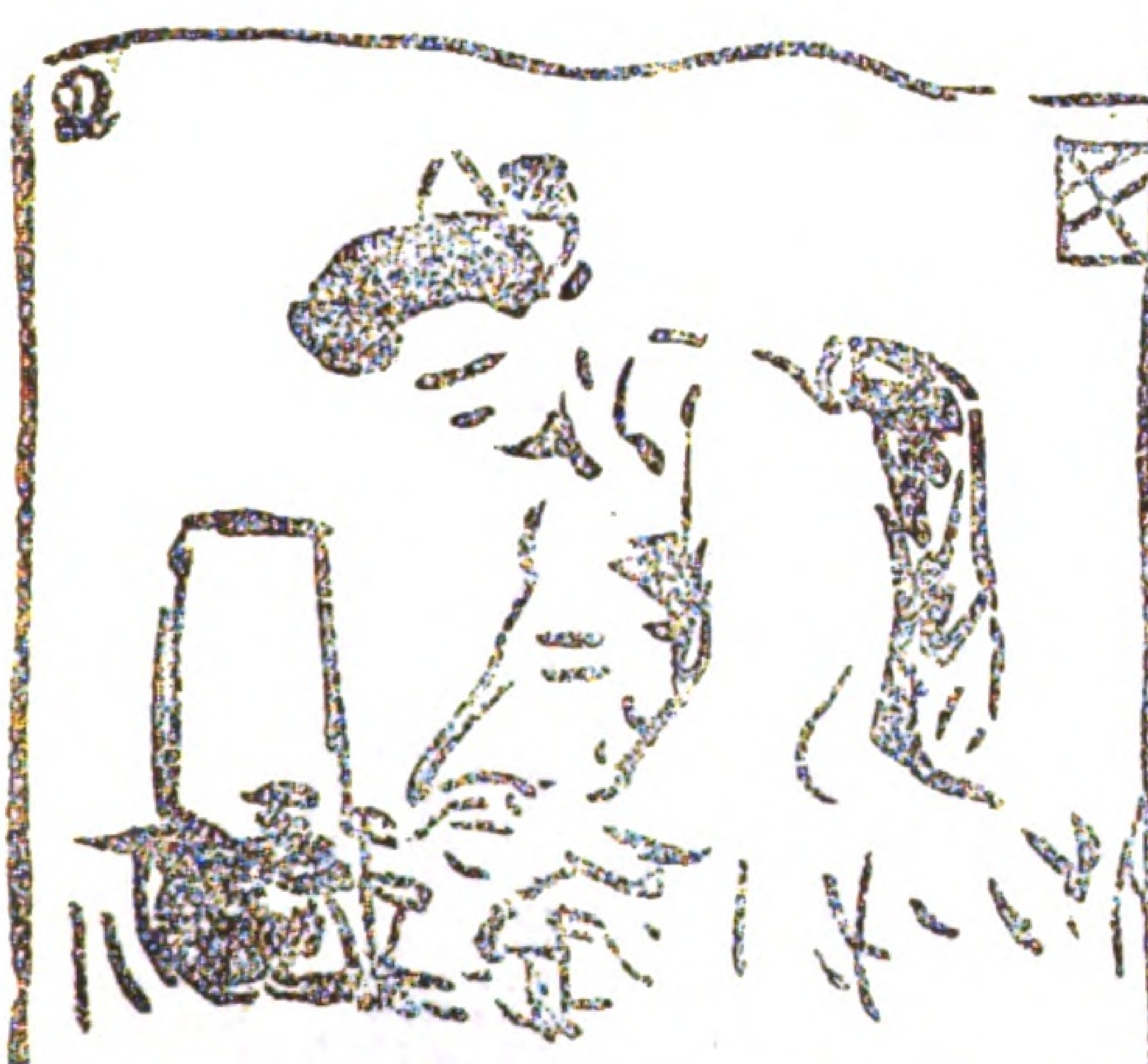
▲趣味　評判が好かつたり、不良かつたり一向要領を得ないが、未だ確とした土臺が出來て居ない、編輯の骨折は能く見えて居る。

（山頭火）

山中古洞先生選

當選繪畫（其四）









(1) 船の音（二等） 川邊郡尼ケ崎西町濱四丁目尼崎方 豊子

(2) つみくさ（三等） 名古屋市押方町七丁目淺井方 きよし

(3) 曙（四等） 府下八王子停車場前 乙幡もん子

(4) 梅見（五等） 三重縣桑名町大字三の丸 加藤つたへ



美文

編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採録す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

二等　○朧夜

攝津國河宮町字池田　露子

「やあハレなあ」と一齊に調子を合せて、揃ひの半被にそろひの笠、掛聲勇ましく菜の花道を簞笥が三棹、長持が一棹、つり臺が二個何れも蒔金の油單をかけて今しも提灯の光りきらきらと繰出す處である。

「もう時刻でムいますから」と付添の人と仲人にせきたてられて、土地柄とて美々敷装ふた馬の背に、扶け乘せられた私は、唯もう夢心地で人々が云ふ儘に人形のやうに動いて、生家の玄關を離れたのである。

そこ〻の櫻の梢は今が最盛りで、吹くとしもなき夜風にそよりと花の香が漂てきては云ひ知らぬ一種の思ひを抱かせる、門の外には見物の人達が黑山のやう、「それお嫁さんだ」「まあ繪のやうね」「い〻模樣ぢやないか」「彼方はお大盡てお聟はよい男とやら、仕合せね」など〻口々に云ひ囃すのが耳にはいる、私はさらでも恥しい此場合さつと顏を染めて、角かくしま深な面を愈ふせた、よそ目にはそんなに樂しくみえるか、きけばお姑樣は非常に嚴しい方で夫は沈む事の大嫌ひな方とやら、私をと云ひ出したも深く家柄や氣質を調べた譯ではなく、ほんの友達と遊んで居るのを見ての出來心とやら、さすれば末のほども案じられて私は此の緣談望ましからぬのだが、折角こ〻迄運んだを私故に老父母の心を痛めるがつらく、運命と諦めて今宵の仕儀だが…………

ほろりとなると花片がヒラ〱と袖に散つた、よしどんな難關に望むとも構へて誠心を以て事へて再び此門をくゞるやうな事はしまいと屹と思案をして靜かに見返つた。誰れやら二階の障子をあけて此方を眺めて居る、母樣ではあるまいか。

白襟をいくつも重ねて箱せこを挾んだ小さな胸は色々な思ひに波たつ、長い鎖の末に舞つてる金の蝶の翼に今落した一雫が宿つて光つて居る、私はソッと拂つた、そして芽出度い今夜を泣く者があるものかと、氣を靜めれば駒の鈴の音シャン〱と先き手の荷かつぎの音頭と相和して、どよめく群集の中を推わけてゆくのである。

嫁入の夜、誰が書いても眞を描したならそれ〲の感じは生動するであらう、此作或は眞ではないかも知れないが、文の妙は其夜の花嫁御みな彷彿せしむる、藝術の技、到れるもの（評）

三等

○原稿

周防國熊毛郡呼坂局内　熊野縫子

「まだ寝ないか」とおそろしいお父樣の御聲、「はい今すぐ、も少し、之がすみましたなれば」一おづ〳〵しながら一生懸命筆を走らして居る「何をするんてすかと叔父樣の御こゑ「なあにあくとうだ又姉奴が樣にならうと思つて」と餘りの事に悄なく思つた、姉さまは編物がお好なので寒い夜でも一時頃までもお稽古なさつたせいか遂々お逝り遊ばした、それでお父樣は夜の仕事をひどく御止めなさるにもかゝはらず、私は讀書がすきなので常に夜をふかす、それて益々お腹立あゝいつその事止さうかとも思つたけれど、どうして今夜は原稿をつゞるので、明日一日中に出さねば期限がきれる心をはげましては筆をはこぶ。

お母樣が「才氣がありますので學資にさへさしつかへまんねば彼子も」「ばかなつ」とお父樣は常に御しかり遊ばす。

私は世にも奇妙に書物が好て、皆樣と一所に女學校へ行けない代りに、お二人から少しづゝ戴いたお小遣は皆本にする、髪かざり一つ買ひは仕ない、御祭禮とか御縁日だとか御友だちから誘はれたつて、一度も行つた事はない、其間も本をよむ朝に晩に暇さへあれば本びたり、けれどまだ〳〵あきたらぬ、書物は私の爲めには無二の娯樂なので若し書物が讀まれない日にはいつそ死んだ方がましだと思ふ程です、けれど御父樣はちつとも私の心を察して下さらない、書物は毒だ書物は止めよと口ぐせの樣におつしやる、いきなり讀みさしの雜誌を取り上げられた事も幾度か知れない、今夜も常だつたらどんなに遊ばすかも知れないけれど叔父さまの手前も早お休み遊ばしたか何の御聲も聞えない「早くお休みよ」ふつとあかりをおけし遊ばしたお母樣は其まゝごろりとお横に、續いて聞ゆる鼾の音、妹弟は白川夜舟。

あたりが靜まるに從つて燈心の音が一層高くなつた樣な心地がして何となくさびしさを呼ぶ、冷い手先足袋の先まて氷つた、足指、犇々とせまる寒さにすき間もる風が遠慮なくつめかける、畫のつかれて身動きも出來ないようになえた體がだるくなり、目も次第にかすみ出した、いつとはなしに自分が自分の樣てなくなり氣が遠くなつて暫くは夢中てあつた、遠くの方て蒸氣の音竊いてキーキー水車がきしる、やう〳〵仕上げて「あーつ」とあくびまじりに立上つた、とたんに柱時計がチン〳〵安心したせいか思はず足もとがよろめいた。

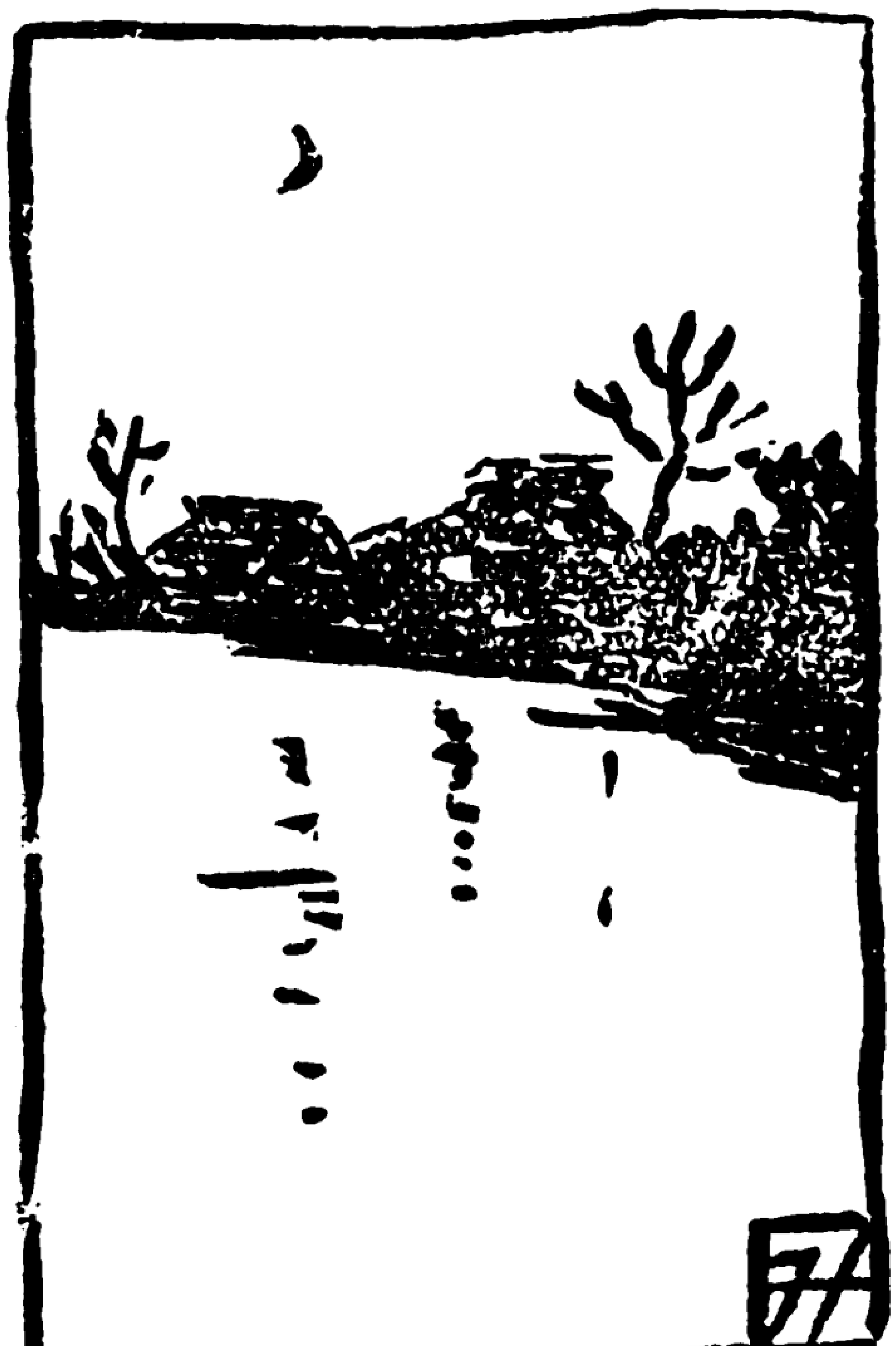
同感の方が多さうだ（評）

四等

○ねられぬ夜

播磨國明石上之丸辻川方　落葉子

「チリンチリン」べるが鳴つたかと思ふと、スツと電氣燈が消えてしまつた、室の者一同は、「お休みなさいませ」と挨拶してあわてゝ毛布の中へもぐり込んだ。寒いので誰も話なんかする者はない。ガタガタといふ音に驚くと、舍監先生がおまはりなすつたので、だんだん響は小さくなり終には聞えなくなつた。もう夢路についた人もあるらしい。しんとして室内には何んの音もなく、寂寞は身に迫つてくる。偶々音があると思へば人丸山の嵐が硝子窓を襲ふのである。窓掛の間からは青白い月の光がのぞいて居る計、早く眠ろうと思へば思ふ程目が冴えてくる。眞黒な天井を見つめて居ると、何だか變なものが書いてあるよう、折柄夜警の柝の音が寒くきこえて、あとはいよいよ静まりかへつて、かすかに聞える波の音が、何ともいへぬ程淋しい。こうして居るといらぬ事まで考へだす。考はあれから之れへと移つてくる、犬が長く聲をつゞけて、ないたので、また考へだした「そう、そう、今から八年前、私が七つになつたときだつた、丁度今晩のような淋しい晩で、頻りに犬が吠えるのであつたよ、お祖母さんが「もうお休み」と仰るが、どうしてか寝られない。炬燵にあたつて姉さんと話をして心細い事をいふて居たがちよつと眠つたら夢を驚かしたのは、お祖母さんの聲だつた。「早く」とひつぱられて、ぶらぶらしながら來たのは、母さんの蓐の傍、あゝ之が。私が、この世に出てからの、一等悲しい事である。「お水をのませておあげよ」、といはれて、何氣なしに水をあげたが、もう「駄目だつて」いふ事だから、一寸と母さんの面を見た計で、姉さんも、私も、泣き崩れた。「もう泣たつて仕方がない。泣くと地獄へ行くといふ事だからもうおりこうにして、居らつしやいよ」、と慰められつつ夜を更した。あたりは何の音もなく、寒い夜の風が障子をおとづれて、犬の吠える聲がかすかにきこえて、ほんとうに今夜も、一寸とも違はないんだつた。もう思ふまい、涙の種だから、と枕をかへすと、たいそう



池畔寒月

三河　近藤達江子

紙が濕つて居た。「あゝお母さんは、どんな顔か忘れてしまつた。面長て、はえぎはなんか、私に生き寫しだつたそうな、今は寫眞もないから、どんなにいつたつて見られやしない」、と天井を見ると、何だか亡き母上の顔が、見へるようてある。おゝ寒い事と中へ引き込むと、嵐が、ガタガタと、窓を拂ふ音が、たいへん凄くきこえる。

幽懷の惑、身に迫る、夜のさまが能く表はれてゐる（評）

五等 ○植つけ

下谷區徒士町一ノ七　橋本なみ子

私と美代さんと二人て苗を植ゑてる山懷は、だら〳〵同じやうな勾配て、小さく穿たれた穴に一尺あまりの杉苗を挿しては土を覆ひ、兩手て丁寧に根元を抑つけ斯うして一本植ゑ終ると次々の穴へと植ゑて行くのてす。餘り傾斜の急てない山の懷の苅られた萱の根、笹の株の隙間々々に野薊の愛らしいのが一面に咲いて、それに蒲公英の黄い花も雜つてる。其の裾の谷近くに生ひ茂つた樅や樫の林まて、ところ〳〵伐り殘された杉の木が立つてる外は目を遮るものとて無い。谷を距て、向ふは小山が幾つとなく斷えては續き、杉山の間に萱山が見え、眞黑な燒山が又其の間からヒヨイ〳〵顔を出して居る。

今美代さんは美しい聲て唄を歌ひながら稍平らな山の窪みへ植ゑ進んてる。見ると新しい苗を濡菰の下から取つてる所。休まなくてと云へば、中腰になつた美代さんは苗を手にしたまゝ此方を見返り、あゝ休みませうとも――おや知らない間に隨分背の方から下りて來た事ねえ、といつて足下に氣を付けながら來る。姐樣被りにして居た新しい手拭を外して、其手て腰の邊を輕くたゝき乍ら、傍へ腰を下し、こゝらが痛い事ねえと云ふ、美代さんは手拭て頻りに汗を拭いてる、妾は美代さんの髮の桃色の根掛がうつりのよいのに茫然見惚れる。露ちやん、隨分好い景色ね、と美代さんは手拭を持つた手て遙か向ふを指さす。八重の汐路を立ち罩めた暢川浦は、春まだ淺い霞の羅衣、ほの紫に輝いて居る、と三郎翁やが背負梯子に濡菰で包んだ杉苗を澤山括りつけたのを擔つて、ヨタ〳〵滑るまい〳〵と用心しながら下りて來るのが見える。おや翁やが來てよと美代さんが云ふ、妾は只うなづいてチッと見て居る。と石につまづいたかタヂ〳〵と蹌踉めいて、苗包の重みて仰向に倒れる、龜の子のやうにモガ〳〵やりながら呀ッ〳〵と云つてる。おほゝゝと二人一緒に笑ふ。ヤッと起きた、ヤアエラ面白さうに笑つてるだなと大聲て叫びながら近寄て來る。美代さんは聲を放つて笑ひこける。三郎翁は鳥打帽子を脱いて頭の汗を拭きながら、ドラ己も仲間入りしべいと云ふ。踞まうとして又蹌踉く。マア小父さん、おほゝゝと又美代さんは笑ひ

崩れて妾を見る、妾も思はず笑ひ出す。翁やは濟したもの、美代さんの側へ背負梯子を外す、尻を下す、腰を摺つて恐ろしい細長い巾着を出す。中に煙草と煙管と同居してる。スパリ〳〵と鼻から出る白い煙がいかにも暢氣さうだ。彼是十一時だんべい、と云つて吸殼を掌に受けてコロ〳〵廻す、詰更へた煙管て又ふうと吸ふ。又詰め更へる、やがて何か思ひ附いたかニコ〳〵しながら顔を上げる、白い煙がゆるく昇る。さうやつて並んでる所は全然姉妹だなア、と云ひながら梯子の棒へトントン煙管を磕く。美代さアも早く好さんのお嫁になつて赤ん坊てもこしらへて母親に安心させるがいゝ、露さんには此上なしの好い義姉様だ、あはゝゝ美代さん待遠しかんべ、と笑ひながら美代さんの横顔をのぞく。マア小父さん……と美代さんは眞白い顔をパッと紅に染める。妾も微笑れてヂッと美しい美代さんの顔を見る。向ふの峰で大木を伐り倒したらしい高い響がドンと聞えた。野雲雀は先刻から蒼空で高く囀き頻つてる。

前中、杉苗を山に植る處は實地を見るやうで面白かつた、後に露やの描寫は少し詳し過ぎて、くどくなつた（評）

秀逸

○月下の譜

本所　秋山欣子

晴れたる中秋の夜の大空、稻の香高う風かをりて、籬の揺めき、靜かなる夜なり。

此まゝに寐んも惜しとて、伏屋を出でゝ、芒野に立つ苔滑らかなる岩角に身を凭せ、つと見返れば、吾が住む里の灯、夢の如うまたゝきて、木立まだらの産土の森、板庇破れたる社もほの見ゆ。

花と生れて摘まれぬ花は
露にうつむく桔梗の花か……

清く、つゝやかなる聲は、岩の後ろや杉木立のあたりに餘韻長う。例はゞ、渦まいて洞に流れ入る峽の雪解水のむせびの、やゝにかすれ行くそれ〳〵。

流星の如、すだま返すは、水あるべしと覺えたれば、立ちて雜草を踏み分けんとしぬ。

高き〳〵梢に、名知らぬ鳥ほろ〳〵となく、何の實かはしらず、がさ〳〵と木の葉にすりて、がさりと落ちぬかくて、覺束なげの一筋道はうねり〳〵て、とある小さき池のほとりへと出でぬ。

花と生れて……花は
露にうつむく……

凝綠凄き池の底にひゞくは、まがうべうもあらぬ先の聲なり。

さびしらの山の夜や、一鳥なかず、雲行かず、何物か、物の怪の迫り來るやうに覺えて、心にもあらず、たじろぎぬ。

深しといふにあらず、さはれ池なり、樹々の翠色水に落ちて、葉洩りの月光青白う、咒ふが如く、波の面に照りぬ、おぼろながら、しぶきして、落つる水の音たかきあたりに、去りし夜の夢とも、とらへがたきは、オ、堪えがたき其聲なるよ。

　花と生れて摘まれぬ……

　　露に……

あとは一しほ高まりし水音に聞えずなりぬ。

再はまた。

折れやせんと紫苑の花をよけて、聲止みし方へ二三歩觀る池の面、月の光はいよゝ澄みて、水草の影文なす水の色にも、永刧開くまじき水の底にも、それよ、秘めつるは、何の影!!!

水靜かなる幾星霜、花は咲けど、人は逝けど、常とはに千古の影を湛へて、懷かしげなる池の面はよ。

落葉かく子の影も見ぬ山路の裾にて、ゆくりなくも耳にせし歌の一ふし、怪しと胸に秘めつゝも、かたみに摘みし月見草一もと、かざしつゝ歸る花野路、露かおきし、我袖はたゞならず。

さびしらの秋の夜や、千草の精のぬけ出てゝ、雲はるけく、桔梗が原の月を歌ひしにはあらざる?…。

　所謂美文式の型に入り過ぎて、文字に使はれる氣味がある、能文には相違ないけれど(評)

○溫泉の宿

本所　田中久子

夢のやうに淡くこめた夕靄の中から、かすかに鈴の音が聞える、と思つてゐる內に櫻にかこまれた山あひの坂路を、馬の姿が見えて來た。淡く淡く、うす絹の外から見る墨繪のやうな馬子は、宿の前迄來るとハタと止る……「ふたばや」と筆太に書かれた行燈が高く軒に立てられて石のでこぼこな下の路をうすく照してゐる……と其處に馬が繋がれて馬子は向側の草鞋賣る店の暗い軒をくゞつた。

ヒヽンと高い嘶きは暖い春の靄の中を流れて向ふの山へ當ると又、櫻の下枝をくゞつて戻つた。湯の香とまじつてえならぬ人こひしさを覺えしめる夕である。木も草もみんな〳〵うすものに包まれて天地には今、香ばしい香が滿ちてゐるやう。

此度は淋しい溫泉の宿の夕に待つ人もなき身ながら何故か、小さい胸がわく〳〵躍つて椽の柱に倚つたまゝ一つに溶けて、母君在ます都の空へ、あゝ流れて行つても了ひたい。

ばさり、と小さな音がした、そと振向けば一枚あいた障子の中には長行燈が明く燈つて主なき枕の、たゞわびしげに緋房を垂れてゐる。斜に置かれた座ぶとんの上に開かれた儘の繪卷もの、あゝ其上に白い蛾でも居

だものなら……。ゴトッといつて、格子から束ね髪の姉様が上つてゐらしつた。痩せた頬に、夫でもうすく血の色を見せて、下げた手拭から湯の香が立つうつとりとしてみ上げた空の、果てには細い月が登つて淡い光に照らし出されたお肩のあたりほつそりと。お納戸縮緬のお羽織が今にも落ちさう。だまつて、うつむいて、障子の中へお入りなすつた。

雨降り　遠江　原木富美子



姉様にだつて都の空がこひしい夕べだらうに……。

をちには急に鈴の音が響いて此坂路を登つて來た。馬子が二人馬が二匹、宿場へ歸る馬子歌の節を揃へて、十日許りの淡い月光に包れた山を越えて行く。

山を下り切つた麓の里には若い妻がきつと待つて居るのであらう。

艷麗、寧ろ小說の部に屬すべきもの（評）

○夜の室

三重縣　北村みつ子

細い火影を見注めて居る　と、燭のほの赤い蕋はぢぢと音して消えかける。消えかけてはぽつと明るく、何だか恐ろしい心地がひし〲と寄せる。

窓の外てはばさりと音がした。夜だと思ふと厭に蕋氣になつて、其のぽつ〲とする燭の火が、かへつて空恐ろしいのでふつと消した。消すと眼の前の赤やら黄やら、紫やら、さま〲の色した小さい玉が、いく千萬とも知らず、ぐる〲とあたりに一ぱいふらついてる。人が死んで終ふと、肉は勿論水やら土やら、いろ〲に返つて跡もないが、靈はぱつと空間へ離散して、霧のやうな細かいものになるのでせう、生前に見た紅のふり袖、むらさきの帶、こんなで印象が何時何時までも靈にくッついて、天地が眠る夜になると、かうしたさま〲の小玉、さま〲色の小さなものになつて、世の中へ一ぱいぐる〲とめぐつてるのでせう。

恐ろしいと思つて眼を閉ぢる。閉ぢる程はッきり眼に浮かんだ玉の紅いのが一ばん眼につく。

其れがすッと流れる、流れては亦元に返へる。
　窓の外では亦ばさ〳〵と音する。木の葉が落ちる音てせう。——百本の小針でチョク〳〵とつゝかれるやうに、空恐ろしい感情が何うしても去らない。蒲團をこッぽり頭からかつぐと、今日結つてもらつた鹿の子の髷が乱れる。鹿の子！と思ふにつけ、亦しても紅い小玉が思ひ出されて、堪らず燐に火をつけた頃にはもう、障子が白らむ。
　鐘が鳴る。
　ばさりと木の葉が落ちる。とこんな事を思つたのです。人の靈の小さい小珠の外に、小さな銀色をした齒を持つた夜の魔、鬼のやうな顔した一寸位の魔が、小さな人の靈——紅やら黄やらいろ〳〵の玉を喰はうと思つて追ひ廻はす。こんな事の爲めに人なつかしうて、種々の珠が人のあたりに來るのでせう。
　鐘が鳴る。　と夜の魔はかくれ家にした木々の葉うらへ、一時に秘そんで、さて口惜しさに銀の鋭い〳〵齒て深く葉の根へ嚙みつく、葉が落ちる。からして秋から冬へ掛けて毎夜一葉づゝ、がり〳〵と喰ひ落した葉はうづ高う、落葉となつて淋しい音を立てるのてせう。　とこんな事を思つて、まんぢりともせずに、おのゝきながら障子を見ると、
　雀の影がつと…………
　夜は明ける。

神秘的な冥想も好いが此れては想像の奇を弄したと云ふに過ぎない事がらより意味に奇を示してもらひたい（評）

○短夜

深川　白百合子

オヤ今のは何時なの、花や氣の毒だけれど一寸見て頂戴な、……オヽ、まあ、もう十二時になつて、私はまだヤット十時頃と思つて居つたのよだつて今しがた美ちやんをねかしたばかりのような氣がするのですものなんて夜が短いのでせうねえ。私は自分の勝手て好きな文壇を見て居たのてちつとも眠くなかつたけれど花やはねえ晝のつかれてさぞ……あらいやだそう云つている内からもうホヽヽヽそんなにおじぎをしないでもよくつてよ。さあ早く其のお仕事をおかたづけなさいそして早くねませうねえ、あの、お母樣はさつきお寢みになつて、そう、ほんとうに花や濟まなかつたのねえ私の爲にこんな夜更しさせてゆるして頂戴よ

生氣あり（評）

○登校の途

甲變　網野矢壽子

朝ご飯を終つて日常の如くお仕事に就いた、すると表の方で何やら可愛らしい話聲がする、そと障子を押し開いて見ると年の頃八九才の小女學生てあつた。私は餘りの可愛らしさに遂見惚れて居た、すると「お美代樣のご本は私が持ちますは」「そんなら私お辨當を持つて上げるわ」と方々より宛ら女王の如くかしづか

れて居るのは村で第一の資産家の令嬢である。ふつさりと下げた黒髮をば巾廣きリボンをもつて結び矢絣の小袖に友禪の被布を羽織つて居る、迯の友を横目にあしらひつゝいと殿に歩を運んで居る。

折しも少し後ればせにいきせき駈けて來たのは同じ年ばえの子である、身には幾所か繼の當つた衣を着ては居れども目のパツチリとした口元の引きしまつた何處やら凛とした處がある「皆樣お早ふ……私いつも遲くつて」とやさしくいふと、お美代樣は矢張り横目で「時ちやんはいつも遲いのね　又今朝も野菜を賣り歩いて居たんでしよう」と如何にも意地惡るそうにおつしやる、時ちやんは「エヽ」と恥かしそうにうつむいたと思ふと何時しかしく／＼と泣き出した、するとお美代樣はさあ皆樣參りませうと外の友を引き連れてさつさつと大急ぎに去つてしまつた。

後に時ちやんは只一人、やう／＼顏を上げ私の見て居やうとも知らずにそと涙をふいてしほ／＼と歩み出した、私は時ちやんの姿が角にかくれる迄見送つて居たあゝお美代さんと、お時ちやん、何方も人間の子てはないか、どうして世間は斯うだろう……。

けれど／＼女子の終局の目的といふのは良妻賢母なればと思ふたら何やら嬉しい樣な安心した樣な氣がしてふと自分の膝を見ると針も布も落ちて居た、そして布には處々濡れた處もあつた。

引しめて書いてある、文の短いテキパキした文章で、作者の主觀も加つてあるから多く人を感動せしめる（評）

○馬車の笛　　信濃　花かげ

今日も二楷の六疊で、妹のお正月着を縫ふ。靜かな小春日和、暖かい日は楷の先のみを奮がいて、障子一ぱいにさして居るので室内はのぼせるよう。一昨日降つた雪が一時にとけだして、にぎやかに軒水の音がする。恰度琴の音にたとへた梅雨時の樣に思ふ雨垂れにさへあのようによい音をつくる自然の美を感じながら、じつと聞いと居ると、ねむ氣がさして來るあまり暖かいので障子を明けると、心地よい氣がスーとは入る。拭つた樣な美しい空には、少しの雲さへ見えない、物置の屋根から梨の枝越しに、千曲川の白い流れ、河向ふ一帶遠く廣く扇形の山麓のなりに、散つて見える村や森、皆んなほの紫に烟つて何とも云へぬよい景色、耳を澄すとかすかに、いとかすかに、別所街道を行くらしい馬車の笛が聞える。いゝ音。み空の國にいます美しい女神が吹く笛の音が、彼の藍色の薄絹をもれて聞えるよう、遠い／＼處を來るので有るから、巧な譜はうすれゆくまゝに一つになつて唯何とも知れぬ、美妙な音となつてしまつたのであろう。其れの樣なかすかな美化した馬車の笛は、心靜かな者で無くては聞かれまい、暮れに忙しい者はきく事が出來ぬであらう、そして又女神が吹く笛の音は、山奥に詩を

友として居る清い心の人のみに、聞えるてあらうなどと思ひながらつい針の手がおそくなる、我に返つて又急いで縫ふ。もうお晝てあらうとうふ屋の鈴が聞える今日は廿六日、早く縫はないとお正月の間にあはない私もやはり暮れにいそがしい者て有るのに。

○生　別　　鳥取市　安木玻瑠子

逢ふは別の始めとかや、五月の何日にてかありけん、始めて君と相見し折、今日あるを知らざりしにはあらざれど、一年も過ぎぬに永久の別とは、あゝ厚き君の御情に慣れて、無禮の數々思へば冷き汗の流るゝよ、妾君には妾と同じ名、同じ年の妹君いますとかにて、妾を見る事故郷なる妹の如き心地すとて、人なき折など戯れて親しく名など呼び給ふに妾も嬉しく、兄様と興じたるを、あゝ浮世はかくも波風荒きものか、君は故郷にてなつかしき父母兄妹の君と樂しく語り明し給ふ夜半に妾は二度相見る能はざる兄君の事を忍びて、薄き夜着の袖を絞るにか、君を町はづれ迄送りしは、霜月の末にてみぞれ寒く顔を打つ朝なりき。妾君の御顔見るからに悲しく、涙さしぐまれて見られじとはすれど、思ひは同じにか情深き眼にあふるゝ許涙たゝえて「神は御身を守り給はん身體だに健康ならんには再び相逢ふの機なしとせず何事も神の命ぞ泣き給ふな、さなくとも胸の中のせつなきに笑ひて送り給はれかし余も笑ひて別れなん、いざや御身健在なれ、今こそ別ぞ何か一言云ひて給はらぬか、最早や涙を止め給ひて今や最後なる笑を見せて給はらずや、余は一生御身を思ひ出すに涙の御身よりも笑の御身をこそ望むなれ。」肩に手をかけやさしく慰めらるゝに限なしと妾も涙を收めつ、君と相知りてより半年餘、不束なる妾を妹よと宣ひて、朝に夕に教へ導き給ひし事の如何に嬉しく侍るよ、今や君と別るゝとも御身の言を深く胸に收めて婦德をみがかん、妾愚にして貴意に背きし事の多かるをいかにせん、幸にして御身許し給ふとするか、されど我胸の悩みはいよ／＼まさるのみ。

されど御身心安かれ、妾はこれより只御身の言を身にしめて神の意に叶ふべき淑女となりなん事を、今君と誓はん、君故郷へ歸りて父母兄妹の君と樂しく暮し給ふ日も、尙旧舍なる賤の女の御身の健康と成功とを神に祈れるあるを忘れ給はて、時折は我爲に教言の二ツ三ツは彼大空を渡る雁に言傳るを惜み給ふな、よさらばさらば君よ涙の目に打仰ぎし折、君は眼を背け給へり。心なき時計は早八時をさしぬ、急がずばおくれなん、さらばよ君健在なれ、云ひもあへず再び袖ぬらすは時雨か松の雫か、生くるも死ぬも逢ふも別るゝも皆神の命よとは云へ悲しき今日の別よ。

○通り雨　　布哇　上土井定子

太陽の光線は硝子窓より射こんで妾が机上を照してゐたが何時の間にやら雲の幕は閉ぢたり開けたり、隣のかみさんは朝早うから洗濯をゴッシ／＼遣つてゐたが

もう洗ひ終つて、向ふの木からケチンの柱に引つ張つてある、ワヤ一ぱいに干し並らべられた。空を仰いで見れば怪雲東山深く閉ぢて、今日は一入雨深き雲の色其の雲は次第に此方の空に押寄せて來る、頭の上の片片雲は彼雲に包まれて仕舞ふと見てゐると、彼方の甘蔗畑の空よりは大瀑飛沫にさも似たる水烟降つていとも凄まじきけしき、風は冷かに吹いて來た、木の枝は地を撫てんと騒ぎ出した、隣のかみさんの干された五尺の拔け殻ばた〳〵と音してワヤーを去らんと狂ふので、かみさんは泣く子を置いて走り出天を仰いで長嘆息、其の顔にかゝつた雨の二つ三つ、大瀑の飛沫はざあ〳〵と降つて來た、暫時の間に土烟りの立つてゐた大道には泥水滔々として流れてゐる、風に狂ふてゐた木の枝は稍靜けくなつて緑の葉色はいとも濃やかに、やがて怪雲も飛沫も彼方へ走せ去つて、太陽の光線は再び妾の机上を照らした、隣りのかみさん小言をこぼして嗚呼晴天。



雞　目崎柳子

○夕　四谷　織戸由樹子

讀書にもあきはて丶裁縫には時が遲し、所在のないまゝに我は、障子をあけて十歩の庭を又ながめはじめた毎日毎晩つもつては三年五年、殆ど一日も見ぬ時とてはない、眞に目につききつた庭ではある、がいつみても幾度ながめてもあきるといふ事は決してない、くねりにくねつてさながら浮世をすねた世捨人ともいふ樣な老松、まつかになつた實の重さに前にかゞんだおばあさんの樣な南天、青葉がくれにゆかしい色をみせる姫君の樣な乙女椿、などいつも笑をたゝへて我をむかふるのである。遂にみるばかりてはあきたらず、庭下駄はいて下り立つた。向ふの背の高い一本松の木かげからは今し落ちかゝつた、お月樣がたのしさうにのぞいてゐて、ふりかへると巨人のやうなくらの白壁はその光をあびてさも〳〵まぶしさうに輝いてゐるねぐらへいそぐ鴉は一羽二羽三羽と連れだつて飛んてゆくと、あとから雀が三羽やつてきてお向ふの屋根にとまつた。とみると何かしきりにいそがしさうに話をしてやがてとび去つた。後の天地は只寂として夕の色は一刻一刻と迫つてくる。「姉さんもう御はんよ」と妹の呼びごゑに驚ろいてやをら家にあがらうとする時、身をきるばか

りの風が一しきり、我がほを吹いていづこともなく、寒梅のゆかしいかをりをかすかにはらんできた。

◯ひと日　伊賀　岡本きし

今朝御母様が「アノお前その盥の中の足袋を洗つておくれ」との御言葉「ハイ」と答へて洗濯にかゝりましたが、なか／＼垢がおちません、だが漸やく皆洗ひつくしましたから竿へ掛けて干さうとしてゐましたら、内から妹が「姉さん御飯」と云ひましたので「ハイ只今」と云ひ、掛けて了つてから御飯を頂いてゐましたら、お向ひの嫂さんがお晝から芹摘みに御誘ひ下さいましたから妹と三人連で一緒に出掛けました。

道々いろ／＼の御話をして行きますと、いつの間にか河原へ來ましたから、すぐに摘みにかゝりました、はや四時近くにはもう大分に籠にみちましたから摘むのを止めて向ふの小山へ登つて、四方を眺めてゐますと美くしい小山が幾つも連なつて其の前には、さらさらと絹糸の様なきれいな谷川の流れ、ほんとに長閑なけしきで氣ものび／＼する樣でした。

歸つてすぐ其芹で炊いた御夕飯をすませましてから、此一日丈けの事を句にして見ました。

逡巡と足袋を洗ふや春寒し
芹摘みの小唄まじるや女連
提籠のよごれてをしき根芹かな
芹摘みの散歩がてらや小半日
芹の飯話しに春の夜は更けぬ

◯春雨の一日　山梨縣　田中ふさ子

一

春も半ば過ぎたり。

朝とく母上の呼び起したまふまゝに、臥床をはなれて窓押しあくれば、春雨糸の如くあれたる我が庭もせにふりそゝぎて、垣根つゞきの藪椿の二つ三つうつむき勝になりて、折り／＼妻戀ふ雉子の聲、いとあはれに聞えぬ。

二

朝餉を終へて、室に入れば、菫の匂ひまづ我が鼻をつきつ、それも理りなりしよ、我が机の上には白紫取交へたる菫の花束二つ三つ置かれぬ。

色いまだ褪せざるは、妹が昨日の若菜つみの獲物なるらん。

三

春雨やう／＼に降り止みぬ。

露を帶びたる若草をふみて、野川の堤にたつに、色あせたるひるの月かすかに影をうつして動かず。

そよ吹く風に、堤上の櫻三ひら二ひらほろ／＼と水にこぼれぬ。

四

降り止みたりし雨又もやふり來りぬ。

竹椽に出でゝ眺むれば、昨日までまだつぼみなりし、

牡丹の紅白雨にぬれて、美しとも美し。離座敷に琴の音の聞ゆるは、姉君の手すさびにや。さても其音の聖けく淸らけきことよ。

五

夕、櫻ちる窓の下に燈火呼びて源氏物語くりぬ。軒の玉水音たえ〴〵に我が耳にひゞきて、蛙の歌一しきり高く聞えしが瓶にはさみし山吹の花あはれはらはら音なく散りぬ。

○冬の夜　青森縣　山本すく子

朝から雪空であつたのが夕暮になつて漸く落ち始めた。夕餉果て今宵も一人二階で投書でも書うと思つたが私しも隨分苦勞性だ今日裁縫所で聞いた辻占賣の身の上が可憐想でたまらない、兩親は始終酒ばかり飲んで居て、明けてやう〳〵九ッになる女の子を毎晩賣りに出すそうだ、世の親なら大抵自分はどんな事をしても子供に苦勞させたくないと言ふのにまあ世間は樣々だ。外ははや吹雪となつて障子の隙もる風は身にしむ樣になつた。オヤそうてないかしら其のふれ聲は近くなつたが飴賣であつた、來あ女の子のようだ可憐想にと思つてる内に又聞えた、今度こそはと思つてたらたしかにそうだ〳〵、自分は雨戸を少し開いて見たが實にあはれの姿だ古毛布の樣な物を顏からすつかり被り、

釣人　近江　竹村芳枝



かすかな燈を便りにあはれな聲で呼はりながら、トボトボ歩いて居た、自分はもうたまらなくなり、せめて一本でも買つてやりたいが、こうゆう物を買ふのは何んだか家の人達にきまりが惡くつて、あらもう角まで行つて仕舞つた、實に殘念な事をした角の犬がほえると間もなく荷馬車があらはれた、續いて一生懸命さけびながら蕎麥屋は出て來た。あゝ自分は何となく恥しく感じた、人々は己れのつとめの爲めにこの吹雪をもいとはぬものをそれにつけても父母の情けには感謝の外はない。

○柿　豐後　鈴木さち子

佛壇に新しく増えた武さんの位牌の前に、今日も柿と古い硯箱とを備へて、妾は復た追懷の情に涕泣を禁じ得ぬのです。

去年の夏でした、武さんから來た手紙に、庫の側の柿が初めて十ばかり生つたから、孰れ此秋には多年の間据置きになつて居た、姉さんとの爭ひの解決を見られ

るでせうが、約束の硯箱が未だありますか、とあつたので、考へて見ればそれよ――共にまだ小學へ通つて居ろ頃、或日下男の鶴松爺やが、孃樣と坊樣とへ一本づゝ植て、上げますと云つて、自分の宅から持つて來た二本の柿の木を日當りの好い、庫の横手に植うる時、側に立つて見て居た二人の間に端なくも爭ひが起つて、妾が乾度澁いのだと云へば、柿好きの武さんは否甘柿に違ひないと言張り、爺やに訊けば、私にも判りましねえ、餓鬼がいとゞ狹めい前庭に這麽もの植えてけつかるので叱言云ひ〳〵拔いて來たんでと云ふ、はては武さんが走つて行つて母上を拉れて來たが矢張り、生つて見ぬ內は判然しないと云ふので、結局何れとも決せず、二三日して不圖また其れが再燃して、若し甘かつたら、妾が二郡敎育展覽會の一等賞を貰つて大切にして居る蒔繪の硯箱――武さんが平素羨ましがつて居た――を領らるゝこと、代りに、僕はどうで勝つのだけれど、萬一負になつたらば時計――其年尋常二年へ進級のお祝に叔父さんから貰つた――を遣ると云ふことで、玆に兩者の間に契約が成つたのであつたさて互におき果が生るものゝやうに思つて居たのが、三年經つても生らず、五年經つても生らず、其內妾は他鄕の人となつたのだが――と想起して、今に矢つ張り硯箱を嬴つ積りでゐるのかと、無邪氣な裡にも賴もしさを覺えて、妾は思はずほゝ笑むのでした。

其後間もなく、殘念ながら解決は今一年待たねばならぬことになりましたと云つて、思はぬ大風が吹いて初生りの柿が悉く打落されて終つた事を、さも殘念さうに告て來た、而して今年こそは澤山に生り最早や其れが熟しやうとする間際に、何と云ふ悲慘！這回は無情の風に見舞はれて對手の武さんが遽かに逝つたのです‼死目にも逢はず久々ぶりに漸く歸省した妾が、昨日はじめて其熟した一つをちぎつて見ると、アヽそれは武さんの所信の通り甘い〳〵柿で、妾は遂に負けたのである。――が勝つた人の笑顏を見ることが出來ない

吁、武さんが存命で居たならば……。衷心無限の悲惜を感じて熱淚が止度もなく頰を流れるのです。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は每月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

【一等】

○鶯物語

埼玉縣大里郡玉井村　中村勝子

芳ちやんは今年九ツ水車屋の少女です。眼のパッチリした下豊の可愛々々子です。雖どどうした事か聲が、ガア〳〵した惡い聲で、學校で唱歌の時間なんか自分乍ら汗が出樣に思ふのです。友達に笑はれて泣た事も度々ありました。雖も家へ歸れば全然機嫌を直して、すぐ裏の暖い野で溫和な羊の大勢の中に入つて、ギーゴトン〳〵と廻る水車や、ザブ〳〵吐出れる水の音に合せて誰憚る者なく大聲で唱歌を謠ふのが常なのです。或日も「止れよ蝶々」を謠つて居升と、バサ〳〵と音がして何物か芳ちやんの足許へ落ました。みれば可愛い鶯で、どうしたのか所々の毛が血に染まつてをります。

芳ちやんは「マア可憐想な」とそつと捕まへて、お父樣に語して藥をやつたり、水を飲せたりしますと大分元氣が付てきました。ですから芳ちやんは鶯にそッと頰をつけて「今度は早く恐い者に逢ないようにお出よ」つて聞せて放して遣ますと鶯は嬉し相に、庭の梅の木に止つて一聲ないて飛てゆきました。

其の夜、芳ちやんは鶯の事を考へ乍ら眠りますと、程なく枕許で「芳子さん〳〵」と起す者が有升。ヒョイと眼を覺すと、それは美しい十八九の娘が座つて居ますので「貴方はだあれ？」と申しますと、娘はニコ〳〵し乍ら「私は貴女に救助て頂いた鶯で御座い升」「マア鶯さん……」芳ちやんは吃驚しますと「えゝ私は谷間にゐた鶯でござい升が、今度御主人の春の神樣のお使命で、北の方の寒い國へ春を告せに行く途中でした、鳶に追れて已に命のなかつた所を貴女に助て頂いたのでござい升、お蔭で無事にお使命を果したのは皆貴女のお情であります」と丁寧にお禮を申しますので芳ちやんは「マア」と眼を圓くしてる許り。鶯の娘は膝を進めて「で、その事件を主人の春の女神樣に、お話し

しますと大層お喜びなさいまして、そのお禮に何でも貴女の好なものを上ると仰せられます、芳子さんは何がお望みです」と問ます。芳ちやんは無慾な正直の少女ですから、何も欲くないと申しましたけれど、鶯の娘は承知ませんので、「それては私は聲が醜いからよくなる藥を」といひますと、「では女神樣に申上て明晩參り升」と其儘消えました。翌夜になりますと又鶯の娘がきまして「お約束の品を持つてまゐりました」といふて梅の種子の金色に光るのをだしました。そして言ひますには「この中にあるのは聲の水と申すのでございます。これは私達が毎年



春の初めに、女神樣に頂いて、そして啼ますと人間樣が賞て被下るような好聲がてるのでございます。ですから貴女も此水を、朝早く起て三朝に飮り、そしてあの裏の川の淵て學校て敎はつた唱歌を、性いつぱいの大聲てうたつて御覧なさい、屹度治りますから、といひますともう姿は失なりました。芳ちやんは早速暗い中に起て敎へられた通り致しますと、不思議にも一朝毎に好なつて三朝目には、鶯よりも好聲になつて、父樣や母樣さへも不思聞惚るように成ました。すると東京から來た華族の人がこの聲を聞て「この少女を私が豪い音樂家にしてみ

せるから下さるまいか」と芳ちゃんの父樣に申しましたが芳ちゃんは「豪い人に成なくもこうして父樣や母樣の傍にゐたい」と、華族の人が頻りに貰ひたがるのを斷はつて了ひました。て今でも毎日羊と遊び乍ら米や麥を搗にくる人に、美くしい澄だ凉しい聲て、唱歌をうたつて、きかせてるそうてございます。

（評）無難の作てす、末尾の華族の人と云ふ所は何とか工夫ありたいものてす。

二等　○虹色の花

大阪市北區西野田今並町　梅本龍子

星ちゃんは花賣りて今年十六の花の蕾！けれど、世の孃樣のやうな幸福な身てなく、父母もない極く果敢ない子なのてした、村の人に星ちゃんの母樣は、と尋ねると、天女てあると答へて誰ても次の樣な談をする。

月姫樣に侍かへてゐる天女が、お星樣と戀とやらの罪て宮殿を逐はれて下界に天降つて、とある祠で可愛らしい嬰子を生むだ、けれど、夜毎月姫樣が麗るはしい顏て、羽衣破れた天女の寂みしい姿を、さも卑げすむやうに照らさるゝので、あまりの辱かしさに、生れた嬰子を殘こして、森の奥の古沼へ沈むでとう〳〵死むてしまひました、がその時、犯かした罪が消滅したのか、天女の骸は美くしい紫の雲に卷かれて古沼から濛々と天昇つてしまひました、其所がいまの天女の森て、その森の宮て花賣りの星ちゃんは、誰養なうとなく成長くなつたのてあるそうな。と村の人は言ふてゐます。

星ちゃんは今朝も森の花の、露のしとゞに濡れたのを籠に滿てゝ、花召せ〳〵と城下を歩きましたが、いつになく賣れないので、街はづれの小高い丘に佇むて、休むてゐました、すると何處からともなく恐ろしげな白髮の爺さんが現はれて「これ、お前は星さむと言ふのかね」恐ろしい顏にしてはあまりに聲が優さしいのてす「はい私は星と申します、爺さむは」と問ひ返へすと「余は天の使だ、神樣達がお前をお召しだから、余と一つしよに來るやうに」と星ちゃんの小さい手を携りました、天へ行くと言ふのですから、嬉れしいやら恐ろしいやらておず〳〵してゐますと「お前はしばらく眸を閉じてゐなければならぬ、余が許るす迄はあいてはいけないよ」との言葉てすから。うなづきながらそつと眸をとじました、すると爺さんは天に何か呼さやいてゐましたが、やがて星ちゃんの身は、ふわふ

わと夢の様に浮き昇りました。
『さあもう眼をあけてよろしい』と言ひますから、ふと眸を開けますと、美くしい瑠璃や瑪瑙を鏤めた宮殿と想ひの外、是はまた、恐ろしい岩ばかりで築きあげた岩洞の御殿ですから、恐ろしさに星ちやんは泣きそうになりますと、爺いさんは一層優さしう『こゝはね、天狗樣の住んでゐらつしやる國である、で今度天狗樣のお寄合があるので、その席のお茶の給仕にお前を態々呼だのであるからお役さえ務めて呉れゝば國へ歸してあげるから』と言ひますから、星ちやんは、もともと賢こい子ですから『お役は屹度務とめますから、どうぞ國へ歸して下さい』と申しました。
まもなく天狗樣の會も終つたので、以前の爺いさんは星ちやんに向こうて、『もう役が終つたからいまから國へ歸してあげる、がお褒品としてお前の欲しいと言ふものは何でも與げるから言つて御覧！』との嬉しい言葉、星ちやんはいろ〳〵考へましたが、別に欲しいものもありませぬ、けれど、ふと想ひ出したのは此所へ來た時から、何とも知れぬそれは〳〵佳い匂ひがしてゐました、なにかの花の馨りに違がひないのですが、いまゝでこんな佳い香りのする花をみた事がないのです……花賣りですけれど……星ちやんは、『爺いさん私はあの佳い匂ひのしてゐる花を折つて下さいな』と言ひました『夫はやすい事だ、一寸待つておいで』と姿はかき消すやうになりました。程なく、眼の前の大岩が、どうした事か、ぽんと割まして、中から靜かに現はれ玉ふたのは、美くしい、氣崇かい淨よい白衣の天女です、眞白い繊手には虹色の彩の麗るはしい大輪の花の一枝を持つてゐられる、と身に泌むやうな靈香があたりに匂ふて……星ちやんはもう夢心地に、天女の裳のあたりに想はずひれ伏しました、と白銀の鈴をふるやうな優さしいみ聲は、淡臙脂の唇からもれました『これ星や、妾は何隱そうそなたの母である、が……』としばし涙をみ袖でぬぐうてゐられるやうす、星ちやんも、是が私の母さまかと、意外のめぐりあひに、嬉しさ悲しさに想はずみ腰のあたりにとりすがると、花持つみ手を星ちやんの可愛ゆき背に垂れ給ひて『一度下界に染みた者を、天上に昇する事のならぬ悲なしさ、されば星よ、愛のみ園の虹の花、それをそなたにとらせむ程に、母戀ひしと想もひなば、この花に忍べよ、幾千年經るも彩も香りも褪せざれば……』と泣き崩折る、星ちやんの少さい手に花

の枝を持たせて、『さらばぞ星よ……また逢はなむよすがもなう……』と見上げる頰をそと撫て玉ひ、『さらば』と綾の羽衣のさばきも輕う歩ませ給へば、大岩は音もなうすうと閉しました。

星ちやんはせんかた泣く〳〵虹の花を抱いて爺さんと一所に森の宮へ天降りました。

さてこのお國の王樣の皇子が、或る夜、星の香りのする虹色の麗るはしい花が。天から天降つた夢をみられましたが、それからは虹色の花が欲しい〳〵と父君母君に仰有るに、只一人の皇子ですから、どうぞして虹の花を得させたいと、お國中へお觸を出しました、けれど、星の香りある虹色の花なぞのありそうな筈がありませぬ。皇子はそれが原因でお病氣になられました、寢ても醒めても虹色の花を〳〵と御意遊ばすに、王樣初め家臣までの心配は一通りでありませぬ、が誰言ふとなく城下を歩るく花賣りの乙女が錢貰て賣れない麗るはしい花を持つてゐると王樣にきこえましたから、家臣に申付けて花賣の乙女を宮城へ召されました、翌日花賣りの乙女は澤山な家臣に護られてお城へ召されました、乙女とは言はずとも知れた星ちやんでした。



插畫　牛込　佐野貞子

星の香りのする虹色の花に、床しい歷史を持つた星ちやんは、後年皇子の皇后になりました、そうして虹色の花はなほ國の榮かえともろともに幾千代かけて香りましたとさ。めてたし〳〵。

（評）日本式てはありませんが如何にも優美に出來て居ます。

三等

○華鬘

愛知縣碧海郡矢作町
栂日永田彥太郎方

富美子

或國王に一人のお姫樣が有りました。王樣は非常に可愛がりなすつて、姫樣が、お强請なさる物は何んでも、買ふてお遣りなすつて、我が儘放題に育て、暫時も傍を離されませんでした。

一日、御殿で遊んで居ますると、雨が降つて水が溜つて、其の上に泡が幾つとなく、綺麗に浮いて、流れるのを、お姫樣は御覽なされて、甚く喜んで、父上に、『アノ泡を取つて、華鬘を製つて下さい。』と、申されました。

すると父王は、『泡は取つても直ぐに消えるから、華鬘を製る事は出來ない。』と、答へられましたら、御姫樣は、『アレで華鬘を作つて呉れなきや死んで仕舞う。』とダヾを捏ねますから、王樣は、すぐに細工師を多勢召寄せまして、『其の方共は細工に巧であるから、アノ水泡を取つて、姫に華鬘を製つて與へよ。作らなければ殺して遣るぞ。』と、命ぜられました。

すると細工師共は大弱りて、『此事計りは、御免蒙り度う御座ります。』と、申上げました。所が、其の中の一人の老匠が、『乾度拙者が製つて差し上げ升。』と答へましたので、お姫樣は笑顔をつくつて、早速、職場へ行きますと、彼の老匠が、『お姫樣、拙者は水泡の美醜を見分ける事が出來ませんから、恐れ入りますが、貴姫お手づから、泡を取つて、拙者にお渡し下さい。』と、云ひましたので、御姫樣は、『諾し〳〵』と、首肯きなすつて、水泡をお取りなされましたが。手に觸ると泡はすぐに破壞て仕舞ひますので、終日かゝつても一つ得る事が出來ませんので、お姫樣は、疲れてお厭にお成りなすつて、還つて父上に、『泡はいくら取つても直ぐ消えて仕舞うて、駄目です、モウ彼んなものは欲しく無いから、妾に黃金の華鬘を作つて下さい。萎んだり、消えたりして、人を誑す樣な華鬘は厭で御座い升。』と、遂々お姫樣は泡の華鬘を作る事を止しましたとサ。めで度し〳〵。

（評）佛說にありさうな話ですが短くてよくとゝのつて居ます。

四等

○明星姫

大阪　田中登木子

大昔の事です或所に爺と婆とがすんで居ましたが二人とも誠に善い人でした爺は毎日獵に行きました婆は料理や裁縫をして居ました或日の事一疋の兎が來まして申ますには「お爺樣お婆樣御願ひがございます聞いて下さいますか」といひました兩人「其は私達の叶ふ事

なら」兎「それなら申ます實はお月樣のお子樣であるお星樣の一人が時々私が下界の噂致します度に一度任んで見たいと仰るので私はお月樣に願ふて一年程任させて上げて下さいと賴みましたそれには私はお月樣の餅搗が職業ですからお世話が出來ませんからお二人にお願するのです」と逐一話しました二人は承知しました翌晩は十五夜で爺婆が月見して待て居ました圓いお月樣がお出ましになり升とお月樣の回り計には雲がからずに空一面雲で被れましたそして星姬は羽衣をきて桂を簪して雲に乘て徐々と山の頂に下りて來られました兎は其處に待て居りますお月樣ば輝いた光で見送てをられ升兎は直に爺婆の家に案內致しましたそこで爺婆は大層親切に御世話しましたので星姬は誠に幸福な樂しい暮をして居られましたそして羽衣や桂の簪は兎が天へ持て歸りましたから今は全く下界の人間と同じ姿をしてをられるけれども其美しさは迚も人間は叶ひません斯して毎日樂しく暮してゐましたが矢張故里が懷かしくて常もお月樣の出る頃には必外へ出て天を眺めてゐられましたが一年經ねば歸る事が出來ません時々兎が餅搗の暇に天から下りて來て種々な事を話し吳れるのを待遠く思つて居られるのです今夜もお月樣のお出のない中から外へ出てゐられましたすると油斷は大敵です近くの池に棲てゐた大蛇が姬を取に來て假に大變な音をさせて池から飛び出したので星姬は逃る隙もなう其大蛇の口に入り掛た時ピカツと電が閃いてゴロ〳〵と鳴たと思ふと天から大蛇の頭の上に落たのは流星と云天の流浪の星でした爺婆も雷に驚いて出て見ると大變此有樣急いで姬を介抱して息吹返して助りましたそれから漸う姬は下界はよい所であるが又恐しい所であるそして天上には少も斯樣な事はないして又流星の恩を肝に銘じてお忘になりませんでした光陰矢の如しで一年も經ち星姬は愈々天へ歸る事になりました兎は羽衣や桂の簪とお月樣の餅とを持て天から下りて來ました兎は爺婆にお月樣あなた達へ長い間星姬を大事にしてくれたから御禮にと此品を私にお傳言になりましたと云てお餅を出し此を食ると死ぬと云事はないのですと申ました爺婆は大層有難がり厚ふ御禮を申ましたそうして互に名殘を惜みましたが兎が御供をして安々と山の頂まで來られ雲に乘て天上せられました星姬はお月樣に下界であつた事を悉く言上せられましたからお月樣も大に喜れましたて其後も變る事なく照され星姬も又優しい少女の眸の樣な光を下界に輝かさ

れたのが明星でございます爺婆は今も生て居ます兎も忠實に働いてゐますさうです。めでたし〱。

(評) これは至つて無難の作です。

秀逸

○櫻三里

神戸市　平林たつ子

或國に櫻三里と云つて、東西三里、道の兩側櫻の木ばかりの街道が在りました。春が來れば、木と云ふ木には皆、薄紅の可愛らしい花が咲いて、其よい薫は三里四方まで香ふ位、道を通る旅人は、此美しい花を眺めて、其甘い蜜のやうな香に醉はされて、恍惚と、長い長い旅の疲勞も、心配も、苦勞も何もかも忘れて仕舞つて、恰も、愛の神樣の溫い、白鳥の羽毛のやうな柔い手に、抱かれた心地で、此街道を辿るのです。そして身が櫻から離れる頃には。最早、心が爽快として、何處となく勇氣が出て、せめてもの紀念にと、あの美い花の一枝を襟に挾んで　氣も足も輕々と、道を急ぐのが常なのでした。

ですがどういふものか、此美い天人でも住ひさうな處に、人を捕つて喰ふ恐い鬼が、古から住つてゐるのださうで、日の暮方からは人ッ子一人通らないのです。もし知らないで通らうものなら、それこそ、一口に喰はれてしまうから‥‥‥‥それで此あたりの俗謠にも「櫻三里を夜で越す時にや、親にや是非ない妻戀し」と言ふ位です。實に櫻三里は、樂いにも怖いにも、他に類ない處でしやう。

こゝに、其街道の近傍に、清雄と花子と云ふ、二人の兄妹が住つて居ました。兄は今年十四の活潑な、物に憶せぬ氣性の少年で、妹は大變優しいのび〱した處のある、愛らし盛の十二でした。二人は幼い時にお母樣にお別れして、今は一人のお父樣に養育られてゐるのですが、其お父樣も此頃は病氣で、起居も自由にならないのです。

時は恰も、春の中頃で、農家は植付の支度に忙しい最中ですが、兄妹の家では肝心のお父樣が、此通りですから、どうする事も出來ません。であまり有福の家でもありませんから、二人で代る〱村の人のお使をして、少しづゝ貰つたお錢で、お粥を拵へて病氣のお父樣に差上げ、殘つたのを兄妹が頂戴て、其日々々を送つて居りました。或夜お夕飯を澄して、色々と、病人の

悦びさうな、お談をして慰めて居りますと、お父樣が「櫻三里の櫻も此頃は滿開だらう、私が健康なら見に行くんだけれど、此樣に足腰も起たないじやあ、仕方がないなあ……」と思ひ出した如に、つく〲云ひました。二人はこれを聞いてどんな感じがしましたてしやう、やがてお父樣は、すや〲と眠に就きました。

「兄樣！　お父樣に櫻の花、見せて上げたいわね！」と花子が云ひました「ほんとに見せて上げたいなあ」と清雄も同じやうな事を云ひましたが、直ぐ例の快活の語調て「ぢやあ、僕、これから行つて、とつて來やうか」「えつ！　あの櫻三里へ？」「ウム」と得意げに肩を搖つて「魔物なんか、怖くも何ともありやしない、お父樣が喜ぶんだから、僕最早、行くよ」と早立ちかけました「アレ兄樣、私も連れてつて頂戴！」

二人はひそ〲相談して、音立てぬやう、家を出ました。月は雲間に隠れて、星のみ、弱い光で下界を照して居ます。山路てすから、木の根や石などに躓て、危く倒れる事もあるのてす。互に勵しあひながら、最早四五間と云ふところまて來ました。其時「キヤアツ！キヤアツ！」魂消るやうな聲が、山彦に響きます。その怖さと云つたらありません。續いて「ウームウーム」足は自然と停りました。そして堪らなくなつたのてしやう、其少さい胸には。花子は兄の胸にひたと、面を伏せました。清雄も「花さん！」と只一言、それも小聲て……すると俄にパツと光が射して、晝のやうに明るくなりました。

神樣のお裁判て
人を食ふ惡魔には
優しい花の繩かける……。

美しい聲が聞えます。それがどうやら、花の梢からのやうてす。聲はだんだん高くなりました、終には、人間なら何百人かと思ふやうに。

恐しい惡魔ても
かけられて動けぬは
吹けば飛ぶ　花の繩
天罰よ　天罰よ

兄妹は夢心地て、云ひ合した如に、花の中へ駈け込みました。見ると、何方を見ても花ばかりてすが、中に只一枝、花もよく着いた、枝振もよいのが、ちようど手の屆く處にありましたので、一生懸命、手を掛けて



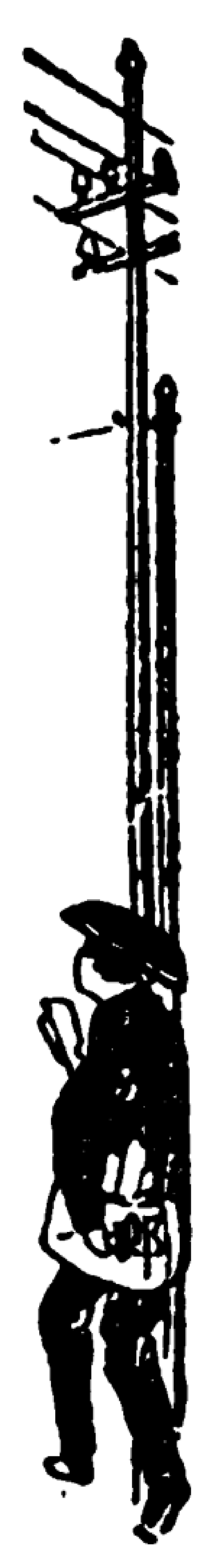
由美鬼　呉市　井上さわ

引張て見ましたら、不思議、苦もなくポキッと折れました。二人は喜んだの、喜ばないのぢやありません。まるて、最早夢中てす。四五間向ふの、櫻の大木に、眞黑な大きいものが附着いてゐて、それに花瓣が一面についてゐる間から、球のやうなものが二つならんて、爛々光つてゐたのには、氣がつきませんてした。

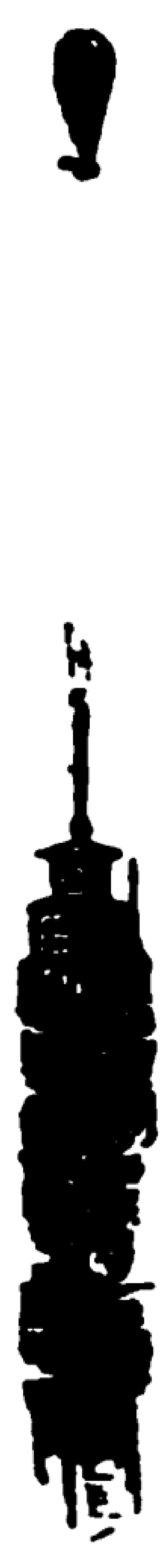
二人のお父樣の御病氣は、これから目に立つて快方に趣きました。枕元には美しい櫻の花が、口のかけた德利に挿されて、毎日水をかへられて居ました。此花の散る頃には、お父樣の御病氣は、もうすつかりと直つてゐるてしやう。

（評）趣は面白いが全體に不自然の所が多い樣に思ひます。

女醫者（新欄の豫告）



新たに女醫者と云ふ欄を本誌の一部に置き、愛讀者諸孃の便宜を計らうと思ひます、健康なる身體には健康なる精神が宿る、何より彼より身體は健康てなければなりません、精神上の健康を計る本誌は、今又其一部を加へて、身體上の健康も計りたいと思ひます、扨て此欄は凡て問答體て、諸孃が隨意に問ひを出して下さい、身體の衛生のことなら何ても答へます、平常の衛生の事ても、病氣の心得ても、女子の身體に關する事なら懇切にお答へいたします、而して答案は凡て多年斯道に經驗ある女醫學校長鷲山彌生先生に答へて頂くことにいたします、確實にして信用あることは申すまてもありません、なほ「女醫者」の問は匿名てよろしい、原稿は成るべく簡單に半紙又はハガキに認め「女醫者」と朱書して本社へ送つて下さい、到着順に答へて行きます。



新派和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

二等

豊後臼杵町　菅原芳子

琅玕の扉ひらきてわが夢の浮橋わたるいく少女ども

三等

伊賀上野池町　山村すみれ子

冬の神風のむちもて銀の木の實落すや夕の霰

四等

弘前市大字品川町一六佐野翠坡方　佐野てる子

街にさく百の灯の花むらさきの細き緒にぬく春の夜の雨

秀逸

◎信濃　加藤芳枝

木花てふ十月の霜ふる時に櫻とまがう信濃の山よ

◎三重縣　北村みつ子

黒髪をほのほ吐くらむ小蛇とも申すはたぞやわれ春の人

◎若狹　山田鐵葉

美しう海のおもてを彩りぬ君きます日の夕焼の雲

◎牛込　栗田たづ子

秘めますな若し血しほのもゆる日のおん歌こそはいとたふとけれ

◎大阪　辻廣子

紅芙蓉花咲く窓の朝月夜君と吹かまししろがねの笛

◎安房　秋草子

小鼠が琴を弄する音もして春の宵こそねざめをかしき

◎岐阜縣　日野歌子

菜の花に淸き眞白き胡蝶きて舞へるを見つゝわれ髪なすく

◎備中　大西好子

新潮の匂ひ薫ずる遠方の鳥をおもひぬ若人なれば

◎岐阜縣　柘植ちか子

春雨にとりし薔薇の滴をわけてあたへむ黒髪人に

◎羽前　大谷部てい子

金色の車にめして大君の行幸するにも似たる夕雲

◎日向　加藤村雨

戀せられ戀する人はなか〳〵にたうとしさてはほか心なく

◎播磨　石原富子

あけぬれば霧は谷間をとざしつゝ瀧の音ぞすれ初夏の家

◎伊勢　杉田たか子

眞白なる竹の霜葉に日の照る日垣れに來なりみそさゞいの子

◎下總　倍田しづ子

美しき黄金の鉢に胸なる木槿ゑてさゝやく紅ゐに咲け
越後　しら雪

○

菩提樹の若葉そよぎてはら／＼と銀の雨ふるたうとき御寺
愛知縣　富　美子

○

七彩の霞漂ふ島さしてこぎゆくこゝち心の船を
千葉　今井しげ子

○

君を戀ひて三年になりぬわが胸にかれぬ小草を摘み給はずや
肥後　戸次津和子

○

阿蘇の岳高う淋しや冬の夜の月てりわたる筑紫平よ
上總　鈴木かね子

○

姉君が柩にかけしうちいろの衣にほふなり香の御けぶり
岐阜市　小川糸子

○

戀しさをしばし忘れてしら玉の清き涙を絲にぬかんとす
京橋　三好まさる

○

思ひなやみ寢られぬ夜半に懐かしき君がみ歌を誦じて見るかな
下總　石橋鉛子

○

もみぢ葉の影美しくそぼぬりの宮居の如くうつりぬ水に
下總　三橋千代子

○

美しき瞳をあげて灯の影にわれを見るなり春の夜の君
千葉縣　北田信子

○

夕ぐれに咲きたる花の心ちして曉に見る春の淡雪
大津　今村越智子

○

あゝ二なき心をなほもうたがひて背ける人のせちにうらめし
岐阜縣　敏　子

若くして我れは摘みけり夏草はものによりても花さくものな
播磨　孝添子

○

櫻山花を手折りて逍遙ひし夕に似たり海の夕照
熊本縣　猿渡與佐子

○

朝戸出のわが世うるはし紫の霧はほのにも袖にしみくる
山口縣　吉田良子

○

君はいふ「涙ながさぬかなしさは泣くより勝るわが胸を聴け」
山形縣　笑花膜女

○

天つ女の脱ぎ忘れける羽衣を汝れはまとふや白の蝴蝶よ
遠江　原　木清子

○

むらさきの振袖長き少女子がかざしにふさふ白菊の花
靜岡　貞水女

○

紅き鯉浮き沈みする泉水に影をうつして山吹のさく
千葉縣　關　芳枝

○

紫の雲くだりきて少女子が欲りする花のすみれと咲けな
三河　天野清子

○

花たばを送り越したるぬしは誰ぞしらずと云ひぬ白ばらの花
府下　内田久子

○

野に立てば春のしら雲幾重にも君が家まきぬあかつきにして
芝區　上島こまつ子

○

いづことも知らずかなりく梅の花朧ろ月夜に人待ち居れば
阿波　坂野文子

○

大き蛇鱗をふくや古杉のあかめる森を霧たてこめぬ
牛込　河村頓子

○

少女なれば内侍が上る紫のとばりよりみむ花もおもひぬ
山口縣　空の花子

○

相居りてたま／＼わかるときにさへ涙ながせしわれにやはあらぬ
奈良縣　節　子

○

神無月うき夜となりぬ森どよみこの世呪咀ふと鴟梟鳴くも
京都市　宮原みどり

○

黒奴の笛吹く日なりアラビヤの椰子の樹そよぎ風の涼しき

○われやみぬ櫻花ちる夕さめに小傘をさしてこし人ゆゑに　山形縣　白はな子

○春の夜やまくらは伊勢の繪巻物むかし男の夢を見るべく　磐城　武者けいせつ

○れくたれの髪梳る姉君を美くしと啼くうぐひすの聲　千葉縣　今井しげ子

○人ゆゑにそとかざしたる小扇に白きさくらのはらゝこぼれぬ　越後　紫雲

○夕雲のうすれて消えしさびしさや涙ぬぐひていにし子に似る　下谷　蕉雨子

○わすれける胸の思ひの湧きいてぬうら若草の萌ゆるを見ては　大阪府　祝綾子

○須磨の浦とほき鐘の音きこえきぬ淡路の方に日のしづむ時　兵庫　川西久野子

○ひろき世に君のみ思ふ我が胸に似てもさやけし秋の夜の月　佐渡　本間みづほ

○紫の手綱手にせる宮人の袖にちるなり山ざくら花　越後　尾島隆子

○年の神歌楽の箭脊負てくる姿とあふぐ元朝の日よ　遠江　増田糸子女

○春の日のかすみこめたる我が庭に鳥こそきなけ君を見ぬかな　丹波　齋藤笑子

○冬はきぬ並木松原まつかさの落つる一つもむれにひゞきて　青森縣　三浦あや子

○おそろしき冥府の醜女がくろ髪か工場のけむり雲になびくよ　大阪市　角紫子

春のうた　大分縣　安東八重子



○亡き母が辭世の御歌見出だしぬ眞垣の萩に雨ふる夕　越後　白蘭子

○降る雪の中に日かずは送れどもわれあたたかし君をおもへば　羽後　千葉美津子

○そのかみの式部はあらず千年へてあれたる寺に秋の月てる　山城　村田冬子

○遊ある童等數多小羊と戯れて居ぬ春の夜の夢　千葉　寺本隆子

○君が家の垣れをめぐる春の川よき花浮べうれしき日かな　堺市　河野清子

○紅の梅の一枝かざしては袖ふりし子をせちに思ひぬ　筑前　鈴木たけ

○悲しみは菊の香にほふ秋の野の友のみ墓に花手向くる日　大阪市　服部浪子

○野に立て胸のもだへをはらさんと思へどかなし秋の日にして　寳島　花霞子

○七少女霜ふる野邊にさまよひぬあはれなる花なほのこるやと　千葉縣　今井しげ子

○何としも解き得ぬ謎をこのあさげ名無し小草の花に得てけれ　柳河　なゝし草

○帆の如く白き色なる家の壁かこめる畑を海と見るかな　神奈川　山本綾子

○選者吟　晶子

なげく時ゆららにうごく烏羽玉の髪のやうなり紫の藤

短篇小説

小栗風葉先生選



△規定　純潔清新なる短篇小説を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

四等

○里戻

和歌山縣日高郡稲原東光寺峰山新太郎方　白菊女

兄さんに導かれて、山畑のお講釋を聞かされる。

三年振りで里へ歸つたのではあるが、見るもの、聞くもの懐しう慕はしう響かぬものとてはない。

柿の木、蜜柑の木には、紅いものを見受けない、櫨の裸枝には、干大根が弓張り返つて生つて居る、毎年廣く賣り出すのだがと思つて居ると、兄さんは歩みを止めて、

「今年は鹽が高かつたので、大根も随分と安價で賣り出したのだが、とんと、捗々しく賣れなんだよ」

「斯うして置いてどうするの？」

「干大根にてもして賣り飛ばそうかい、屹度今年はお菜に不自由するぞ、まア見て居な」

「そうでせうか」

「そうでせうかではないぞ、そう茫然して居て内がうまく行けるかい」

と笑ひながら、

「乃公なんざ、今に一人ボシじやが、未だ薪木とお菜とに困つた事なしさ、この二つがチャンと揃はないと何となく懐中が寒いやうてな、心淋しい、これもしかし性分ぢやて、ハヽヽヽヽ」

兄さんは未だに孤獨で居らつしやる。今年で丁度三十二歳。二十五歳の時に隣村から娶つたのであつたが親に仕へがわるいと云ふので三月も經ぬ間に戻して仕舞つて、夫れからと云ふものは、矢のやうな媒介者の催促も「まア急がないせめて兩親の後を見送つてから」と云ふ口實の一點張りで避けて、七十歳に手の屆いたお父さんと、六十歳に餘るお母さんとの孝養に脇目も振らない。年よりは三歳、四歳更けて見える。村の口さがないものは「若年寄」「若隠居」など惡口を云ふものさへある。

此の邊は暖かい、今年今尚、雪を見ない。

飼猫の玉が椽側で日向ぼつこをして、セッセと顔を

洗つて居る。丁度妾の兵庫へ嫁く前の年に、養蠶をすると云ふので、近所の巫女の内から貰つて來たので何とはなしに懷しい。

「玉！玉！大きくなつたね、」

と捕へて抱き上げやうとする。とヒョッと妾の顔を見て、さも驚いたやうに爪をたて、膝を蹴つて去つた。

「恩知らず奴!! モウ忘れて………」

妾は腹立しげに大きく叫んだ。

「お〻畑を見て來たか」

といそ〳〵門へ來て、母さんは、

「兄がいかい働きものて、この通り畑もよくなつた。見かけの通り西山も開墾かけて居るんだがね」

「よくなつたのねお母さん」

母さんは點頭いて、

「蜜柑も今年五百箱ほど收穫つただア、大根も蜜柑の間作丈けぢやのに、たんと出來てね」

仕事を措いて納屋からはお父さんが出て來る。

「兎に角、里の暮し向きがよいと、貴女も腹は立つまい。乃公の口から兄を褒めるも異なものぢやが、眞個に、兄がよく出來たもの



て……」

上り框へ腰かけて、脂詰の煙管チク〳〵お父さんはニコ〳〵云ふ。お母さんは側から、

「お前も達者で機嫌よく居るので、何より嬉しい。二人しか無い悴、何れも身の治りがついたので、私はモウ思ひ殘すことが無い、慾を云へば兄の嫁ぢやが、私等の爲めを思ふてね未だ貰はぬと言ひ張る兄の心が嬉しうて〳〵」

「之れてよい嫁を貰つてやつたら……」

とお父さんも相槌を打つ、

あゝ勿體ない勿體ない。兄さんは斯麽に孝行をして居なさるに、お父さんやお母さんが彼麽に喜んで居なさるに、妾は何と云ふ馬鹿であらう。何と云ふ淺果敢な了見であらう。夫と一寸した口論から、妙に腹を立てゝ、夫への面當てに、兵庫から戻つて來たのである此の事、お父さんやお母さんが聞いたら、どんなに心配しなさるだらう。兄さんがどんなに失望しなさるであらう。今頃は嘸困つて居なさるであらう。宥して下さい妾は重々惡うご座いました。もう此の事は秘密にして置こう。誰にも云ひますまい。そして明日早朝に歸つて、お詫びをせう。置いて貰はう。

*　*　*　*　*

翌朝、兩親や兄の切に止むるをも聞かず、愛知丸に乘船つて、心窃に再び歸らじと誓つた兵庫の宅に歸つたのである。

（評）結婚した女の淺はかな行動と弱い心とを寫した物て、短篇としては好い取材てある。書き方も無雜だし、文章も馴れて居る。取立てゝ特長のある篇ては無いが、簡潔て厭味が無い。然し末段心機の轉ずる件を『自分は馬鹿だつた。』といふ悔悟にしたのは餘り道義的で味が無い、是は幸福な父母の心を驚かすに忍びないと云ふ、唯だ女らしい弱い心からにした方が面白からう。〇今回は更に又前回に比して全體に見劣りする、諸孃の奮勵を望む。

五等

○新家庭

土佐國吾川郡弘岡上　深瀬ますず子

「あなた御飯を、」

今歸つた夫を見上げて藤子は編物の手を止め、若しやと思へば立ち上りもせずに問ふ。

「濟んで來た。」

平常の事故驚きはせぬものゝ、さて何處でお濟ませなすつたやら。

夫は醫學士で藤子とは五つ違ひの二十八、男振とい

ひ腕といひ誰も〳〵知つて居る其人、藤子とても、相應に學問が在るし器量が善いし、何の申分も無い、久しく寄宿舍生活をしたので兎角世事に疎いけれど夫と御構ひがなくばと約束の時父親は念を押したので在つたとの事。

夫は默つて藤子が編みかけのいしやつの上へ一對の手紙を投げて徐に兩の手袋を除り、くる〳〵と卷いた頸卷を除け、平常着と換え、火鉢の鐵瓶を下し、埋火を掻き起して、健か炭を續ぎ添へる。

「灯を點けたら如何」

呆然と手紙の裏表を打ち返して見て居る藤子は、初めて日の暮れてるのに氣の付た樣周章てゝランプを點けて來る。夫は險しい目付をして、今食臺の上に乘せられた三分心のランプを意地惡く動かし。

「石油が無いぢやないか、」

藤子ははつと胸を打たれた。ランプといはれて掃除して無い事に氣の付た時一晩位掃除しなくつたつて善だらうと其儘持つて來たのだつたから、

「あら左樣で御座いましたか、どうも全然忘れて、一寸注しませう。」

代りに之をといひ乍ら小いランプを持つて來て、

先生の方へ早くお送り申筈のいしやつが此頃の混雜て遲くなつてたもんて大急ぎて編んて居たからつひランプ掃除迄忘れて、」一人言ち乍ら大いランプを持つて臺所の方へ行く。夫も「終日何してるんだ」と呟いてつまらなさゝうに炙つて居た手を組み我が膝を抱へて凝然天井ヶ見上げてる。夫は何を考へて居るのであらう。

藤子は石油を注ぎ乍ら考へる。一體自分はどうして此頃斯麼に漠然に成たのだらう。夫をまた旦那樣は何か落度の在れかしと目角立てゝ求めて被居るよ。一つ調子が違ふと全然駄目なんだ。此頃の私は實に馬鹿の樣、それでも今晩の樣に穩かに有仰つて下さるならまだ善、元私が惡いんだから如何樣にもいつて戴かなくつちやならない　實際私は何も氣が付かないんだから直接に何でも有仰つて下さると嬉しいけど、ちら〳〵聞く樣子てはお友達の手塚樣の處へなんかいらしつて私の事をさんざ惡く有仰つた上に、つひ一晩勝手の雨戸締める事忘れて寢たのを大層らしく御話なすつたとか、また元日の朝のこと、新しいしやつが用意してないから風邪引て了ふと突然に有仰る故早速の間に合せにおしやつの上に眞綿を付けたらと申たのを御禮廻りの家々へ斯麼なとんちんかんな事したよと御いひ遊したり

とか。旦那樣はほんとに私を妻だと思つて被居るのかしら。何故妻の落度を他人の前でお話遊すのだらう。夫は未善けれど大變な持參金の在る筈で在た、思惑が違つたと、昨日叔父樣に御話遊したよし。夫を聞た時は私實に驚てしまつた。夢にも持參金の約束は無かつた筈。生家のお父樣に聞えたら什麽だらう。彼麽にやいの〳〵といつて來られたのは、お金の爲だつたらうか、僕の理想は二三千持參金の在る女かさもなければ女學校の教師の出來る人か其の意で在たと昨日か一昨日か有仰つた時、私は復喫驚して、夫なら何故私の樣な持參金無しの資格無しの女を彼麽に有仰つて下すつたんですと申たら、僕は全然或人に騙された、之は僕の一生の失策だつたと仰られた。夫を聞てから後は私何だかつまらなくなつてよく〳〵私は價値の無い女だと思つて嫌に成つてしまう。元々私と旦那樣とは性が合はない。熱するものは醒め易しといふが、ほんに極度の熱が一日にして凍り詰めたといはうか、私はあまのじやく故態と冷淡に構へて居たのが惡かつたかも知れぬ。私は何時迄も變らぬ愛を望むばかりに餘計な事をいつた爲、僻んでおしまひなすつて今日の樣な仕儀とは意想外結果。元私の求めて居た愛と旦那樣の求めて居られた愛と愛の種類が違つて居た。世間の人は二十年も三十年も夫婦中睦じく什麽して暮すので有う。女は何も彼も自分を曲げて夫に從ふのであらうか。私には什麽しても其同化といふ事が出來ない。精神の向上。夫は私の命だもの。夫婦互に魂を向上させる樣に勤めるならどんなに美しい家庭が出來やう。もし私が旦那樣に同化したら共に墮落のどん底に落て了う、ほんに旦那樣が人に有仰つた通、私みた樣な者を妻とせられたのは旦那樣も不幸だらうけれど、私も此麽な事とは思はなかつた。さらばといつて夢にも離緣るのは厭。夫は女として一生の恥、此上もない恥、其麽事にてもならば私なら自殺して了う。只此の儘に私はどんな苦痛でも堪へようから凝と辛抱して長い間知らず知らずの中に夫を導かう。遂には私の心が徹るだらう。何時かは互に心が解け合ふて嬉しい晴やかな清い高い日の光を一つ心で見る事の出來る時が來るだらう。

藤子が明るく燈したランプを持つて出て來た時、夫は何時か火鉢に鐵橋を掛けて歸りに買つて來られたのか澤山の餡麪包を炙つて火箸を持つて返して居た。藤子は心に懸る先程の手紙を取つて封を切つた。これまたあらぬ疑心をさし狹まれてもつまらないと殊更ラン

プの近くへ持つて來て明白に封筒を披て開き乍ら、
「あなたほんとにお夕はお濟みになりまして？」
「濟んだ。ぐず〳〵して居るのは嫌だから、」
藤子は其儘開いた文の面に目を下す。
おなつかしき藤子樣。什麼してお手紙下さらないの、もう〳〵友達なんかいらないてせう、お目出度う、だけど少しは其歡をお漏しなさいよ。お煮焚もお手づからですつて、ほんとに感心、理想の爲には違つたものですね、よし生煮えても焦げ付きても誠心て遊すのだから山海の珍味にも增して結構てせう。昨日も先生のお宅で花子樣にお目に懸つてさんざお噂致しましたの、そして其中二人て御伺するお約束しました。よくつて………。

（評）「精神の向上、それは私の命だもの。」とか何とか、恁んな抽象的な無意味な文句を業々しく振廻さない方が佳い。始めて人の妻になつた我儘な女の不平が能く出て居るし、筆もゾンザイな割合には行屆いて居る。

＊　＊　＊　＊　＊



舞子　　名古屋　鵜飼瑾子

秀逸

○友

山田くに子

くもつた土曜日の夕方てある、僕と友の町田と日比谷行きの電車の中で、妙な話が始まつたのてある。それは、今日土曜日て會社の方が半日て退けたので、兼ねて僕等の友で岡本五郎と云ふ詩人、それが此度ゑん有つて、小笠原伯の奧女中をしておつた、みどりと云ふ婦人と結婚したと聞いて、其御よろこびかた〳〵、實は其夫人の御姿を拜みに、二人つれだつて行つた歸りてある。

行きがけには、岡本におごらせる〳〵と大いばりて、いつも僕より二三歩づゝ、さきをあゆんで居た町田が妙に沈んてしまつたので、どうした〳〵と聞いたあげく、ついに町田の長き秘密を、今夜日比谷公園の、つるの噴水のわきの吾妻やで聞されると云ふ事に決定し

たので……。一たい町田と云ふのは、へんくつな程眞面目な、其くせ妙に情にもろい男である。が、しかし、同じ會社につとめてをる同りようの誰れ彼れが、各妻帶してをるにかゝはらず（そう云ふ僕も妻がある）町田一人はいつまでも獨身者下宿やの骨のある腰べんとうで、せつせと會社へ通つては、家へ歸つて寒いのに、たれ一人「お寒むかつたでせう」と優しい聲をかけてくれる人もないのに、それを苦にもしない樣な、それほど情のからぬけた男ともある。それが今日秘密を話すなんて、一體何だろうと、僕の胸はいろ〳〵思の糸が入り亂れる、——其間に早くも電車は日比谷で止まつた。

「おい町田、日比谷だぜ」

「う……………」夢からさめた樣にこう云つて、力なく立ち上る姿、どうしても日頃の町田でない。バタリとおりて、少し行つて、門をくゞつて、寒い風にぞつとしながら、二人は無言で、僕も何だかきまりが惡くて言がかけられなかつた。そうして二人はだまつて噴水のそばの、あづまやまできてしまつた、町田は始めて甦つた樣に、どつかり雨ざらしに成つたベンチに腰をおろして、

「さかけ給へ」と僕に云ふ。僕は又無言で腰をおろす、二人の間に寒い〳〵氣が通ふて、噴水の音はつよく二人の胸にひゞく。

「すぐ云ふよ」とつぴにこう云ふ。

「あゝ」僕もかんたんに——。

「そう！僕がまだ神戸の商業學校に苦學生で通つて居た頃さ、其頃苦學生間にきまりの、僕も牛乳配達夫さ——」一寸言葉がとまる。

「おゝそれより前、君今日岡本の妻君を見たどろう」

「うん」「そらこう長い眉がけむつて、まつげの長い、目の凉しい、——それさ、それと同じ顏の、その頃まだ娘だつた」こう云つて又一寸息が切れる。

「牛乳を配達して、其の頃其の町の或る名醫職をつとめてをる、副島と云ふ家にもくばつた、其の家さ、丁度十二月の寒い〳〵朝、いつもの樣にがらつと裏の障子口から、おだい所にはいつた。其の時！いまゝで見なれない、——そら、眉のけむつた、まつげの長い、どことなく人を引付る、十七八の娘、いや令孃見た樣な風さいが見える、然し着物はきたない、外の下女と同じなりをして、ながしに向つて、まつ白な手で洗

ひものをしてゐる、僕ははつとした。誰だろうと思つた、しかし其日はそれ切りて方々くばつて家へ歸つた、だが何だかこう物たりない様で、何だろう、とじつと心を澄すと、其娘のかほが胸に浮ぶ、あゝ物たりないのはこれか――と我からうち消す、こう云つた風で二三日、行たび〳〵きつと其人は洗ひ物をしてゐる、そして、ガタツト障子がなる、けむつた眉がつと上つて、あのまつげの長い目がパツト僕を見る、すぐ淋しそうにうなだれてしまう‥‥。其物あはれげな姿がついに僕の心の底に戀草の芽を誘ひ出してしまつた。もう其副島の家へゆくのがたのしみで、ついそれとなく其家の出入の、まあ三太夫と云ふ様な男に聞て見ると、どうだろう、それは其家の令孃さ、それが長い事田舍の乳母の所へ里子にあづけてをいた、乳母が愛に引されて手ばなすをしがる、それが又こつちでは、生れおちるとあづけたので(妻君が病氣とかて)まあ親子の情愛が日に〳〵うすくなつて、つい〳〵十八の年まで其まゝでをつた、それが其年乳母が死だ爲、いよ〳〵家へ引とられたが、妙なもんて、親子の情が丸で冷えてゐる、父母が其娘を下女代りにつかふと云ふ、――こう聞と僕の戀はます〳〵つのる、可愛そうだ!。こう思つては其思に、我一人苦しんでゐたのだ、そうすると、忘れもしない正月の元日、今日こそ少しは美くしい、はれぎをきてをるだろう、もしや勝手に出て居なかつたら‥‥‥なんて、むやみに思つてガラツト開ける!、どうだろう、泣てゐたよ、長いまつげに雫が一パイ!きものも昨日とかはりがない。僕もあつけに取られた、其歸りさ、こんな事を思つた、今あんなに悲しんでゐるが、他日僕が成功したあかつき、立派にさせて、慰めて、‥‥なんて‥‥こう思つて歸つたつけ!それから三月僕は商業學校を卒業して東京へきてしまつた、二人の間はそれつきり、しかし僕は一日だつて忘れなかつた、それがどうだろう、今日の岡本の妻君!それがてつきり君!其人じやないか。これきりさ」こう云つて深い〳〵ため息をつく、僕は日頃町田の行が眞面目なだけ、それだけ此ぼんやりした様な愛の歷史に、同情の思が湧いてくる。

「町田!よくわかつた!!」こう云つて町田の手をしつかりとつた、町田はそれをにぎり返して、

「な、島君、岡本と、其みどりさんとやら、ラブし合つて夫婦に成つたのじやないだろう?」

僕はそく座に答へてやつた。

「そうじやない！君考へて見たまえ、みどりさんは小笠原の奧女中だつたよ！どうして君、何をする事が出來よう!!」

「そうだ！あゝそれを聞て安心した、僕は一生獨身で送る——」僕ははつとした、へんくつな程まじめな町田は、此今云つた言葉を實行するにちがいない、——けれど其實みどりさんは、岡本の美しい詩集に思ひをこめて、そして此ゑんは成つた事を僕は知つてる、そう思つては不幸な友町田の上に同情の涙をしまなかつた。

（評）　堅屈の男の便り無い戀が面白く書けて居る。「な、島君、岡本と其みどりさんとやら、ラブし合つて夫婦になつたのじや無いだらう。」と問ふ所など、性格も遺憾なく顯はれて居るし、弱い沈痛な響もあつて大に振つて居る。然し、推敲の足りない故だらう、文章が甚だ拙い。

○男ごゝろ

冬野ゆき子

時は今年の夏、未だ中の島のハイカラ亭に生ビールの腰掛飲が盛んに流行つて居る頃である。川野に連れられて眞似心に此ハイカラ亭に這つてビスケットを噛りながら看護服やうな給仕衣を着けた二〇三高地の給仕女を相手に口にも馴れないビールを二三杯傾けて苦しみながら歸つた事がある。

其後丁度三日目であつたと思ふ。夜の十時頃、圖書館の歸途に、今度は只一人で此亭に寄つた。正直を云へば、僕は元來酒と煙草は絶對に禁じて居つた者で、川野に連れられて彼の夜、何故此禁を破つてビールを飲んだのであるか其動機が自分ながら不思議てならんのである。其れのみではない、其後一人でハイカラ亭を進撃するに至つては寧ろ驚くべしてある。斯くして三日隔に往き、二日隔に往き、軈がて毎日往くやうになつた。勿論川野は此事を毫も知らない、又報らさうともしなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

おゆりはハイカラ亭の一人娘である。最初の夜は非常な取込みであつたからおゆりも給仕女に立ち交つて客に應接して居つた。當時は勿論此女が此亭の娘とも知らねば其名がおゆりである事なども知る筈はない。只亭を出て、大江橋を渡つて、梅田を過ぎて今津の一人住ひに歸る迄、醉の廻りに苦しみながらも、おゆりであつた彼女を思ひつゞけて居つた事だけは事實である。

何故かく迄彼女を思はれたのであらう、實は其面影がよくもよくも郷里の僕の愛妻に似て居つたのである。

足繁く此亭を訪ふやうになつたのも、愛妻に似て居る此おゆりを見度い爲めて、飲み馴れないビールを飲んだのも此亭を訪ふ爲めてあつた。打ち明けて見れば不思議も何も有つたのてはない。其内におゆりの名も知れば、其芳紀も僕の愛妻と同年て十七てある事も知り得たのである。今は言葉も交はせば、時々女の親の許容を得て二人て文樂座に半日を樂しく送る事もあるやうになつた。僕は愛妻に似て居るから愛妻と思つて愛し親しんだのてあつた、おゆり其者に對しては元より何の考も有つた譯ではない。然るに悲しむべき事が僕の身の上に到來した、僕は此突然の出來事を理由として愛妻を捨て、おゆりと結婚しやうと心を動かしたのである。

＊ ＊ ＊ ＊

厭きも厭かれもしない相愛の妻を捨つる事は僕に取つて自殺よりも苦しい。然し妻の兄は今度愈よ臺灣の猛絆に青樓を開業する事になつたのである。

出勤前　八王子　小池咲子



此事も單に世間一樣の營業と見れば何事も無いやうなもの丶、僕は曾て―今でも―遊廓廢止論者てある、彼の八釜しかつた旭川の遊廓問題などに就ても極力論議した一人てあるのに、青樓の主人の妹を妻にして置く事は如何にしても主義の上から許せない。最愛の妻を斯る理由で捨つるのは甚だ冷酷でもあれば不條理でもあるが其處は疾と妻にも云ひ含めて斷然離縁しやうとしたのである。勿論妻への申譯には一生獨身生活を貫く考であつた。之が恰もおゆりと親しく交はつて居る時であつたから此おゆりを娶つて以前の妻と思つて愛しやうとした。理由は如何やうにも付け得るもので自分ながら恐ろしくもあつた。此談判は一方は意外に早く渉つたのてある。只妻の方へは未だ何事も云つて行り得なかつた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

意外なる事もあるものてはないか。僕は殆んど驚倒し

て身の置處がなかつたのである、意外の事とは斯うてある。

僕が妻に似て居ると云ふおゆりの親は手代をして舞鶴に現に青樓を營まして自分も時々監督に出掛けるとの事を耳にしたのである。

青樓の主人を義兄に仰ぐ事の出來ない僕が何うして青樓の主人を岳父に戴く事が出來やうか。

僕は愛妻を捨て丶、其愛妻に似たと云ふ他人を娶る如き鬼々しき恐ろしい心を愛妻に知らさずに居つた事を非常に上策であつたと感じた。

僕は愛妻への申譯に最初の決心通り一生獨身で貫く決心である。

（評）つかみ所は稍面白い。主義の上から最愛の妻を捨て丶、其申譯には一生獨身と決めた男が、妻に似た或婦人をば妻と思つて愛しやうとした。然かも其の『妻と思つて。』と云ふ事が。自ら欺く附理由であるのを自覺して居る所が面白い。勢のある文章で可也好く書いてあるが、何分其波瀾の因となる主義其者が單純な爲めに、一篇の拵へ物の感があるのは困る。要するに短篇の趣向では無からう。

○誤解

山口縣　吉田良子

A小學校といふのは、新平民半分の二百人ばかり居る。町の子供は荒々しい新平民の子等の爲めに少さくなつて居る。一體なら新平民といふ名に對しても町の子供には一歩を讓らねばならぬのが、全て反對である程獰惡な性質である。

何事でも大將といふものがあるが、彼等にも亦ある。山田三造と云つて高等四年生が彼等の大將で、三造のいふ事を聞かぬ者は一人も居ない。だから町の子供等も怖れて三造を呼び捨てにしないのである。三造はそれを好い氣になつて荒びれて居た。此の三造が近頃何事かで一週間も缺席した、流石の新平民の子供も何となく火の消えた樣である。

今丁度食後一時間の休みの時である、何と云つても無邪氣な子供等は塵砂の中で喧々として遊んで居る。高三の教室の廊下の下で春の暖い日を浴びて話して居るのは三造と同年級の六七人である、勿論、町の子も新平民の子も居た、時に廊下の上を來て此の生徒等の居る處へ止つてニツコリしたのは梅原先生である。

梅原先生は女教員で尋二の受持で、未だ二十を出たか出ぬかの頗る若くて美しい、羽織も下着も袴も皆うつりよく倘品を高く麗はしく見せるのだ。二言三言云ひかはして先生は一寸あらたまり。

「山田さんが近頃みえませんね」

と云つた、生徒等は口を揃へて山田は病氣て寢てると告げた。『まあそう』と女は氣にもかけない事を如何にも懸けた樣な見えをする顏をして先生はかう云つた。軈て先生は敎員室の方へ行つた後て生徒等は何となく胸やすからぬ風が見えた、生徒と云つても多くは十四、長けたのは十六七てあるから今春の櫻の莟を持つてるやうに彼等も戀の芽が吹き出んとして居る處であるから一寸不安な、また小さかな嫉妬心もあつた、『先生は山田に惚れてるのだ』と一人が云ひ出してから皆が頷いて何、彼、と戀と夢との界のやうな事を云つて居た。

翌日三造は靑い顏をして出校した。未だ全快もしないので四枚ばかり醜い衣服を重ねて鼠色のハンカチを首に卷いて居る。顏も只獰猛だと云ふばかりて、なつかしい處は一點もない、新平民の子の頭とするだけ昔の彼等の血を多く引いてるのだと云へば云ひ足るのてある。が今日は頗るおとなしい、病氣の故もあらうが兎に角日頃の彼てはなかつた。二時間の時業が終ると三造は一番後に行く町方の三好と云ふ少年を呼び止めた、三好は大なる不安を顏に浮べて三造を見上げた『君笑つては厭だよ』と前置をした、『昨日梅原先生が僕の缺席してる事を問たつて本當?』とさしのぞく樣にやさしう云つた、三好は此の問には少からず驚いたが、又彼のやさしい言葉を不思議に思つた『ウン、本當だ、先生が非常に氣づかつてた』よと云つて三好はソコ〳〵と去つた、敎室の入口には未だ三造は立つて居て何事か考へて居る。

門出　京都　八重女



三造は十六てある、戀といふ芽は梅原先生を見た時から萌えたのてある、が自分は新平民と云ふ事を思ふ刹那には大電で打たれた樣に心が冷えるのだかくて今日まで戀しい……が自分は……と繰りかへし〳〵自分のみに煩悶を續けて居た。昨日三造は夕暮の淋しく臭い濕つた蒲團の中で矢張其の事を思つて居る時隣の卓次が來て梅原先生の事を告げた、と今まで心の油は火に近から〳〵として居た折俄かに火が移つたやうにクラクラと燃えて來たのである、『自分も惚れてる、先生も

……」と幾度が胸に言ひ答へて淋しく笑つた、そして今日は矢も楯もたまらず、未だ頭がワク／＼と痛むのを押して來たのである。

三時間の時業が終つて矢張入口に立つて居た三造はふと梅原先生の此方に來るのを見て、うれしい樣な羞しい樣な心が亂れて、また怖しい樣な氣持がして知らず／＼隱れた後で惜しい事をしたと思つたが、今日はそれで三造は家に歸つて、寢ながら先生の姿を胸に畫いた上に畫いて居た。

其の後の三造の性格は全々變つて今日までの荒々しい行もなく、何か物思しげに茫然としてるのだ、又話す友と云へば新平民の同族のものはさけて、町方の子に我れより近づいて、下から機嫌を取るやうにも見えた。三造は遂に意を決して昨夜梅原先生に戀の文を送つたのである、その使には町方の例の三好が持つて行つたが留守だつたので置いて來たので、三造はその返事が氣にかゝつてならない、今日は尚沈んで餘り多くは言を發しなかつた、ふと尋二の教室の前で梅原先生を見た三造は一度は顏を染めたが、走せて先生の前に進んだ、そして何か云うとした時先生が先きにやさしい中に力ある聲てから言つた、「貴君、昨日のやうな事をなさると校長先生に云ひ告けますよ。」

此の言葉を聞いた三造は先生の立ち去る姿を茫然と見て居たが、やがて涙をハラ／＼と止め度もなく流した、そして足を擧げたと見るや、大きな音がして入口の戶の板が裂けた、三造は「畜生ッ」と云ひつゝ默つたのだ。

一度沈默であつた三造は之れを手始めとして其の日より前より一層烈しい荒行を始めた、おとなしかつた顏はその日より再び獰猛な輝きを放した。

（評）書きやうによつては些つと面白い趣向である。中子供の戀であるから、其煩悶や態度やに今少し中子供らしい特點を描出して欲しかつた。

○老孃

備後　中山八千代

紫の瑞雲が刷いた樣に引いて歡呼の中に昇つた、四十一年の初日を汽車の窓から拜んで、屠蘇の香高い下宿屋の注連の下を、無言でくゞつた。

溫い家庭の人となつた樂しい夢から醒めて、薄い蒲團に寒さを感じた七年の愛さを、丸い食卓を圍んで湯氣の昇る齒固を、食しながら語ろうと樂しい思に憧れて、包み切れぬ笑を浮べて歸省した自分は、僅か五日目の元旦を鄉里で迎へる事が出來ないで、再び冷い下宿の

二階に過す身となつたのである、抱へた手荷物をソツと置いて火のない火鉢に、倒れる樣にもたれると華やかな妹の顏派手な兩髮が、電光の樣に目の前に現れる、今宵は結婚！定めて今頃はあの四疊半の化粧室で、一生懸命に白粉でも塗つて居るのであらう、いくら結婚の樂しさに憧れて居ても、昨日の自分の態度には心地が惡かつたに相違ない、と思ふと母と妹とが泣聲で止めるのを、疊を蹴つて歸つたのが胸がすく樣に心地が好い、自分は又今更に＝おや歸りかへ早かつたねえと、水の樣に冷い母の言葉を繰返して見た、これがそも七年目に會つた子に對する母の言葉であらうか、通知した時間よりも一時間後れて歸つた自分を、早かつたと云ふは、自分と云ふ者が母の念頭に無いと云ふ事を、證明して餘りがある少なくも自分を待つて居て下さつたなら、通知した時刻に歸るのすら待ち遠い筈ではないか、＝姉さん切角お歸りでしたのに、私の混雜て思ふ樣にお話も出來ず、御退屈でせう雜誌でも御覽遊ばせ＝妹がかういつた時、自分は其雜誌を投げ付けてもやりたかつた、退屈な思をさすのは誰がさすのだ、殊に其雜誌の小說欄にあつたオールドミスには、胸がわく／＼した妹はわざ／＼オールドミスが、見せたさに持つて來たのであつたらう、＝綾も明ければ十九だからね十九で嫁くのは後れだよ＝と、母は云はれた十九の妹は後れるといつて、大急で結婚しなければばならない、三十二の自分はどうするのか、あゝ厭だ一週間もすれば又無意味な、教授をせねばならぬ嗚呼自分は女學校卒業當時、降る程あつた緣談を拒んで、獨身で教育界に貢献するなんて何故思つたらう、高等師範を卒業した時何が嬉しかつたらう、と見る机の上には歸省前に美しかつた、水仙の葉の先は赤くなつて花はチリヂリと、萎れたのが意味ありげに搖らいでゐる、見上げれば平常理想とするゲーテの、半身像が冷かに見下して居る、自分は思はず身慄して＝自分は矢張り女であつた＝と云はずには居れなかつた。

嗚呼、此時自分は泌々獨身の淋しさを感じて、花の盛を捨てゝ教育に盡さうなんて云ふ、若い生徒を忘れても此方面に走らすまいと思つた。

（評）淺はかな名譽心に驅られて、あたら身の春を仇に過した婦人が、妹の結婚を見て今更につく／＼孤獨の寂しさを感じ、我一人世に取殘されたやうな哀切な思を寫したのは面白い、それに斯ういふ女に有勝な一種の僻みも忘れずに書いてある。が、餘り簡に過ぎて叙述に肉の無いため、讀んで甚だ感興が薄かつた。

＊　＊　＊　＊　＊

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以内、用紙前同斷一人一章限り、投書締切毎月十五日懸賞品は甲種規定に據る。

二等

○日記の一節

岡山縣川上郡大賀村仁賀　廣江のぎく

十一月十日。今日は日曜で、天氣は晴朗、堅苦しい教科書を今朝からかぢつて居るが、石の樣な教科書はどこ迄も乾燥無味。とみると書齋の南の丸窓に、春の樣な暖い日が一ぱいに光を浴びせて、右の方に柄杓と共に石の手洗鉢が位置よくも影つて居る。チツ〳〵と低く鳴いて來て柄杓に留まつたのは、小さな鶺鴒、右を見左に向きして暇もなう尾を動かして居る、宛然一幅の幻燈畵でも見る樣、祖母樣は小猫が長う伸びて寢て居る日向の椽側で、圓い目鏡を懸けて、針仕事に餘念もない。

午後友來る。興は興を產んでいつしか話に花が咲いた友は何時も天氣で羨やましい。三時頃歸られた。

怠屈でたまらないので我が最大慰藉場たるリヽイ湖畔にと、煤けた室を蹴る樣にして出て行つた。瑠璃色の水は物凄い程碧う湛へて神の秘密でも籠つて居る樣、渚に呼く小波に奇麗な眞珠の樣な水玉が轉がつて、玉藻の花は白う幽に香て居る。今しこんもりと繁た天神の森の邊りの蘆から、白帆の小舟が盥の附木舟のやう輕く南にスーと辷て走ると、五六羽の水鳥が驚いて四散して、遂にどこへか飛んで行つた。西の方の蘆間に誰れか釣でも垂れて居るのか一尺程釣竿が見ゆる、其の傍の高い枯木には、十羽斗りの鴉が何か爭ふ樣に騷いで居る。美い松原續き白沙の汀あたり、賤が家のほの見えて、夕餉焚くのか、細い〳〵線香の烟の樣なのが二條三條絶ゆるに垂んとして居る。折しもゴンと靜かな大空をゆるがして觀音寺の鐘聲、一杵二杵、三杵思ひ出したかの樣に又一杵。

（評）觀音寺の鐘聲したしく聞く心地す、妙手。

三等

○長屋住居の第一日

伊豫　曉子

日々に迫り來る貧窮に堪へかねてもはや多からぬ家財道具を引きまとめて今日此長屋の二軒目に引き移つた間數は三疊に六疊の二間で二人の住居には充分である弟は依然中學に通つて居る。自分も相變らず他家の縫物をして二人の口を糊してゆくのである。

晝頃には家中も整頓したので兩隣りへ挨拶にゆく。北隣りは戸が閉されて居るので南隣りを訪へば聲もしない。ゆがんだ柱の釘には車夫の破布がかけられて四疊の座敷の隅には薄つぺらなせんべい布團を頭から引きかぶつて一人の男が高鼾で寢入つて居る。又にしようと思つて戸口を出てんとして居ると髮計り立派に結ゐたる二十才計りの女前掛にて手を拭ひつゝ裏口より入り來て丁寧に挨拶す。

歸りて見れば弟は椽側に出でゝ今日の貧しさまで手ばなさゞりし亡き父上御手植の梅鉢に水をやつて居る。かつては二人手を攜へて山茶花さく垣根に理想や抱負を語りあひしまり樣の小紋縮緬の御破布裁ち合す程に井戸端會議の聲が喧しく聞え出したので自分も米桶さげて出てゆけば、女共はつと話しを止めて妙な目付で見る。流石に隣りの女のみは笑顔作つてさアと愛想がいゝ。

夜ランプのホヤを破つたので今夜一夜を紅提灯てと、今は叔母の家に預けある妹の玩具なりし紅提灯に燈して二人枕を並べて床についた。けれども既往の事共が胸に浮んで容易に寢つかれない。弟も寢つかれないかしきりに寢返りを打つて居る。月影が障子に明かにさして居る。外はきつと父上のお亡くなりなすつた時のやうにいゝ月夜だろう。

あゝこの長屋住居の一夜は我等姉弟が永久に忘れ得ぬ一夜となるであらう。

（評）つらきこの長屋住居の、やがてたのしき語り草と生ひいでんことこそ祈らるれ。

四等

○櫻松會

備後沼隈郡草戸村　中山八千代

八日快晴。待ちに待つた音樂の先生が、東京から愈々今日御赴任になつたので、先生の御出席を願つて例の櫻松會を開く事となり、自分は御料理役殊に主任の事とて、急がしくて目が廻りさうであつた。未だ嫁菜も刻めぬに、誰が入れたのか、フライ鍋のバターがヂリヂリと煮え付いて煙が立つ、急いで下して置いて、ヤツと刻んだ菜をいためて見れば、村山樣は、慈姑の皮を剝いて水に入れなかつたので、アクが出て變な色になつてゐる。驚いて水に入れたがもう駄目、又大急ぎて小使を買ひにやる。漸く買つて來たのを、今度は忘れずに水へ入れて、夫を山葵卸して擂鉢の中へ擂り卸して居ると、テンピの火加減を見て頂戴と云はれ、慈姑の方を田邊樣に願つて、走つて行て火を加減し歸つて見れば、擂つた慈姑を油て上げて入らつしやるので聞いて見ると、メリケン粉と玉子と砂糖との事、鹽を忘れてまあどうせうと泣き度かつた。こんな失敗を繰返しながら、接待主任の丸山樣に數度の催促を受けて、

漸く出來上り、御膳をした後は、接待役に任せて、笑聲の洩れる扉を開いて入ると、御料理が手間取るので心配してた皆様が、安心したと云ふ顔で莞爾とする。見ると新任の先生は朗かな東京言葉で樂しげに語つて入らつしやる、音樂の先生丈に御言葉の冴々した調子、釣合の好い御身體、同情の深さうな御顔立、ゆつたりと椅子に依つて入らつしやる樣は、丸で櫻の花の精の樣で、思はずほゝゑまれた。自分等の不手際な御料理が並べられて、御箸を取上られて後、隣の大川さんが＝慈姑にお鹽が利かなかつたのね＝と囁れたのには、苦笑せずには居れなかつた。終に先生の獨吟があつた自分等はもう醉された樣、朗な調、豐富な音量、唯鶯の聲などは比べものにならないとおもつた。かくて自分等の爲に忘れられぬ紀念を殘して、今日も遂に過去の頁に葬られた。

（評）心をこめたるこの接待うけたる師の心地、羨やましき程といふべし。

五等　○三日の記

小石川區戸崎町五　三宅恒子

六日。日曜、早くお室を掃除し机の一輪挿には山茶花をいけぬ。ふと兄様の御書齋見しにいたくも散らかれるに、こゝをも淸めつ。ぬぎ捨の召物をもたゝみ終へし心地よさに、獨ほゝ笑みて八犬傳をひもとく。知らぬ間にめくりしページの數積りし時、やあ奇麗に成つたなと隣室に兄様の喜び給ふにうれしくて……なかば開きおきし小窓より赤き紅葉の一ひら入りぬ。優しき秋風のすさびかな！夜、母様をもむ。

七日。姉様、椎の實拾ひに行かない？我が歸り待ちかねし弟の誘ふに、參りませうねと庭下駄のまゝ。秋も末ぞ！花壇の七草、美しかりし誇の影もなう、只白菊の香のみ氣高し。落葉がくれの小さき實中々みつけ難う……「姉様！いくつ？」—十よ—下手だな。僕こんなだ」と携へし袋高く上げて打振りつゝ「姉様！お離て兵隊ごつこしませう」かくておばあ様驚かし參らせつ、三人して椎の實を正しうお椽にならべぬ「どれ御ばあ様が勝たうかの……眼鏡かけ給ひて御口は確なれど玉は幾度もそれて敷石に愛らしき音立てつ。弟は大勝利、御褒美頂き、ちさき肩そびやかして「萬歳！」秋晴の空靑う花火の如き雲西に流れ行く。

八日。祖父様の一週忌！姉様も來給ふ。僧のならす淋しき鈴の音に細き讀經の聲に氣もめ入りて、甲斐なきを悔、御在世の折の事ども忍ばれてぬかたれてのみ居りしに御燒香ぞと母様のみ聲、靜に香くぶれば紫の煙ふはくと淸き香とともに御位牌をめぐる。あはれ、祖父様！我が心をも籠めてみたまつゝみ奉れと煙に願ひしと知ろし召すや。

月凄し。今宵は日記を悲しう記しをはりぬ。

（評）これといふふしなけれども心引かるゝ筆の跡哉。

〇豐年日記

羽前　松山秋海棠

九月二日晴。一年の心配を集めたる二百十日は、雲晴れし鳥海の頂を現して明けぬ。父の喜たとふるに物なく、妾の酌に新酒の瓶の口ほどきぬ。夜小作の者來りて豐年踊の相談あり。

三日晴。寢卷の儘裏庭に出でぬ。唐辛子の靑きは靑き露、赤きは赤き露を帶びて美し。この二色の露混ぜたらんには紫の露とやならまし。夜、また踊の相談ありて、例年の如く乳母は音頭取頼まれぬ。

四日雨。庭の桔梗の蕾、六角形にふくらみ、中には少さき姫の在しますにやと思はれぬ。雨を帶びて稻穗は重くたれ、稻の香はしめりたる空氣を傳うて窓に入る。土藏の戶をしつかとしめて、村の若者踊の稽古あり師匠氣取の乳母の樣は幼稚園の教師が遊戲敎ふるに異ならず。生徒は何れも大の男、松の幹さながらの手足なれば、中々に自由ならず、師匠の乳母に叱らるゝも可笑し。

出代り　　三重縣　いわ子



五日。晴裏庭の鬼灯二つ三つ色付きぬ。桃色の頰ふくらして、鳴らし興ぜし昔、中々に戀しきものかな。稻の葉摺の音は、田園趣味の栞といふべし。

六日晴。今日は赤豆の收穫なれば、お葉手傳に來たる姉さん冠の姿なんとなういぢらし。二人にて色々の事を語りあふ。お葉は嬉しさに頰を染めたり、その白魚の如き齒を見らるゝも僅かの程なり、米の收穫すめば人の妻となりて齒は黑き鐵漿になどおもひやる。愈踊は明日よりとか。

（評）露の條面白し。

〇日記のまゝ

羽陽　笑花　賤女

三月七日。晴。朝霜白し。十時過ぎ張物を南の日當りに並らべ干す。韮松の蔭未だ霜柱消えずソックリなれば、此頃雪構へ半ばくつろはせ置きし椿の何うやら心掛れば、その霜の上をゴリ〳〵と下駄音させ行き中覗き見るに、葉は所々凍れど、蕾には先づ差つかへなき樣なれば、安心して宅に入る。椽先きの鶯、籠の中にて心地よく謡ふ。午後は妹の羽織を裁つ。床の紅梅半ば散り落つ、されど見惡くからねば其儘に置く。

入口よし。

三月八日。晴。朝珍らしき雲二つ三つ東の川下の方に見えぬ。弟に縺つて鶯に餌をやる。昼までに羽織縫ひ終る。午後妹とお隣りの春子様と薺摘み、今年黄色の蝶は、今日始めて見る。川向ひの山にても幽かに鶯の聲聞ゆ。どうやら籠のよりは餘韻ある様、夜春子様の宅の歌留多會へ行く。

三月九日。晴。なまぬるき小風吹き、庭の青柳頻りに動く。名古屋の初子様、少女界六册送らる、文藝倶樂部と女學世界取り交ぜ五册直ぐ返本、暮れ方日に鱗雲かゝる、晩鴉は何んとなく五月蠅さうに鳴き騒ぐ。あはれ明日の天氣のおぼつかなさ。

（評）穏やかなる筆つき、今一息のところ。

○ありのまゝ

大津　今村越智子

一月五日。うらゝかなる日なり、美代さまより御寫眞に添へてお手紙まゐる。いつの間にか肩揚取れて、いたうおよすげましぬ。簪の花は白百合なるべし。片頬笑み給ふがまたなく艶なり。見し頃よりはやゝにやせ給ひけり。母さまに見せ奉る。美代さまのお噂に時うつす、夜返し認む。

一月六日。都の兄上へ小包送るとて、母上朝より立ちさはぎ給ふ。シャツ、袷羽織など入らぬ程に多くつめ給ひぬ。ビスケツトの罐を入れ給ひしを、父上の都にはさる鄙びたるより勝れたるがあるべきをと笑ひ給ふも、これもよかるべしとの給ひて入れ置き給ひぬ。いつぞやお約束の手袋早う送り給ひてよと小さき紙に書いつけて袖に入れ置く。

一月七日。雪いさゝか、何となう人なつかしく物思はるゝ日なり。友のうつしゑ、玉章など入れ置きし手文庫啓けて、繰り返し讀む。なつかしき思出にほゝ笑む事多かり。

夜きよと買物に行く、わらはのものは、下駄と肩かけ一つ、あとは母さま仰せの品、肩かけよく似合ふと父上までの給ふ。これにて寫眞取りて美代さまに贈りまゐらす積り。

夜ふけて汽車のひゞき手に取るやう聞ゆ。美代さまあれに乘りて來まさばやなど勝手な事を思ふまに寐入る。

一月八日。雨細し、朝學校へ往く、雪のみち雨にぬかるみて、美しかりし昨日の面影もなし。角の床屋の前、端然の姿いみじかりし雪達磨の、はや半ば首溶けたるいとをかし。學校にて皆さまに同じ御慶を言ふ。歸りて無事。

（評）これも亦穏健の筆、以て飲ふべきもの。

○臺所日記

加賀　小島きよ子

一日。雨。新聞賣の鈴の音に驚きて起床すれば、雨無

三、寢過したり、早や六時！今日こそはお目玉頂戴かと急いて飯を焚く。やつと登校時間に故障なき樣膳を拵へ、別にお叱りにも逢はず良人を見送りぬ。午前肥取の爺さん來、薪二束と糯三舛下さる、小返に苦しみ考へて半紙二帖を送る。縫ひさしの袷仕立てゝ夕餉の用意をなす。鰯三尾六錢。葱一把一錢八厘。晩酌しながら恐る〳〵良人に肥取爺さんの話をす。褒められてうれしかりき。

二日。晴。今朝は鴉の啼かぬ前に起く。されど休日なり。十時になれど良人起き給はず。牛乳屋錢集めにくる。茶棚の引出しに三十八錢、モ一四錢足らず。良人を起さんとすれば、スヤ〳〵と、苦しかりき。午後連れられて公園の櫻見に往く。半年振りて學友なりし黑田さんに逢ふ。恥かしく、嬉しき心地しぬ。

三日。晴。こつ〳〵と棚に鼠の音して玉（猫）に獲らさんときしかけし途端、徳利倒れて酒二合斗り流れ出てしに密に買ひ置きぬ。圭庵婆下女を連れ來る。十四五のをと誂へしを、妾より二つ三つ年上の者にて、髮の結ひ振りから口調までが、阿婆摺れの樣にて、萬一……と一も二もなく返しぬ。晩良人に話して笑はる。

四日。晴。妹の命日なり。文庫より寫眞出して涙に咽ぶ、庭の櫻手折りて其前に手向けぬ。佛壇も經典もなく、口覺えの阿彌陀經を暗誦す。まだ終らざるに郵便來る、こは東京なる叔父樣よりなり。妹の事もありて尚々悲し。お隣りの坊ちやんの袷縫ふ。夜の九時にもまだ良人が歸り給はず。何故にや、何處に御在てなりしにか、豆腐汁が冷へて熱くすることも三度目、腹は減る、ランプの油はなくなる、大和風呂に凭れて夜を明す。

（評）遠慮の筆。

○松の殘り

岩代　根本松江

七日。曇り。氷叩く音に夢破られて床を離る。外の寒空に引きかへ、お座敷の中の暖さ、床に活けられたる南天に一家和樂の色も見えぬ。七草お粥頂く。秀ちやんに髮結うて上ぐ。一尺斗りのお下げに幅廣のリボン二ツ蹈して、宛ら蝶々の樣なり。從兄の良三樣來らる。兄樣とお二人、寄宿舍の失敗談に皆々おとがひをはづしてふ。心地好氣に眠りたる秀ちやんを、安に負はせて送り屆く。

八日。曇。雪摸樣なり。松や竹の葉取去られて神棚も淋しくなりぬ。兄樣達は、一番にて出發、家の中一しほ淋し。福島の姉樣來らる、夢の樣なり。小豆色の手柄に、小紋お召しの被布召して、吾姉上乍ら品好しと見上げまつりぬ。一夫は生後四ヶ月、丸々と肥りたる兄樣生寫しなり。母上は始終にこ〳〵顏、私共をお忘れ遊ばしたる樣、降り出したる雪は夜に入りて少しく止みぬ。更くる迄話盡きず、いぬる折始めて秀ちやんを思ひ出しぬ。

九日。晴。雪は、四寸餘り積りて心地好う晴れ上れり

一夫を抱きて秀ちやんのお宅へ往く、秀ちやん恨めし氣に眺む。餘りのいぢらしさに、連れて來て、お守りを頼む。母様お料理方忙はし。明日は、秀ちやんも寫眞のお仲間入りするとて大得意、幼くとも女丈けに着物の事をうるさく尋ぬ。母上戯れに時色の夏洋服召してお出てと曰ふ、眞面目にして聞き居る可愛さ、人々は大笑ひ、いつになく空摸様の氣にかゝりて……。さるにても、秀ちやんの今宵の夢や、如何に、聞かまほしくこそ。

（評）佳。

○下女日記

京橋　今泉磯千鳥

二月十日。今日は少し寐坊をしたので起きたのは六時、いきなり竈の下へ火を焚付け様と思つて、マッチを擦り込んだら、ギヤオンと猫が飛びだしたので、私方でもキヤッと後戻りしたとたん、何うしたはづみか、夜店で三錢五厘で買つた櫛を折つてしまつた、三錢五厘焼芋を買へば二三日あるのに……まアいゝわ！私あきらめるわ！買つてから百五日位なるんだもの！。

二月十一日。ガタン〳〵「もうお鼠様が出たんだねえ早いこと、」ガタンピシヤ……チウ〳〵〳〵。本當に昨夜は寝心地が宜かつたわ、鼠二匹取つて。お陰様で今朝五錢もうかつてよ、昨日の櫛代三錢五厘引いても一錢五厘……だけど櫛は未だ買はないから矢張五錢もうかつてゝよ、今晩は一つ一度に五匹位取つて見たいものだわねえ！それはそうと今日は緣喜が惡いわ、お奥様におつまを見つかつて……。

二月十二日。本當に坊ちやんはお口が惡いわ、今日臺所で洗ひ物して居たら、「大きなお尻だなア此れじや川端へお尻出して置いたつてかつぱの方で懲がつて手を出さない……」つて本當にお口が惡いわ。隨分だわ。

（評）才筆。

○門松日記

四谷　網野田都子

元日。曇り。七時半頃起る。年の始めから、此様に寝坊してしまつたので今年は、毎日寝坊するのかと思つて何となく、氣持が惡い。今日はお目出度い日なのに、お日様がお顏をお出しにならない。御病氣にてもなつたのかしら。夕方白いものが少しばかり落ちて來た。

二日。晴。又例によつて寐坊。友と共に師の君の處に御年始に行く。歸りに、見も知らぬ人を友と見違へて呼び止め、顏から火が出る様な思ひをした。

五日。晴。二人の友よりかるた會に呼ばれどちらに行きてよきかまよふ。身體が二つに別れたら何程よきかと思ふ。

七日。雪。眞白な綿の様な雪が降つて居る。あまり大きくて積らない。遠くを眺めると、雪のフワ〳〵落ちて

來る間から松の木や櫻の木が見える。まるで友禪の樣だ。松も今日て捨てられるかと思ふと、何んだか可愛そうな樣に思はれる。

（評）例によりての寢坊は改められたし。

○霜月日記

芝　吉田　かつ

十一月二十日。夜來の雨は午前十時頃に至りて全く霽れたれど、寒き日なり。

午後、銀座の東海堂にて日記帳を購ふ、今より來年の準備とは、氣の早きことよと我ながら、おかしうなりぬ。夜、月冴えたり。

同二十一日。降るにもあらず、ただ黝然と曇りて泌々寒き日なり。母樣は、竹をつれて四谷の西宮樣へ行かる。夜、西洋史を暗記す、第四篇の『神聖同盟』より始む。十時少し前就床。

同二十二日。午前二時頃強き地震ありたり。午後一時ごろより、しと〳〵と降り出てたる雨は、夜に入りてもなほ歇まず。和文英譯の宿題（十題）を譯し終りたる時、柱時計は九時を報じぬ、直に就床す。

雨あがり　しづ子



同二十三日。新嘗祭。朝より、獨步氏の「濤聲」を讀む。父上よりお手紙來る、二十五日に御歸京なさる、とのことなり。京みやげには如何なる物をや……あゝ明後日のまち遠きことよなど云ひて母樣に笑はる。午後、河崎樣へ（入院中の）お見舞狀を出す。

曇りて心地あしき日なり。夜、頭痛のため、いつもより早う床に就きぬ。—（八時）—

同二十四日。今日は日曜。珍らしく晴れたれど別に行くところもなければ、南椽に机もち出でて書見す、一つの蠅、飛びつ止りつして書をはなれず、捕へば容易く捕はれむまでに弱りたるさま哀れなり。午後、たつ子樣お出でなされ、女子文壇のことなどを色々とお話して四時頃お歸りなされぬ。夜、代數の豫習をせるのみにても、いつになく遲う床に就きぬ。—（十一時）—

（評）老熟のこの筆に面白き材料を握らしめばさぞやとそゞろに惜しまれぬ。

新體詩

横瀬夜雨先生選



▲規定　詩形詩語何れも自由なり、成るべく振假名を多くし、句數は二十句以內とす、用紙も締切日も前同斷、一人一篇を限り明瞭に認むべし懸賞は甲種の規定に據る。

二等

○朝の海、夕の海

函館　ウ井リー子

あゝ朝若き我身は、
愛の胸のひたぶれに、
戀の小舟の朝びらき
遠き思ひをよせ來り、
希望の帆してこぎ出てつ。
南や——
よする小浪が戀言の
血汐の色にほこり咲く、
ひたはせにこそ進みしが、
おぞましや、——
美し一人の魂は、
烈しきねたみ=つとおこる
西もなく東もあらず。

漾々と水や空なる限りなき
君を抱きつ美しき
(ほゝゑみの波ゆたく\/と
潮ざゐどよむ海原に、)
凝りてなりけむ珍花の
珊瑚の島を目ざしつゝ
海の龍にみいられて
(海の秘密をもらさじの
魔の瞳、そをさながらの
渦にして)吹まく風に——
はずにあげたる帆は破れて、かぢとる手さへかきみだれ、
我にもあらぬくるめきに、君を見やれば——。
恐怖の其面ざしよ——
美しき頰の紅はあせゆきつ
いと甘き愛のさゝやきもらしたる、唇はをのゝき、つぶ\/と、
齒ぐひしあとをとゞむのみ——、悲しやと、涙流して神よぶと、
天の彼方に目をやれば、これのみのたよりぞあれ、
信の光明は沈みゆくめり——、あゝかくて暮れゆく海に、
やぶれたる船を生命と、勞れたる君をいだきて、
おちまどふつらき我身に不安の霧のたちこむる——
人の戀路のゆくてこそくらき、はてなき彼方よと、
涙流しぬ。

(評)われ人の戀は常にかくのみ、讀過して涙墮つ。

三等

○敗殘

岩代國須賀川町　根本松江

風寒き如月下旬の夕暮れを、
愛の美酒溢れたる、大甕抱き吾魂は、
跫音輕氣に昇りゆく、石階幾重遙か上に
歡樂秘むる堂ありて、希望の光り仄見ゆる。
世の幸喰みし凶鳥は、前に後に狂ひ啼き——、
地神の怒りか空の雲、鈍の惡雲ひろごりて、

堂は影さへ失ひぬ。
力萎へたる吾が魂は、
そのたまゆら――
石に音あり砕け甕、
永久に蹈らじ土下のもの、
敗殘と奇しき一聲、
常闇の鑰の扉深う双翼秘しぬ。

（評）この人の字の亂暴さもまづ務第の方に近いけれど、詩はうまい、長句短句手に從うて腕前より編み來る才氣侮ると大へんになろ。

四等　○嫁ぐ今宵　　麹町　野村光子

日はとくに迫り來て
今宵その嫁ぐべき日ぞ
かれ十七の身なれども
まだ失せやらぬ稚心
何とはなしの物おぢを
母がみ顔のはれやかさ
急き立てられて夢心地
裝ひ上げしわが姿

望み消え――、
甕の重みに蹌踉ぬ。
愛の美酒洩れ出でゝ、
遠く覗みし凶鳥は、

牧場の暮　芝上島小松



大妻見に見寄れば
美しよしとほめ玉ふ
頬に纒はれる後毛も
いざと計りに叔母上が
衆の目わが身に集りて
聲の主にやさ睨み
今日し美々しく結られて
み手づからなる角かくし
はれがましうもいたときぬ

心よわしと微笑たまふ
何くれとなきみさしづに
現心に楚々として
肌の香ゆるう漲れる
脱捨てられしわが衣に
別れの目をしくはしつゝ
今宵を限り捨つるべき
さて惜まるゝわが處女かな

（評）脱ぎすての衣に一瞥を與へて盛裝の人はまさに門を出んとす、今宵を限る處女のいさゝかなる惑みも聞えたり。

五等　○まどへる魂　　信濃　依田花ぞの守

――凪なき夜なり――
夢の海原波白うおだやかに、
あかきいのちや、漁火のかげ一つ、

遠く、うすく、眼前に、あらはれてかゞやく面、
ふとすれば、ゆらめきて、
浪の上にたゞよへば、
重き「力」の澪曳に、よろ〳〵と、
夢はよろばひさかりゆく。
まどへる魂は悲しみの、眞やみの磯にもとほりて、
つめたく黒きどよもしの、血汐の波の音をきゝぬ。

（評）暗々たる海上に一點赤き物を見たる時人の夢はうれしく、浪白き汀にさすらひの身を現に見出た時、人の涙はこぼれた。惑じの深い詩である。

秀逸

○野茨　岩代　天以子

捕はれの愛の牢獄、
獄窓により今日もまた、
少女の身力及ばず、
息秘めて窺へば、
（建物は高うして、
死の色の壁はげぬ。）

苦悩の獄衣着て
君吾れを呼ぶ辛らき日や。
身をよせし人目の籬
鈍色の雲ひく〳〵

双の袖忍び音秘むる、
かさと鳴る誹謗の落葉。
さゝへたる籬の野茨
呀と叫び立ちすくむ
迫り來るむせび香や、
ほの白の花凝視たり、

身もだえのよろぼひに
笑み悄くやつと頬を掻きぬ
身は闇に捕はれつ。
佇ずみて頬に手をあてゝ
野茨の。——

（評）句より句にうつる間がかけ足でさつさとやつてしまうたようだし、字といへばこれもめん倒臭がつてかいたような字だ、茨て頬つぺたをかき裂かれた着想と相俟つて落ちつきが無い。

○幸若の舞（飯山の葵神社に詣でゝ）　北信　靑木花園守

手拍子かろに樂しげに。
蒙衣長きも反り身がち。
艶やかの姿かな。
折り〳〵かい見面映ゆげ。
法師の後に退きて。

繚ふ袖をひら〳〵と
足ふみうろへ幸若の
上に坐れる貴賓を
けやけき禮も驕りぶり
扇ひらいて恥らひぬ

（評）珍らし、あたらし。

○僧なり　上越　四之宮あき子

僧なり吾は若うして、
そは果敢なさの戀の夢

花にゆらん陽炎の
浮世を捨てし聖の身よ

初夏南院の雲白く、　椿若葉に風宿る
人、弔ひの經誦して、　初蟬鳴くを靈と聞く
芙蓉艶かの紅の露、　星と美き名にたぐへては
蟀育だゝんの此宵を、　われ、新月に木魚うつ
聖なり、戀の夢知らず、　花の涅槃は水清し
夏、紅塵をよそにして、　僧なり、吾は十八の。

（評）「浮世を捨てし」がちつとも利かない、頭の青い身そらで塵だの埃だのと早いぢやないか、緇衣のやからが心に動く詩興はこれだけだとするとあつけない。

○南風の歌　大坂府　辰井ふみ子

戀の血潮と狂ひ咲く牡丹の蔭に熟睡する
孔雀が夢を盜みては南の洋を逐はれけむ
南風羅をはらませて翼廣げて來つる哉
燦爛かなる佛蘭西の巴里女が麗艶の精
尋にもあまる金髮の髮の飾に戯むれて
或は女男波からみあひ白鳥遊ぶよき海を
めぐりて來しか軟らかに。
袂抱いて我れ立てば昨夜まだかたく含みてし
緋櫻あてにほころびて風よこひしき、南の。

（評）南風の歌は題よし、あまりに薄っぺらで南風が南風になつて居ないからいけない。

○母君　岡谷キヤティー

年毎に訪ふ秋風に、　おきまさりゆく鬢の霜
あゝ老いしかな母の君、　我は少女となりにつゝ。
やはき乳房ゆ湧きいづる、　愛の泉は涸れぬれど
優しひとみのみひかりに、　ふれては胸ものどかなる。
我ためみ袖うるほすも、　母よ子ゆゑにゆるしませ
うけし血潮はとこしへに、　胸を流れてつきざらむ。
われにひとりの母君よ、　魔の棲む闇の森にても
つめたき冥府のくにとても、君行きまさば我もゆくべき。

（評）可愛いことを言ふ嬢さんだ。

○乞食の居眠　富山　瀧本秀子

嚴は眩ひ日の酔の、　は月のある夕さがり
懈げの喘ぎ喘ぎの聲　終日弛く欠する
いきれの臭さ。——襤褸なる　乞食の嫗は、しなびつる
乳もあらはに、夕やけの　光を浴びて船腹に凭り
居ねむりぬ。——陶の鉢皿　しかと持て呻吟ひぬ

日黑みの肌汗ばみて　皺みぬ手だゆげにのべて
ふつ〳〵と嘆くを聞きぬ　夢の中に、やがて搖げぬ
鉢皿を中は乾枯び　頰肉の弛仄じろに
をぐらき涅の胎の府に　夢かみて生顯る
肩そびやきぬ誇り顏して　そも束の間に葬られ
今また世によみがへらん　息付くけはひ肉の弛
汗じみ痒ゆき裸身の　涅に波みくら闇に落ちぬ

（評）「ひろ顏や乞食の笊にはひかゝる」人はこの句をいや味があるといふが瀧本さんの詩も月並でないこともない。

○散る花　　山口　吉田良子

花散るしきり、やゝありて、地は七重敷く花むしろ。
わがゆく道は蔽はれぬ。　はた照妙の繪の中に
さあれ欵かず白妙に、　紅の花ちる、あな哀れ
終るを榮えと思へばぞ。
胸の山にも君が烟の、
親てふ文字は消えたれど。——

○觀想　　下谷　むらさき

「靈」の手の染めし「心」や、碧き空むかへて桃の
くれなゐや——碧ゝ額づき、呼息燻ゆる花のくれなゐ。
彼方には、とすれば壊れ、冬の被衣春に脫ぎたれ
ゆたけさを辛夷の騎り、——知るや、いさ、桃のくれなゐ。
「靈」の手は「心」を染めぬ、青潮にひたりて珊瑚
いよよ珠の艶ますがごと、空の淵、こや花の色枝。
絲こそ「命」の一揆、草に萠え、雛にさや〳〵
絲には光ぞ浸すぬ、浮あぶらたゞに燦めく。
「靈」の碧、「心」の花や、永劫の朝のかげは
淀むが如こゝにつゝまれ、花の呼息空に薫りぬ。

○寒國　　神戸　平林たつ子

朝餐の米をとがんとて、水汲みあぐる棕櫚繩に、
すがる冷たき細き手は、電氣作用の如く氷りつゝ、
深き爆靴踏み鳴し、雪除板を打振りつ、
表の方に途つけて。をのこに似たるすさびかな、

○病床　　奈良縣　中富よしみ

懷しき故鄕の母の　ほゝゑめる淸き面影
夢の如ふと現れし　たまゆらのあゝ我が胸よ
打ちふるひ驚く間も　あらばこそふと消え失せぬ。
あゝ漂ひの病める身よ　灯ともし頃を火もつけて
暗み行く室に唯獨り　靜かに辿るうつゝなの旅。

○天界　　上總　大藤凌子

梅の林や櫻の森に、　駒鳥歌ひ蝶の舞ふ、
天女の界こそ遙かなれ、　赤き太陽暮れぬれば、

銀かと光る月輝りて、星や躍ると見ゆるなり、
煙りの登る家もなく、雲の出てくる山もなし。

○若き鰥夫の歌へる　中津町　やま川

鐘ひくう、月は朧の大悲閣
黒影長う地に落ちて、其いたゞきは水にあり。

まごひさし、仰げば悲しき想ひかな
母はいづこと、强ねる子の、
髪は結うてもやりなんが
衣のやぶれはいかにせん。

水しは、男になれぬ片手業
煙にやつるゝ面影を、
のぞくは餘り心なよ。

うらめしや、つがひ鳥のあとやさき
五重の屋根をかすめゆき、をはりの鐘のひくうなる
吁、かゝる夕ぞ入僧となりしも。

○繪卷物　旅にて　泉　たつ子

簞笥七棹長持八棹、ゆるゝ灯美しう
紋はゆかしの下り藤、今宵嬉しき輿入れの
うら恥かしき初戀や、鉢巻しめし若衆が
あな面白の掛聲に、奈良より登る一むれが
うす月夜なる嵯峨野路を、金絲銀絲に裝ひて
長持の搖れざい〳〵と、京は四條へ登りゆく



○奏樂　廣島縣　箕岡荻村

○幽谷の花影　長野　瀧澤さつき女

御神よ許せ一輪を、雲湧く山の土とりて
燒きし花瓶に春愁を、
偲ばん罪のわが願ひ、
白雲すはや迫り來ぬ、
幽谷の蝶花廻る、
いで一輪を賜へかし、
銀泉の露くみとらむ。

○草苅少女　京橋　今泉磯千鳥

春は來たけどわたしにや來ない、
花も咲いたがわたしにや咲かぬ。
あした未明は草籠背負つて、
星が出るまで草刈らさるゝ。
私しや田舍の草苅少女、
山のふもとや小川の堤て、
亂れた髪は見えない樣に、
姐樣冠にして行けば、
村の若衆は『とれ』『とれ』と言ふ。
私しや草苅刈々泣いて、
家に歸つてお父樣に言へば、
『東京へ行たとて何になる、たゞ草苅れと』叱られた。

○雉笛　　上島香花女

たり穗の稲に羽をすりて、小春日和の野がくれそ、
たまさか萩に眠りみる、雄雉の姿優なれや。
けさ朝月のふし床に、そしや雌雉の戀のうた、
風にゆくへを失うて、ひねもす野邊を狂ひしが。
緣さびたる草むらに、罪の子すさぶ雉笛や、
戀に亂れし心には、音もさながらの妻のふし。
おゝと羽ばたく歡樂の、ふと銃の音にまろびては、
朱の肉冠を地にひいて、倘慕ひよる妻に似し聲。

詩の原稿より（二）　　夜雨

例によつて三月分の投稿から、間違つた字と間違つた言葉とを拾うて見る、一々名は指さぬけれど覺えのある方は此次から正しく書いて下さい。カツコの中のが本當のです。

誰おか待てる（誰をか）笑む（ゑむ）戀、戀（こひ）卒へ（をへ）聞へ（聞え）妙（たへ）たがまな（たがへな）纏ひる（まとへる）遠（とほ）よろぼひつゝぞさかり行け（さかり行く）醉（ゑひ）失ふて（失うて）川（かは）廻り（かへり）廻り（かはり）語らゐ（かたらひ）蕋（ずゐ）夕（ゆふ）小草小莚（をぐさをざさ）衣衣（衣）齢（よはひ）呼ばう（呼ばふ）乙女（をとめ）さはぐ（さわぐ）遊ひ（あそび）少女（をとめ）老い（おい）恐ろし（おそろし）音づる（おとづる）聲（こゑ）翁（おきな）笑ひ（わらひ）淡き（あはき）なり立つ（おり）おどり（をどり）一重（ひとへ）結ふても（結うても）水しめは男になれぬ片手業（みつしはであらう、水しめは水仕女、おさん殿なり）賤の乙女（これも乙女と少女とを同じものと心得てやつたらしい、乙女は天女、少女は人の子だ、賤しき天女といふが何處の世界にある、天つ風雲の通路吹きとぢよ乙女の姿しばし留めむを少女とは書きはしない）番い鳥（つがひ鳥）朧給（おぼろゑ）笑める（ゑめる）驚く（おどろく）男（をのこ）堪え（堪へ）末（すゑ）折（をり）頰（ほほ）田を耕く賤（しづ）蝶（てふ）丘（をか）萌へ（え）物怖（ものおぢ）花こそこぼれ（こぼるれ）抱き（いだき）奥（おく）花より花ひ（…花へ）歌われ（歌はれ）大人（おとな）枝、枝（えだ、え）合し（あはし）壞し（こはし）帶（おび）わが願へ（わが願ひ）仇にな折りぞ（禁止格のなそのそは濁つて讀んではいけません）饌（なゐ）下旬（すゑ）可憫（あはれ）衰（すゐ）樂しゆ（たのしう）匂（にほひ）水、蜂、星、安ら（以上四語は言ふまでもなく、すゐ、はち、ほし、やすらの誤りだがこれは岩代の人の原稿にあつたので、土音の轉訛から來たのである、がしかし困つたものだ、勉强すればなほるのだに）。

多く間違つてるのはおと書くべきところにをと當てたのである、おとをとの區別はもと／＼混同するとは出來ぬ、どうでもよいと言ふやうではともに詩を語るに足らぬ人であらう、一例を擧げて言へば

おぢ　祖　父　（おば　祖　母）
をぢ　伯、叔父　（をば　伯、叔母）

どんな無茶な人間でも叔父をとつつかまへて、おぢいさんと呼ぶ者は

あるまいが、口でいふのでなく字で現はす時その本當の發音が出來ぬ—出來ぬのぢやない、知らないとしたらこれ位無學の證據はないだらう。

おぢはおほぢ(大父)の略、おほおぢと言へばおほぢの父(曾祖父)である。をぢは小父の義とある、をほぢとは習はぬし、をほをぢと言ふ雅語も無い。小學校の生徒ぢや有るまいし聞かずともと言ふ人があらうけれど、現在多くの投稿家諸君はおべこべに認めてあるぢやないか。

今回も盜文があつた、就中びつくりしたのは工藤とかいふ大分縣玉來の女が、僕の詩をかいてそつくりそのまま寄越したものである。が一度剽竊作家と認めた人の作は未來永劫沒書にして二度とわが聖なる詩壇に足ぶみするを許さぬ。愛知縣の永田某女の作もこの理由によつて採らぬ。

男のくせに女に離つて假面を被つて投稿する者もやはり多い、氣の毒だからこゝには言はぬけれど、秀才文壇、中學文壇の文藝諸君が紅白粉を塗りくつて出て來るのだからたまらない。厚顏無耻、加ふるに女連に打負かされて甘んじてその脚下にかい突くばふ者もあるに至つては殆男性の面よごしだと思ふ。

偃食叫盤溪烟叢、既々鐘聲山梵宮、志賀澤頭松下雨、月白子規聲一聲。これも新體詩であらうか。食の聲鐘の聲、雨の聲子規の聲、聲もかう四つ揃うては傑作かも知れないが、惜いとに自分は平仄の平も知らぬから撰に入れようなく、止むを得ず沒書。

「光ある眞き玉を、薄絹にすかすごと、霞む空おぼろ〱月の光は鈍うして」かき出しは氣がきいてるけれど、次ぎが味噌屋へ這入て行つて傘のはぎ紙に包んで買ふといふのではずゐ分と不調和である。

山田紫蹊といふ人は初めて作つたといふ「靴直し」をよこしたがこれは大に疑はしい、靴底のへり方によつて其人の性をトふ面白い作だが、あまり長すぎるし、男だか女だか名が書いてないからこれも沒書。おなじく山田白萩女からは「絶望の花」が來た、滿十五歳にならぬとの斷りがあるが、かいなでのうたぶりではない。筆跡は違ふけれども前の紫蹊と同一人と認める。

春雨　常陸　鵜野井紅玉



四番に取つた野村光子の「嫁ぐ今宵」は亂暴とも何ともいひようなき草書なので、一旦捨てたのだがあまり惜いので淸書してやつて壇に上した、右の人差指を腫らして何をするのも苦てならぬ時だつたけれど。

愛兒を先立てゝ、命にかへてめでにしを、母を殘してなど行きし、忘れ心をつとめてもおゝ其かひもあらざれば、心のままに思ひ出て、心のままに泣かんかなと歌ひし木村春江さんの詩をよんでは、これて澤山だとも思つたが、どうも物足らぬ。自分の如く生涯孤獨の生活を送るべく餘儀なくされては、子といふものを考へたともないが、子を失うた母の心は果してこんなものであらうかといぶかられる。女のさいに六つかしい詩を作るよりか、情的方面—主として男子の想像し得ざる心理の秘密—を歌うた詩が見たい。

新論文

編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

三等　○「新年號」を讀む

伊藤曉子

堤の松に吹きすさむ木枯の音をきゝ乍ら女子文壇を開いた、口繪の中では合奏が一番美はしく優雅に見られた。誌友の俤には餘り秀逸の方は見えない。良質は深く藏めて空しきが如しとはこれらの謂ひか。醉茗先生の御姿は見事我が想像とはなれた。

障子の隙間もる寒風が一寸吹き止んで松の枝鳴りも鎭まつた　何處よりか梭の音が靜寂を破つてかすかにひびく。小說「死後までも」は女の嫉妬心をよく現はし「女装」、西洋物だけありて面白くよまれた。而しながら共に無害清淨の作とは云へない。「角」をよみては實にうれしさを禁じ得なかつた。斯樣の淸くして害なき作は妹達にも讀ませたいと思つた。「非牧者」に至つては又一段の佳作で罪のない可憐な滑稽趣味を交へた其中に多大の敎訓を含む良小說、もう實に感服の外はない。「乘合馬車」はまどろつこしい。蓋し寫生文の上乘なるものであろう。

名流婦人の處女時代、讀みゆく中によく各人の性格をあらはして居る。中にも晶子先生蕉園樣楠緒樣はなつかしく思はれた。目が疲れたので一寸目を閉じる。人力車が凍りたる路上をガタコトと音をたてゝ過ぎ行く

美文は皆よく出來て居る、お伽噺も面白くよまれたが「哀れなる蝶」は陳腐てあつた。新派和歌の「誰そや來て」はうれしいが「水晶の」は左程にも思はれない。小說は何れも感心する計り新體詩のウヰリー樣は實に御上手でいらつしやる。「鷄なく夜」は夜雨先生の御詩の風とよく似て居る「洗禮」は讃美歌の中から取つて綴り合せたものでこれでは御自作とは云へますまい。論文「圖書につきて」の後半に作者自身の功名話は如何。「夢の華」の作者は恐らく女子てはありますまい。和歌と新派和歌とは表題がなかつたならば何れが新派か否か分りかねる位でないでせうか。短文俳句は格別の事もない。實用文は一體に文が長すぎる樣に思はれた。新歌謠の「簫笛七竿」は實に感じた。

新年號は總じて面白くよまれた。しかし山田國子樣のお作の見えないのには聊か失望した。夜は更けた。油はもはやつきなんとして居る。

今後とも斯う云ふ文字も歡迎したい、此文の作者は一わたり讀書眼を具へて居る、言ふことに大したあやまりがない（評）

四等 ○感じたまゝ 八千代

教員の資格もない私、只斯道の端に連つて居る丈の身を以て、彼是と申すは如何ですが思ふ事云はざれば腹ふくるゝの基とか、先日の練習會の有樣と所感とを聊か述べて見ませう。開會時刻は九時と云ふのでした、私が會場へ着きましたのが、九時十分前でしたが寂として小使が火鉢を運んでるより外に、人影一つありませんでした、私一人であるに時計は搆はず九時を報じました、暫くして女子の先生が三名男子の先生が二名前後して來られました、其中にガラガラと車の音がして講師先生が、御越になつた樣子でした私は思ひました、女子でさへ九時の出席に左程忙しいとも思はぬに、髮を結ぶ世話もない人達が何故から暇が入るのかと、又思ひました毎日學校への出勤を、どうして入らつしやるかと實際何度欠伸を呑込んだか知れません。他の女先生はあみ物をして居られます、私は練習會は學力補習の爲だと心得て、退屈紛らしの物は持ちませんでしたので、注意周到とはこんなのかと感心じました。漸く一鈴が鳴り會場に入りました時出席者は全會員の半數、時計は十時と十五分です講義が始まつて後出席する人もありました、講義を筆記して居る人が數へる程、大抵中譯のノートと鉛筆が机の上で欠伸して居るのです、甚しきは前の人を寫生してる惡戯者もありました、殊に先生が—時間は來た樣ですが今一切—と云はれた時—まだか—と云ふ聲が、聞えたのには呆れました、食後の休みに—教員位馬鹿もないよ十圓か十五圓で、與那子の守をして日曜は練習會—と、或一人が云はれたのは寒心の至でした。郡視學は出席に就ては隨分厳しく云はれますが、只頭數丈揃つて出席簿の印さへ増せば宜しいでせうか、私は思ひました是では此地方の教育の振はぬのも、尤もだと、そして私は申します教員たる人は、も少し人格の修養を遊ばせと。

きちくと言ふ事が順序立つて行く處は如何にも教育家らしいが、時々眞面目に反語や皮肉を言ふから文に光彩が加はつて好い、新論文たる資格がある。（評）

五等 ○田園生活 和歌山 木下操子

朝には野に行つて働き疲るれば憩ひ、夕には一家團欒食膳に向ひ夫は五勺の酒に大平樂を奏し、小供は燒芋を食つて嬉々として笑ふて居る、花は作らずとも前の芝生に咲いて居る、だから春はきたとて別段花見に行かなくとも宜い、蛙はうるさいほど彼處此處で鳴いて居る、夏は別して田舍は宜い涼しい風は果しのない青田から絶へず吹いてくるから都のやうに暑苦しくはな

い、其の上蚊などは居ないから蚊やなどつるめんどうはいらない、又泥棒はないから暑ければ戶など閉める必要もない、魚は食たければ裏の小川にさで網をつけて置けば田の一畦も打つ間に五匹や七八匹は取れる、吳服屋は月に二回染屋一回八百屋は月に二回豆腐を持つてくるから一年や二年は町に行かなくとも何に一つ不自由はない、そして秋は來たら米が取れるそれを土藏に一ぱい入れて一年中の食料にする、お正月が來たら澤山餅を搗いてそれを薄く切つて小供のちんにするそれが無くなる頃にはもう葡萄が稔れる、桃が熟る、梨子はなる、やがて柿はなると云ふ風に果物は絶へずあるから、小供のちんなどには少しも金を出さなくともよい、おまけに空氣がよい、水がよい、ときて居るから醫者はなくとも病氣などするものはない、だから金も名譽もいらない從つて心配も煩悶もない、只恐しきは屋根のもるばかり‥　こんな樂しい暮しは又とあるまい、それに都のお嬢さんなどは五十年か六十年生けるて十五年も二十年も苦しんでそれで成功したつて何になる萬更腹に二杯も食れまい、それよりか早く思ひ切つて田園生活をしてごらんなさい、ほんとに世界の樂園てすよ。

田園生活の爲に大氣燄を揚げるもの、論文として趣味もある、むつかしい事は言はないても此れて理窟は分つてゐる、（評）

秀逸

○男女の交際に就て

岐阜市　篠田とみ子

斯く申しますれば中々意味廣くなりますから、とても論じ盡くされませんて、此處には文通の事に就て少し申上げます。所謂文壇紙上て交際などを求めますのに男女を問はない方は別と致しまして、女子同士交際を求めまして、百里やら千里やら方角さへも知らぬ處から、言葉やさしう筆なよらかに私もどうぞ以後宜敷くなどが始めになりまして、度々文通する、始めは女の方だと信じて戯言の二つ三つも書く、其の中に實は私は男子て何々學校に居るとか、亦は卒業したとか、だが何卒見捨てないて交際をしてくれなんと仰有る方が往々ある、否だいぶんある、遂には男的な文句を並べ立てゝ圖々しくなる、女子の方に取つてもてある、女子同士の交際より男女となると荒き處にやさしき處にいひ知れぬ妙があつて、面白く、遂には何れからとも無く肴屋の店のやうに鮎だの鯉だの鯛に目があるの鯰がすべつたのと深入りをして取り返しのつかぬ事が出來る。其んな方には矢張り主人があるとか何とか云ふてやればさつぱり便りをよこさないからよく心底がわかる。何だ馬鹿々々しい男子が女に化し、女から男子へ化の

皮をはぐやうな樣のわるいこんな方に限つて鐵面皮にも私は朝夕どれ丈思ふかも知れぬ、さるに何の風情も今にお送り下さらぬとは人情にはずれはせぬかなどと、途方も無い毒刃を刺す方がある、恐るべきは人の心、誰れも强て惡しき方へ感染しようとする人とては無けれども、知らず識らず引き入れらると云ふ物であれば、恐るべきは恐れて馬が居つたら廻り道をするがよいと私は思ひます

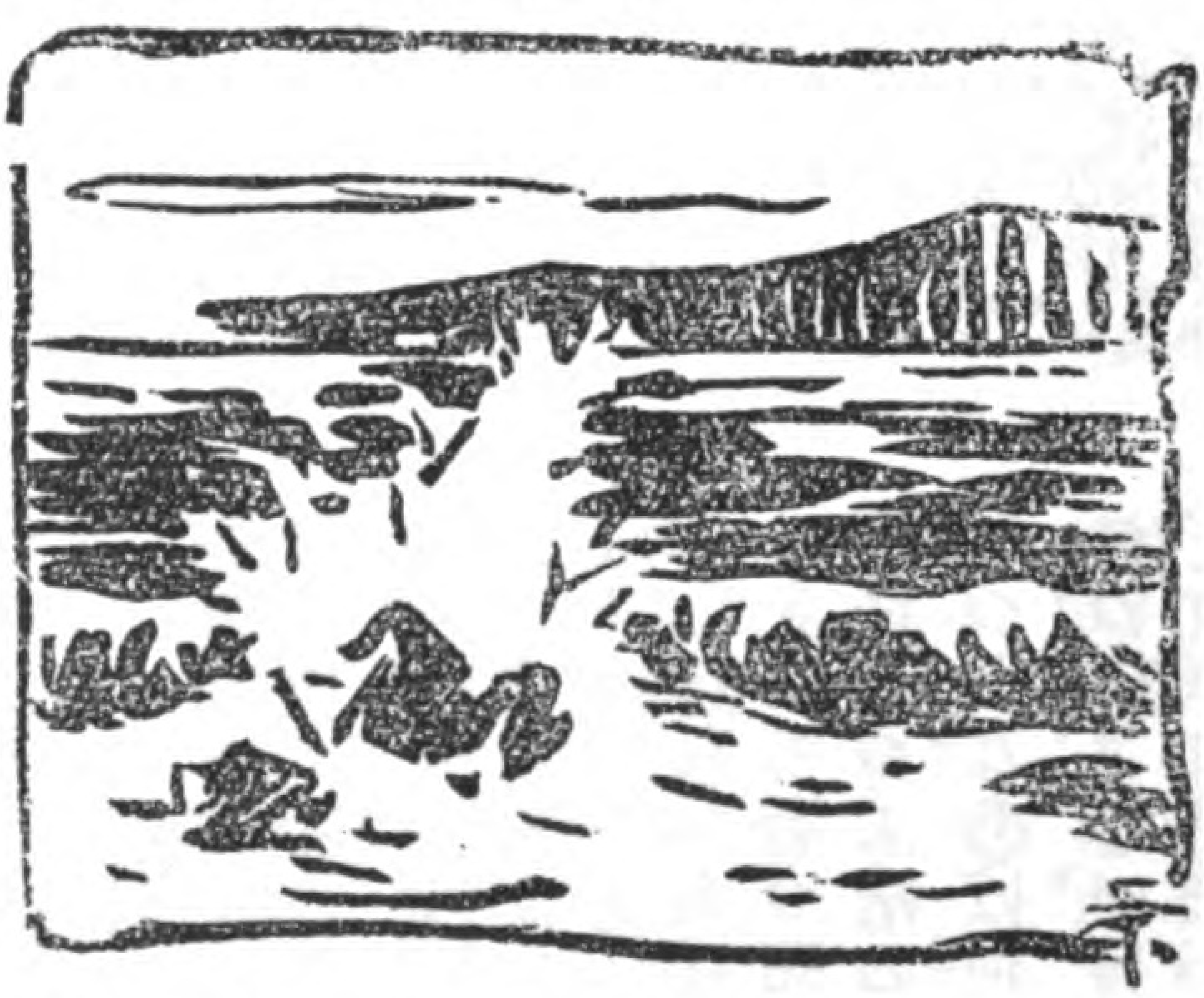
君子は危うきに近よらず、論旨贊成。(評)

○剽窃文について

四谷 網野田都子

論文などと申しましても、とても立派な事は申上げられませんが、一寸私の思ましたまゝを申し上げます、文章ばかりではなく和歌でも俳句でも人に作つて貰たり人のを取つたり致しまして一等なり二等なりになつて名譽だと思つて居りましても其は束の間で惡い事は速に知れるものでございます。よし其が人には知れないで居りましても自分の良心が許さないだらうと思ひます、何時でも良心はございますから始終心にとがめられて居りまして面白い事をしても樂しく無いだらうと存じます。

怒濤 常陸 酒葉貞子



其程心配してまで名譽を保つより寧ろ拙くとも自分で作つた物を出した方が、何程愉快でございませう。一體剽窃などなさる方は何う云ふお心か存じませんが、文章や和歌を投書致しますのは其の文章なり和歌なりを上達させる爲に出すのでございまして、決して名譽を得る爲なのではございません。此樣な事は私が申し上げないでも御存じでございませうけれど。左樣でございますから一等や二等にならうと思つて投書致しますより、自分が上手にならうと思つて居らなければならないのでございます。そう致しますのには、自分の思つたまゝを書いたらばよいだらうと存じます。そう致しまして居ります中には自然と上達して遂には一等にても二等にてもなる事が出來るのでございます。其の時には何の位樂しい事でございませう。そうして此の誌上を淸くして益々榮えて行く樣に希望致すのでございます。

本月の論文の中。此外に剽窃文に就いての論が二篇あつた、合せて三篇の中、此篇が一番要領を得て居る、上毛の君のは餘り力瘤を入れすぎてこた〳〵してゐる、石見の君のは書き方がふるい、此篇もつと鋭く言へば好いとも思はれるが、洒々落々たる中に一種の敎訓は動かされない。(評)

○今の新體詩　上野　木内あや

へたな畫工は繪具ばかりつけたがると譬へにも謂ふ、今の新體詩は遠通寺で廻り遠く堅くるしくて我々には分りにくいものであります、私共は詩の修辭よりも内容に重きをおいて頂きたい。修辭を主とするのは新體詩の特色てはありますが餘り氣取りすぎて私共には閉口です。修辭とは意味の分らぬように氣取つて書くという事てはありますまい。そうした詩てはたゞ讀者がもてあますばかりか更に餘韻の餘情のと申す隙がないてしよう、眞の修辭というのは一聲のほとゝぎすてす、一聲さやかに萬人の耳に還入るがその感じは千種萬様てす、則ち少く書いて多く思はせるが目的然るに今の大家と申さず小家と言はず作詩の氣取り加減さ。讀者を五里霧中に卷きこむで窃かに自ら冷笑する概がある。甚だしいのは雜誌など數頁を費して書いた文句が何の意味かわからないてしまうたり。或は何の造作もないとを山師の玄關を大業にひねくりまはして勿體ぶるものがある。ある詩人は天下第一の詩人の由、私は其の作詩を集めた書を求めて日課同様に讀むだがなか〳〵解せぬ、自分ばかりわからないと思ひまして友達に聞いたら正直の所私共も分り惡いとの返事。これてはたとへ劣等とても七五調位の方がまさるてしよう。

論旨の當否は別として、新體詩に對する諸孃の意見も大いに聞きたいと思つてゐたが、先づ此篇が現れた、大膽に言つてあるし、恐らく正直な告白てあらうと思ふ、これ又一面の理。（評）

○自然の音樂　鹿兒島　池田てい

音樂にも種々ありますが、オルガンとか琴などは大そう優美てやさしく誰とて知らぬ者はありません又ピアノ、ヴア井オリンと言つても何れが好いと言ひ切る事が、私なんかにはとても出來ませんけれど私はそれ等よりももつと〳〵好いと思ふものがありますそれは今かりに私が人跡絶えた深山に近く淸き谷川が流れ遠くに大なる瀧つ瀬の響かすかに聞えてゐる、マアそんな中に立つて居るとして兩眼を閉じじつと耳をすまして居つたならば何うでせう必らず〳〵何とも言ふにいはれぬ優さしい自然の音樂を耳に致しませうアゝこれほど立派な音樂がありませうか、どんな立派なピアノても此の淸い音にはとても〳〵及びますまい、アゝ其の吹く風鳴く鳥の音何に例へませう、私は自然の音樂ほどすぐれた音樂はないと思ひます。

和歌

佐々木信綱先生選



▲規定　殊更に舊派と言はず、従來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

二等

楠かをる森かげぬけて君と來し
葡萄の畑のひるの靄かな
渡邊けん子

三等

しめやかに少雨する日は故郷に
目病みておはす母の戀しさ
丹後國宮津町京街道萬角　楠田露子

四等

磯づたひ花藻あさるとあま少女
うたふ小唄に春の潮わく
横濱市足曳町一ノ五畑野方　鈴木菫子

五等

大鵬の翼をはりてあまかける
さまにも似たる春の雲かな
越後頸城郡根知村　山本やす子

秀逸

白き藻の香りたゞよふ山の沼にうすきもやして日はくれにけり　大阪府　辰井ふみ子

○森の鳥みなかゞやかの眼はり讃歌うたひぬ日の登る時　大津　今村越智子

○我が心きみが心に抱かれて玉としならむよき日を思ふ　岩代　雪子

○世を忍ぶ編笠はねてかへりみる二十日の月に雁啼き渡る　下野　芳子女

○三日月の影山の端にほのめきて羊飼ふ野に笛の音する　大阪　辻廣子

○絵日傘の少女一群見えずなりて蝴蝶舞ふなり菜の花のみち　千葉縣　ちすゐ子

○亡き母が形見の小袖色褪せて思ひ出多き春の夕暮　静月女

○夕雲はとぎれ〳〵に君います紅き花咲く野邊に消え行く　信濃　犀波子

○君待てば夕の森をさびしらに響してくる夕ぐれの風　熊本　前田悦子

○　無名子

夕ぐれを柳の下に家鴨むれて池の藻の花雨にみだるゝ　下総　鮎川つれ子

○閑靜の麥畑人家ところ〳〵春日のどかに鶏の聲　上総　大阪澄子

○五六人女はらから住む家の紅梅咲きぬ春の日和に　沼津　長井とら

○春風に梢もかをるなりいつかは得たん鶯のこゑ　淺草　園枝

○寒月は雪の世界を照すなり今武藏野はしろがねの原　大阪　生田みのり

○花吹雪み寺の庭の靜けさに夕をつぐる僧は眠りぬ　若狹　津田加代子

○牛の背に笛吹く童遠く去り歌に消へ行く秋の山里　下野　栗田きん子

○海棠の雨になやめるその樣は天の女神のもの思ふらし　大阪　大磯年子

○霜の朝孫ゆげそぼ立つ井戸の端に米とぐ女背なの兒はなく　羽前　松山秋海棠

○文箱持つ御歌使の衣笠の初雪とけてしづくするかな　淺草　とみ子

○美しき舞子二人に行き逢ひし四條わたりの宵月夜哉　三重縣　川原操子

○梅の花さきたるかげは見ゆれどもあくれば寒し窓の朝かぜ　飛騨　船坂道子

○おくつきの一本松に風さえて月影すごくふくろふの啼く　紀伊　河よれ子

○あさましや花を選びて宿る蝶醉ひの眠りや如何てながかる　滋賀縣　嬉貞子

○鶯が初音をもらす春日和梅の樹もとり〳〵にきく　青森縣　松尾俊子

○熊原の川にゆらゆらかげうつるそよふく風にとぶほたる哉　長崎　みどり子

○ほの白う梅はみだれてよき香するやみの庭にもなけやうぐひす　八王子　芳村秋水子

○佐保姫の天津御衣かざりなむ野にこぼれ咲く菫の花よ　田中登木子

○初春や花の師のがり訪へば先づ鶯の鳴きて迎ふる　新潟　佐野富美子

○東雲のほの〳〵赤ふなり行きて早や立ち初むる冬の川霧　佐渡　中島さゝなみ

○山里に雪降りつみて枯れし木に花咲きてけり今朝の大空　千葉縣　智惠子

○うす月の寒きこの夜や故郷の母御は如何おはしますらむ　山梨縣　田中ふえ子

○狐なく三里の枯野霜冴えて隅なく照らす冬の夜の月　橫須賀　齋藤松代子

○山沿の畝に蛙啼き初めて里饒なる梭の音かな　相模　柏原美壽子

○笑む度にほのかに匂ふ君が頰のほくろに似たり春の夜の月　遠江　安原幸枝子

○春日山昇るはつ日のかげしめて千萬歌ふ友垣の花　三重縣　北村みつ子

○舞の手のやさしと人のうはさしぬさくらうす日の春の街かな　周防　栗喜子

○つれ〳〵に昔を語るよき友の有明月のかたぶきぬかな　愛媛縣　菅しげ

○忍はじと思へばなほも忍はれて一人寢ざめの床ぞ淋しき　橫濱　山口一葉

○山寺の入相告ぐる鐘の音の春も暮れんと山鳥のなく　諏訪　加藤芳枝

○かみ垣に繁りいとこき老松は千世にさかへて色もかはらじ

○耕せし人は歸りて畦の上に捨て置く鍬に春雨の降る　　加賀　小島きよ子

○みしや夢ありしやうつゝ友情なも崩れて後にわびまさるかな　　藤澤　深田ひで子

○松風の音も淋しき後山に夜なく狐の聲のさむけさ　　那賀郡　和田君子

○よし人は行かずとも我はたづねなむ咲かばつたへよ鶯の音に　　佐賀縣　伊藤貞子

○あたらしきやかたにいよゝ晴れ渡る秋の今宵の月の光りは　　常陸　鵜野弁とみ

○なつかしき君おとづれし夢さますそゞろうらめし夜烏の聲　　周防　相本たれ

○大御手に植へさせましゝ松の樹の千代の影さす末ぞはるけき　　石見　醇子

○冬枯れし木の間の月を見る折りに山寺鐘の音のさむしさ　　上總　滋巫子

○川霧や寒月ひくう冴え渡り千曲川瀬をあけの筏ゆく　　長野縣　内山けさよ

○黄衣を吹く木枯にぬぎやりて寒うも立てる庭の公孫樹　　下總　平山喜美子

○山かげや濕り路行けば足なづみ霜草の香の胸わろき迄　　若狹　津田沙汀

○朝日さす日向にならぶ松林山鳩鳴きて風しづかなり　　茨城縣　永井愛花子



夜景　　埼玉縣　渡邊忍子

○ふるさとにかよふゆめぢのせはしくも故の山のかげにあるらむ　　上總　香花女

○七つほど白鷺ならぶ岡の家紅梅さきぬ三月の朝　　豐後　菅原芳子

○月はいふ汝等辛の子らよ疾く天なる國に來て幸得よと　　陸前　大場ちよせ

○もみぢ散る秋を悲しとて別れすが恨みはつぎて春雨ぞ降る　　羽後　伊藤さき江

○朝づく日まづさしそむる神垣の松のみどりのあざやけきかな　　神戸　正春はつ

○大君の惠みの露の深ければよもの民草豐なりけり　　大隅　富來美婦子

○燃ゆる血に似ぬる紅葉を谷水にことづてゝ見ん忘れ得ぬ人　　德島縣　野盤子

○やさし君が生けし白梅銀燭のゆらぎにかなる春雨の宵　　茨城　中西うた子

○千代までもさかへゆくらん神垣の松はみどりのいろまさりつゝ　　京都　増田せい子

○降るとしも知らぬものから春雨の夕はいとゞしめやかにして　　紀伊　西島尾上子

○うらうらとさし出る朝日まばゆくてさてものどかに波の音する　　沼津　靜山廬

○夕月は仄かに出てぬ藏王寺のみ室さびしく櫻散るなり　　京都　みどり子

○　　丹波　靈谷ひさ

いまさずと思へばいとゞ戀しさのまさりて出す君がうつしゑ
○ 京都府 有野坂枝
待ちむかう君が心は梅の花結て實のる時は此春
○ 南 豐齋の家瑠璃子
枯野原一人すぎ行く巡禮の小笠にせまる入相の鐘
○ 下野 河田綾枝子
明烏塒を出づる澄む空に山端に殘る十六夜の月
○ 本所 三森ゆき
古びたる小琴抱きて泣きしづむ少女あるらしひき初めの朝
○ 鹿兒島 貴島よし子
あけの雲の裾長う引きし上臈が惱ますさまに連理草咲きぬ
○ 筑前 田中登代
ゆきずりや御君なれば此野菊かざしもあへていぢり散らしつ
○ 上總 四之宮あき子
旅の路けふ日もすがら風やまずさいはひおはせふるさとの母
○ 德島縣 若槻淑子
我知らず山の細道分け入りぬあまりに清き空のしければ
○ 宇都宮 小山とよ子
花もちり霞うするゝ山畑に目にたつものはすゞ菜なりけり
○ 千葉縣 葛岡花子
灑樓の夢のなごりかしと〳〵と雛子が庭に春雨ぞふる
○ 下毛 杉山濱子
野の霞靜かに晴れてゆら〳〵と旭さすなり初春の明け
○ 備前 黒住昌子
君とのる相慕の舟に風のまゝまかせて見たき我が思かな
○ 青森縣 山田てる子
賤の女が衣すゝぎにこぼれてか秋の流れに小櫛沈める
○ 下總 えい子
紅き玉むらさきの玉うす絹につゝめるさまに春は來にけり
○ 京都 園部識子
雨降りて月影暗き夕暮れに波の音高しアマゾンの森
○ 大阪市 大村花子
紅梅を日傘にかへつ駒にして鶯姫の春の曲さく
○ 佐賀縣 島津留子
我が友は鮎の港にゆめむすぶかたわれの月の影やまつらん
○ 鳥取 上山千重子
寒經や今道心が鈴の音にそゞろ暮れ行く冬ざれの町
○ 伊賀 秋山伊册緒子
秋の旅道はぎ出てぬ御ひじり訓したまひて御弟子となしぬ
○ 佐賀 田中よを
うら山のよめ菜摘みつゝ春の日は七日過しぬ下山の里
○ 奈良縣 中時枝子
笑ませる姉の御膝に抱かれて愁に沈む秋の夕ばえ
○ 牛込 はな子
逆みては灯巡る心地して現も夢とあこがれにけり
○ 香川縣 須田もと
艶やかに銀屛榮ゆる京雛に花灯ゆらぐ緋鞠地の暮
○ 大和 栗山英子
ふるさとのあたゝかき夢ふとさめてうつら淋しき殘燈の影
○ 但馬 高橋伊勢子
おちこちは鐘ぞ稀れる一とつ家に油灯す淋しらの夜や
○ 千葉縣 春子
幾年も共に流れん一筋にかなたこなたに袖分つとも
○ 常陸 松本笑泉子
一時も思ひ出ださぬ日とぞなき戀しき君は如何あるらん
○ 靜岡縣 小谷長良子
冬の夜や按摩のふきし笛の音は寒き月にぞ冴へ渡るなり
○ 泉南郡 金田紫雲
庭先に笑める櫻に風吹きて村雲月を曇らせにけり
○ 大阪 鎌田春枝
大晦日の市にならべた梅の花あすはいづくの春にあふらん
○ 弘前 佐野てる子

いやはての空笑み見せてかなしくも去にし子おもふ日の落つる時
伊勢　山路くに子
○
秋守らす姫が御裳のうるほひか色とりどりの八千草の露
福井縣　片山千里
○
羅衣を着けし少女の姿して春の山々霞初めけり
高岡市　葉山靜枝
○
[illegible]櫻こぼるゝひまに消えうせぬあはれ老いたる母の命よ
長崎　平田すみれ
○
峠阪下る馬子唄きえ行きて馬いなゝきぬ車きしりぬ
丹後　かぢ子
○
笑まひしと聞きて一しほなつかしき母に會ひてし宵の夢の香
泉　たつ子
○
大銀杏酒うるらしき掛小屋のやぶれし旗を鼓に照すかな
土佐　佐野常代子
○
さきがけの花の中にもさきがけてはるをもまたて匂ふはつ花
相模　鍋田笑代子
○
たそがれや富士のすそ野にあかあかと草やく火をば恐ろしと見ぬ
鹿兒島　山下豊子
○
そよ風に牧の大野は三千の駒嘶きぬ春のあけがた
周防　山本みち子
○
童の引き行く駒の鈴音にぞ長閑けき里の春は來にけり
群馬縣　大隈さだ子
○
ましろなる戀ひも知らぬ我が胸に赤き色もて戀染め出しぬ
相模　北島たつ子
○
靜かなる御代の恩なり我が里にまたも梅さく頃となりけり
八王寺　富本とみ子
○
迎へ出て君に別れし日を思ひ里の外れ路夕風さむき
岩代　露子
○
笑はしう繪物語を友ときゝぬ小笹に霰の音かろき夜や
相模　靜子
○
鶯は初音もらしぬ我庭の梅の小枝に花さきし朝
○
若狹　野薔
妹と濱邊に出てゝ貝拾ひ共に遊びし事もありしに
○
沼津　飛奈久枝
うらうらとかすみたなびくたえ間よりこゑほがらかに雉ぞなく
○
埼玉縣　中村靜子
しらべをへて小窓によりし額しろの人うつくしき梅月夜かな
○
八王寺　三谷歌蘭子
夕ぐれを薄霧つゝむ海原に白き羽の鳥沖へと飛びぬ
○
岩代　角田溪舟
諸共に見し面影の思ひ出て月に向ひて一人かたろふ
○
中津町　やま川
思ふ人瑠璃蛇の目して灯ともして訪い來と想ふ雪積る宵
○
若狹　早水その
行く秋や秋姫早も野に去にしあとうつくしう淋しらの夜よ
○
越後　山本白萩
牛あまた車を引きて街に行く野路はるかに山櫻花
○
土佐　曾我林子
白妙に咲きにし松の下陰に休ふ袂に花ふゞきかな
○
伊豫　あかつき
金龍の花もけぶりて春雨のそゝぐ宵毎君なつかしき
○
下野　梅月
たゞさへも心沈むる秋月にひときはせまる細き笛の音
○
大分縣　桃のやしづ女
屋まみにみどりの眉に聞えそむ妹髪と怨みながき春
○
越後　金子たま
小雨ふる小窓によりて何となく歌思ひ居れば山茶花の散る
○
津市　越村文枝
とぶ蝶を一ひら散ると思ひけり咲きつくしたる花のそのふに
○
長崎　北尾春子
遠見には燈かとまがう端島がた住めば都の心地こそすれ
○
神戸　久野のゑ女

冬の日に小窓ひらけば雪きへて白山茶花の一ひら散りぬ

○　丹後　三竹女

有明の夢はさめけり病癒えし君と終夜物語りせし

○　豐前　角綱露枝

草つみて踊る少女の影うすれ桃さく村に春の風ふく

○　宮崎町　卯の花子

くらべなき豐穰の國の御社に御稜威も高き瑞かきの松

○　熊本縣　宮野かず夫

村長の座敷の障子開かれて白膠木紅葉は庭に散りけり

○　福島縣　菅野なつ子

聞きなれし園の木枯し何時の間に海が香送る風となりけん

○　土佐　翠葉女

花守りをいだいて園を惜ひけり偲ぶは同じ花守の主

○　茨城縣　鈴村勝子

村々に夕餉の煙り棚引て幽に鳴るや夕暮の鐘

○　布哇　上土井定子

天地に屋てふ花の咲くかぎり忘れはすまじ君が眞心

○　土佐　芳子

海へ十里町へは八里の山奥に世の彩色知らず暮れは住む身よ

○　茨城縣　谷貝梅子

春の月もの靜かなる此宵を花の下ゆく人おぼろなり

○　周防　松田いと子

眠られず物思ふては寄く窓の障子をたゝく雨の足音

○　岩手　佐藤志野子

恩深き父母に別れてみなし子の獨り淋しき秋の夕暮

○　和泉　さよ子

里人のめでたき歌の聲きけばかはらぬ榮すうる礎

○　茨城縣　谷見ゆう子

賤の女が歌ふ聲々にぎはひておさまるみ代ぞ小田に知らるゝ

○　越後　和歌波女

龍宮の姫が爽かや絵巻織る如く潮さす茅渟の浦邊に

○　東京　靈史

萬代も動かぬ御代の神旗にはへ行く松の色ぞ變らぬ

○　下總　梅澤賀子

朧月かへる雁がね梅が香や思出多き春の宵かな

○　秋田縣　小松とく子

ほの〳〵とあけゆく空の彼方にも里やあるらん鷄の聲

○　備中　篠原繁子

安らけく眠る小猫の耳先に胡蝶止りぬ春の日の影

○　周防　縫子

千鳥なく濱のをちこちさまよひぬ磯草ゆする風の夕べを

○　下野　てつ子

冬の日の夕榮えうすれちぎれ雲とぶ那須原に狐なくなり

○　神戸　紫峰

粹の裔くろ髮ながきおん君の水仙めづる歌姿の朝

○　千葉縣　みき子

面白き島のなくれをきゝながら君とさまよふ野の小春みち

○　臺北　映富子

千歳ふる社の松にふく風も年立つ今朝はしづかなりけり

○　近江　道子女

天の幸地にさきはひに徳ゆるなべつとめ吾背子いやます〳〵に

○　上毛　藤波ゆき子

夕ぐれや三丈高き山門のとびらめがけて霧流れゆく

○　京都市　上原芳子

山蹊が斯ばにつもる白雪と見えしは梅と香に匂ふなり

○　千葉縣　淵まさ子

まどかなる春の朝に出て立ちぬ君が家さして日の登るとき

○　伊豆　小澤義子

弓張の月は都に住みやらて沖つ島根にはつるはかなさ

○　明石　落葉子

松影の月美しき磯の家今宵うたひの聲高うして

○　丹後　鐙見千代子

霧の山の麓に二三戸の村七つありいま日登りぬ
○　長野　津金春枝子

ふく風の音は長閑に春めきぬ四方の山邊の雪は消えれど
○　本郷　岩永さだ子

木枯に落ちたるきりの一葉にも先づしのばるゝふるさとの友
○　青森縣　久保いし子

千とせ經し横斜の梅に花咲きて影寫しぬ夕暮の川
○　神奈川　芙蓉子

去ぬる月別れし人や今何處やみにし我を後に殘して
○　仙臺　佐藤政子

川添の家五つ六つたそがれて夕月淡く桃の花ちる
○　駿河　大木みよ

のどかなる野山に出てゝさまよへば春のしらせか鶯の聲
○　名古屋　渡邊賢子

夢まもる神のおん座と白き花かつ散る宵の遊月の苑
○　長野縣　下里翠波

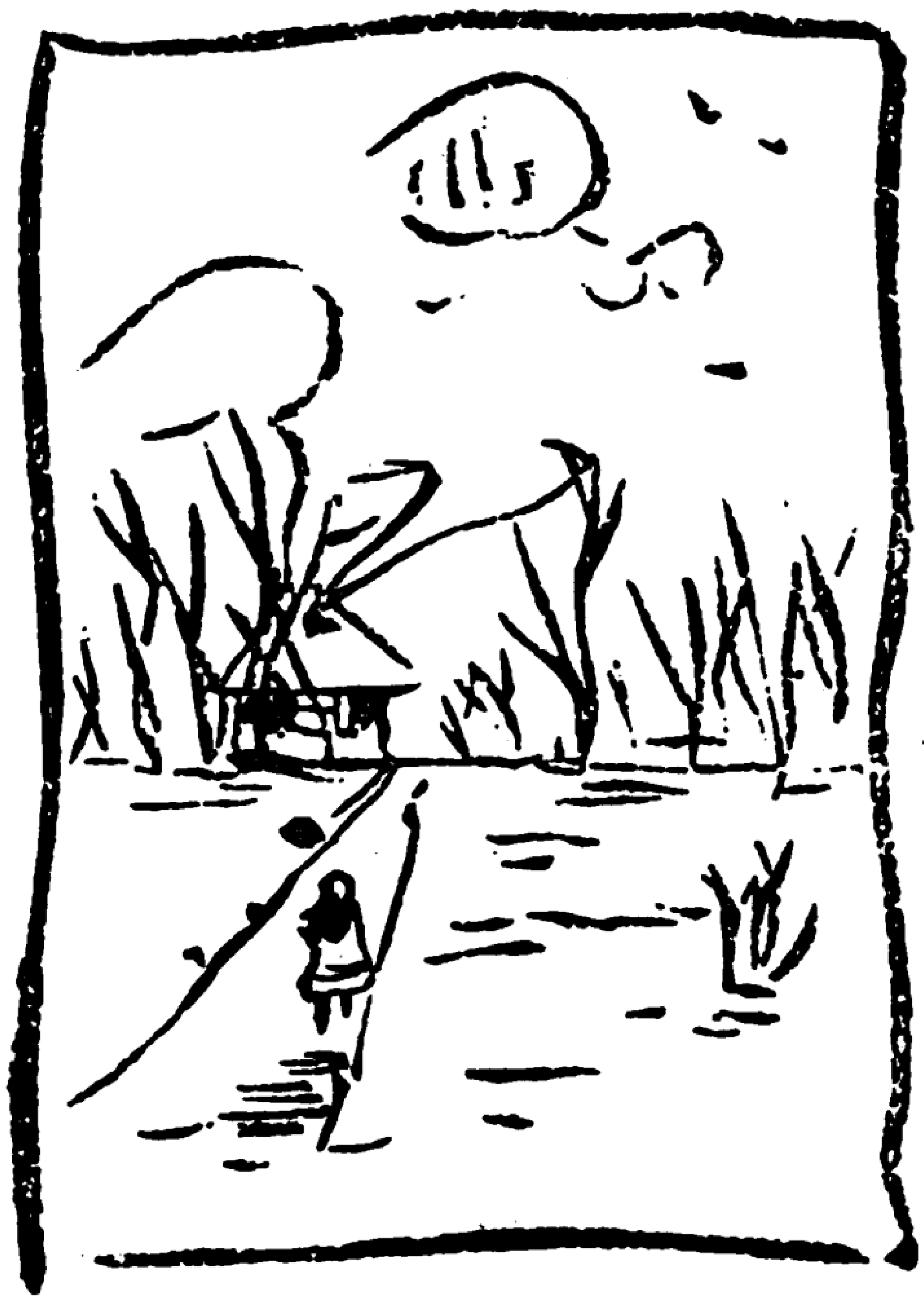
ふる里は日ぐるま咲きし板府母にすがりて人を迎へぬ
○　周防　谷　藻諾子

冬日影世に長らへぬさびしみのかなしき人の葬送に似て
○　遠江　原木すみれ

目さめては君を思ふて涙しぬかよわきからだいかにあるらん
○　肥前國　川小萩

おきよとてさはぐ小鳥に夢やれて餌つみあとふ春のあけぼの
○　靜岡　良水女

梅咲きて山吹咲きて櫻咲きて火鉢かわゆき春雨のころ
○　東京　安子



かへり路　儒枝　田邊孝也

くさまくら廬なくこゝにゆめさめてあさまだき見るやまの端のつき
○　千葉縣　藤田靜子

大かたの人白雪にうもれても匂はてやまじ梅の初花
○　羽前　笑花賤女

涼風やそと叔母君の後ろより吾が黒髪を撫づるかと思ふ
○　愛知縣　樵雨

ほとゝぎすいずくとなしにきえて行く有明月を松にのこして
○　白露

梅つゞき小道五丁の黄なる家ひくゝ鷄しぬ彌生あけがた
○　天鹽　菅井女

千代八千代變らぬ御世を祝ふなり旭の御旗高くかゝげて
○　山口縣　淺田克子

念珠手に梅咲く庵の尼若しかたらば聞かん過去の事ども
○　千葉縣　關　芳枝子

くぼみたる眼つむりて藥召す兄が片頬にともし火あをき
○　岡山　池田芳子

天の座に放鳥すらし春風は小鳥らあまた追ふて來しかな
○　長崎縣　かつら

年たちて祝ふのきばの旗の手に靜かに渡る御代の初風
○　埼玉縣　岩田文惠子

茜さす初空さして鶴の二羽高く舞ひ飛ぶ羽子美しき
○　上總　鈴木かれ子

買ひまとふ京のひな市いつしかに日はたそがれて春の雨ふる
○　遠江　增田仙子

春の旅は夢にも似たり君と吾が胸の新潮たかなる思ひ
○　熊本縣　前田菊枝

○み手とりておのゝく胸のかずかずの言葉さびしき夕ぐれの道　牛込　河村順子

○風はいと荒らかに弓の弦鳴らすがやうに海添を吹く　下総　山本きかど

○わたつみや新汐いともしずかにて年のはつ日は今さしのぼる　茨城縣　中山道江

○泣けばとて悲しめばとて如何せむ逝にし姉の歸りまさぬを　下谷　燕雨子

○小犬ふす門邊の日影長閑にて梅咲く頃となりにける哉　愛知縣　永田録鶴子

○遠近の野山も白きあの山の麓の家に夕烟立つ　越後　瀧澤とし子

○風吹く草の葉山に分れたる戀しき友は今は彼の世に　熊本縣　前田ひろき

○君待てば待てばさびしく木枯のしらべして來ぬ夕ぐれの森　長門　中津江照子

○今年より行末かけて相生の松の若葉に八千世こもらむ　佐野くに子

○くまもなき御代のめぐみに神垣の千とせの松に初日かゞやく　長野縣　瀧澤さつき女

○はれやかに軒の小鳥の啼く朝や遠なる人は笑みてゐるなれ　上毛　青木もり子

○天つ兒の小さき神を召しまさむ兒の摘きたる白百合のへに　相樂郡　有野良子

○里川の清き流れに枯葉舟秋を送りて冬を迎へぬ　長崎　島名ふじ

○こよひこそ心のやみもはれぬらめ垣根の萩をめてあかしつゝ　上総　鈴木梅子

○敷島の道の若草ふみわけて言葉の花の香を尋ればや　宮城縣　芳子女

○去年の春いひ知らぬ思を胸に秘め友と別れし夜ににたる哉

○初東風は駒馬の聚樹を野に追ひて吹きこそわたれむらさきの袖　神戸市　なみ子

○年立ちて聞けばなつかし谷川のせゝらぐ水もうぐひすの聲　岡山縣　廣江蔀子

○たゞ一人戀しき君を松並木に冬風さむき野はづれの村　志太郡　清水さち子

○わが胸のつらき思ひをうちあけしその日のごときよき日あらずや　千葉縣　今井しげ子

○燦爛と初日の光麗しく二見ヶ浦に舟や出ださん　大阪市　靜子女

○大なだれ北の國なる高山を逆おとすことよする白波　磐城　武者せつ女

○秋逝きてへだての木の葉散り果てぬ今宵は逢はむ月とせゝらぎ　奈良縣　中富よしみ

○朝日さす野澤の水の烟よりかすみとなりて春は立ちけり　遠江　杉山富佐子

○母に逢はて空しく歸る故郷の道に戀しく雲雀なくなり　山形縣　白はな子

○根なし雲心まどへる戀人のさまに浮びぬ大海のはて　安藝　綿因良榮

○山茶花のほろほろと散る小さき家に梭の音して寂靜かなり　京都　宮原みどり

○波よけの堤のかげに板家見えてにひばりいそ田山羊の聲する　大和　花薫瀧

○病む友を窓にたすけて朧夜を越路にかへるかりを見るかな　大阪　辻廣子

○御社の翠滴たる松が枝に露きらめきて初日てる哉　大阪　沖野英子

○春風の冷えたゝ胸をあたゝめて戀しさ勝れ東の空　大分縣　阿南白梅女

○　靜岡縣　秋月はつ子

影清く常磐の松の御手洗にすがたうつしぬ初日のぼりて　栃木縣　とら子

○田は實のり丈夫男子は歸り來て村賑々し年の暮哉　香川縣　合田まがれ

○石工の石割る槌の音さえて寒さ身にしむ冬の遊び路　下毛　宇賀神　智惠子

○野中流る小川のあたり初日さして岸べづたひに舟下る見ゆ　周防　品川渭野

○すが事にふみまよはじとつく杖の直きにならへ人の心も　ちる花

○奥深き宿を去りけり鶯の花香に醉ふてけふや歌はん　佐賀縣　橋口漣子

○森かげの我庵なれば夜嵐に貂くつがへる夢を見るかな　伯耆　木村恒子

○九重の御簾の內にもゆるされて通ふは梅の匂ひなりけり　大阪　田宮輝子

○下嵯峨へ緩くきしれる御所車すみれの道は月となりにけり　栃木縣　佐藤たか子

○おく霜にうつろひけりな色も香も我が花植ゑし庭の白菊　大分　姫ゆり

○見に來よとつげやる人もかへらぬに水にかへりしにはのはつゆき　磐城　佐藤美子

○風かをる谷間にうたふ鶯を二羽と思ひきよしの山里　西多摩　森田きよ子

○只一つ入江にとまる苫舟のともしびふけて蘆の花散る　石狩　吉岡つゆ子



○母ひとり弟ひとりのこの家を眞白くてらす冬の夜の月　下野　三浦香月

○そゞろにも梅の香迫る朝の窓芙蓉は笑みぬ鏡に榮えて　八王子　花扇女

○行く秋の空に漂ふ群れ烏哀れと聞きし夕鐘の音　遠江　原木富美子

○今の世のふみてふ文はおほけれど君が御筆によも勝るまじ　根室　寒國女

○里の子が丸木橋ゆく夕暮やみぞれまじりに初霰ぞふる　靜岡縣　しらぎく

○風白う木の葉時雨るゝ夜の宿今宵も虫を友と明かさん　柳河　なゝし草

○我庭は雪やみぞれもおとなしく紅ひもゆる梅の花片　靜岡　福井道子

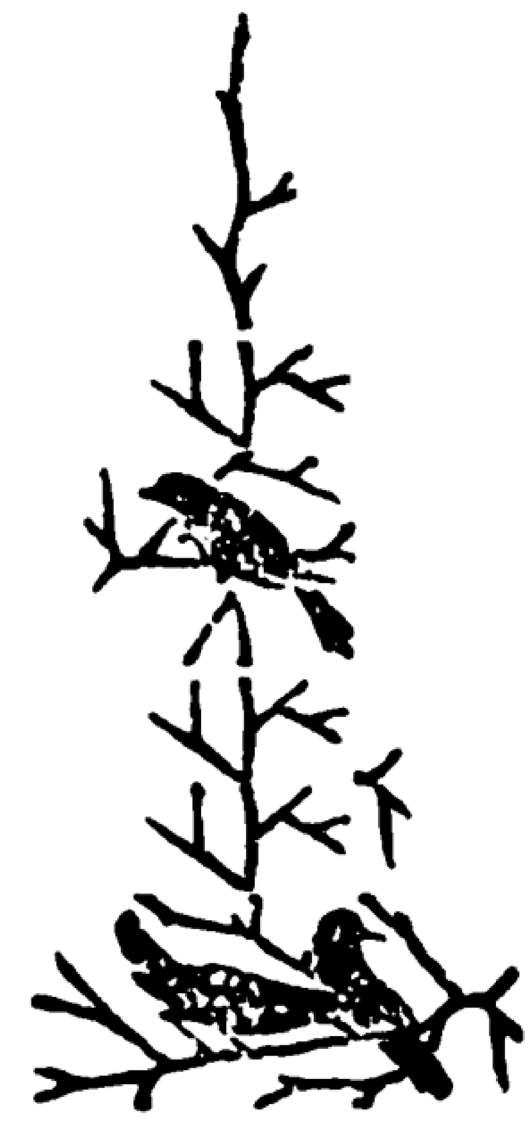
○庭の芝睦月生れの犬の子の七つ遊ぶに梅の花散る　富山　小林芳枝子

○蝙蝠の出る頃高く馬車の笛秋風寒く新月の入る　下野　川端柳子

○選者吟　佐々木信綱

灰色の野末の雲に一むらの鳥かげ消えぬさびしき暮や

まぼろしの森の木かげの薄あかり道咲きうづむあらゝぎの花



短文

編輯局選

▲規程　文章の種類は凡て自由なるべし、簡潔なる文字を採錄す、二十四字詰五行以內にして總て振假名附、半紙又は罫紙に認め一人一文を限りとする事、締切前同斷、懸賞乙種。

二等　○夫唱婦隨

福島縣河沼郡野澤町　泉はなえ子

三毛猫が緣端の日向に、心地よげに寢て居る小座敷でお裁縫爲作らふと思つた。針は夫、直な體で曲がらずに行手をあけてゆく。妻の糸子が之に隨つて柔和に縫ふて、始めて立派な衣物が出來る。針が少し曲がつても縫へるが、糸に節があつては到底駄目だ。と。

常住座臥の間にも深い敎訓は籠つてゐます

三等　○名産

甲斐　網野矢壽子

いと小やかな藁屋の軒も半傾きかけた內に襤褸を纏ふた五十餘りの婦人が、眼鏡を掛けて花鳥の摸樣ある美くしい絹布を織つて居た、此地は郡內で甲斐絹の名産地なのです、私は驚きました、かゝる家からかゝる美くしい布を織り出さうとははと。

實に何んな人の胸に何んな錦が織られてゐるか分らない

四等　○燈明臺

紀伊海草郡安原村　木下操子

私はいつもほの暗い時分になると、燈臺に火を點しに上りますが、私は其時に何日も「あゝ汝燈明臺よ、汝は力の限り倦まず撓まず强く清く光つて多くの舟人を守れ」と祈るのであります。

燈明臺に火を點ける役、何と言ふ意味の深い役でせう

五等　○乳母

鹿兒島市加治屋町百六十二番戶　山下豐子

學校から歸りますと四十ばかりの田舍のお方が大へん嬉しそうに「只今で御座りましたか、まあ大きくおなり遊ばしたてすね、先程から逢ひたうて待つて居ました」と云はれると、側で母さまが微笑なさつた、十年前の乳母だと聞きました時はどんなになつかしかつたでしよう。

乳母も抱かん許りに

秀逸

○婚禮の道具

横濱　千秋子

婚禮の道具と云へば簞笥長持鋏箱鏡臺なんて昔から定まつて居ります。私の姉さんも此例で嫁きましたが、私は是非これにミシンとオルガンとを加へて戴くつもりです。

趣味と實益を兼ねたる花嫁

○鍬初

和歌山市　さき子

お父樣、お母さま、兄樣と次々に七五三繩の張つて御飾のしたお農具て鍬初を致しますそれからお燈明をあげて新藁て編んだお皿に雜煮を盛つて三枚重の土の杯にお神酒をさゝげ家内一同桔梗色の未明の空を仰いで天地二十八宿の神々樣に今年の實の豊ならむ事を祈ります。

高潔なる行事

○御年始

埼玉　關谷房子

何時も母樣のお乳が少ないので一人の妹は牛乳て育ち私と弟三人は皆里子にやられたのです、ですから毎年お正月には各々御年始物を頂いて、なつかしいお乳の母樣の許へそれぞれに參りますの、かくして十七歳の今年まで。

里親も幸福、里子も幸福、貰ひ子殺しもある世に此の如き美談もあるのです

郊外大坂　きむほ子



○何故でせう

大阪市　大西幸枝子

永い事禁じられて居ります哀れな小說を讀むでみたくなりましたので、そつと出して讀みましても眼を泣きはらす程涙が出ませんのです、前讀みました時はそうてしたのに何故でせう私の心は變つて居らないと存じて居りますが、身體は丈夫になつて居ります。

時の悲哀

○時計

群馬　森下花子

春とはいへ寄宿舍の夜は冷たい。お友達はみなお休、私一人手紙をかく、一秒また一秒、讀み返して卷き收めて、さて茫然と此文の渡り〱て山里の母樣へ着く日など思ふ。チクタク〱時計が鳴るのに連て、ふと此秒間にも白髮增し給ふ母を思ふて私は慄然とした。

現代的の書きぶり

○私の結婚日　羽後　さき子

昨年の二月七日は姉様の結婚しました、あの時は私も早くあの様になりたいと思た、本年の二月七日は私の結婚日ときまつた、何となくきまりわるくて、親友とあつても話もなくたゞ顔を赤くするばかり、皆様も此様なものですか。

如何ですか皆さん?

○小説「角」を讀みて　京都　睦月君代

新年號岡田八千代女史の小説「角」を拜見して妾は非常に感じました、世の進むに從ひ人情は漸く薄くなります、併愛情の細かなるを以て天性となす婦人が時勢に隨て此傾きあるは眞に嘆しい事てはありませぬか、吁我親愛なる當文壇愛讀諸孃よ!諸孃は決して斯る浮薄なる人となられざる樣切に希望して止みませぬ。

諸孃よ、再び「角」を讀みたまへ

○花實　尾張　内山ふみ子

皆様は御聞き及びてせう尾張の中村を、豊公の誕生地てすもの、此村ては四季折々種々の草花を栽培して半里東の名古屋市へ賣りに行くのてす、隣村の子守共はこう謡うて居りますわ「嫁入りせんかと皆世話やくがいやよ中村の御花實」つて。

英雄の誕生地、花畑となる、俯仰多少の感

○好い心地　秩父　近藤とく子

紅色の雲とぼかした樣なるり色の雲とが、武甲山の頂きにかゝつた時私は裏庭へ出て眞丸なお日様が其の山の陰から表れる迄遊りを逍遥ふのです。

其の時の私の心は、實に〳〵何とも云ひ樣のない爽快を覺えます。

五層樓の上を三尺も離れてから見る日影と其心持の差如何

○食堂の時計　愛知　紫雲女

朝起き見ても晝御飯に來ても眞夜中にそつと覗いてもいつも同じ通りにコツ〳〵コツ〳〵と一分時も休む事ない、あゝ忠勤なる時計かな、私共が日曜毎に御馳走頂く折さつとチジを卷てやります、勉めよや勵めといふて硝子蓋をしめますのよ。

時計の響と、太陽の影と、永劫休むことはない

○一年中の手紙　土佐　翠美

お正月に昨年中お友だちから頂いたお手紙をかぞへて見ましたら百七十七ありました。

内封書が九十三、繪葉書四十六、葉書三十八てした。

山家に育つた無交際家の妾てこれてすもの、交際家の皆様方はとお察し申して驚きました。

ちやんとためて置いて數まで分るのは流石に女性、綿密な心掛てす

○梅散る夜　東京　とみ子

お月樣が暈を召してお出てだわ、と緣て直樣が呼ぶ。窓を開けて見ると、風も無いのに梅の花片がほろりほろり、ふみ樣が嫁かれる前にさん〳〵二人て名殘を惜しんだのも恰どこんな晩だつたつけ。仰ぐと星が一つキラリと輝いた。あゝ又一しきり懷かしう梅が散る…。

春景は平安朝、感じは明治

○妾の心　愛媛　菅しげ

私は今年十三歳の春をむかへましたがどうした事か三年以前から此世の中がいやて人の顏見ればつらく他の人が面白がる事は一切面白くなく面白いのは唯文をつくる事てあります之が少女のもつ心てしようか何故こんな心になつたのてしようか。

早熟、驚くべし

○新道　土佐　芳子

私の村は町へ十町しかありませんけど道が非常に少さいのて村民が不便利を感じる事は一通りありませんてしたが此度七尺巾の道を付るとの事て既に測量してあります餘りの嬉しさに私も姉樣も工事が始まつたら人夫に出ると申て居ります。

市區改正は道幅三十間

○冬休み　久子

私の家は郵便切手類を賣て居ます、毎年十二月の下旬から正月の十日頃まではよく賣れますのて、私は今年其賣役に當りました。玄關に居ますと朝早くから來ます〳〵、ゆつくり遊ぶ暇もありませんてした。

二錢は投書、一錢五厘は年賀狀

○何故か　伊勢　野菊子

私のお父樣は、田舍の學校の先生てすの。私がいつもお隣りへ油を買ひに行きますと、伯母さんは、花がお世話になりますから、と言つては、澤山まけて下さいます。

役徳

○かるた　仙臺市　相澤張子

私のかるたは皆樣のとは一種特別てございますそれは此紙上て當選された方々の和歌のみを百首集めて百人一首といたしたのてす、それを今年の御正月にいたしましたが一色變つてゝ面白うございましたよ。

女子文壇百人一首、作者の寫眞入などは思ひ附きてす

○私の職業　青森縣　角鹿花子

私は賤しい百姓て毎日野にかせぎに行きます春は田を

耕したり種子をまきます夏は大低草取りてありますが
暑いので汗が流れて口に入り鹽からくてたまりません
それはかりてなく汗の出たのに土がついて顔が恰度お
怪の樣になります秋は苅物て一番面白う御座います。

眞に百姓の言葉

○農家の朝　神奈川縣　森田靜江子

「お花仕度はいゝか」「あいよ」「さあ出かけぺい」と親爺後鉢卷で啣煙管プカ〳〵鍬をかたげて家を出たお花は後から今年十六、白地の手拭茶摘冠りに鼻歌で野良道を辿つて行くかくして晴々したる春の日を水も交らぬ親子二人て面白可笑しく働らくのでしよう。

○今　宵　周　防　松田いと子

兄さんは秀文才壇、私は女子文壇、弟は少年の友へ、間に投書するのてすが一度も當撰した者はないのてす、て今日御父さんが三人の前て、叱るやうに誰人ても一番先に登賞した者には、假五圓内て好な物を買つてやる。

○生れ故郷　靜岡縣　大木みよ

私の村は夏は農業春秋は多くは薪を取り冬は女子は行李を作り男子は炭燒てす富士の裾野てすから冬は大層寒いてすそれを彼の穴の樣な處に入りて顔でも手ても眞黑になつて炭を燒くのですそれても自分の生れた處はよいものです。

○もう姉さん　長野縣　下里賓女

「母ちやん腹が痛いてちよう」病んて未だ二日、產褥に臥つて居る母を見舞つてゐるのは小夜ちやんてある株切の眞中を誰が結つたか丸くとつて、慈姑の取手に結んださきへ長い緋縮緬をゆはへつけて澄してゐる最早姉さんだ!。

○お手傳　函　館　あさゑ

私も今年になつて一つだけ姉さんに成りましたから少はお母樣のお手傳を致そうと思まして其由をお母樣にお願ひ致しましたらお許しが有りましたので此頃ては少づつ致して居りますがなか〳〵趣味がございます。

○三　人　大阪市　大磯年子

友の一人は學ぶと首て學の都へ、一人は禮儀を教はるとて靜かな京へ、私は風荒き濱の浪花へと、別れ〳〵になりましたが、扨て三人は年立て、どんなに感化せられるてしようか?。

○茶　摘　羽　前　松山秋海棠

四月の始わが村を通る旅人がありましたならば、波の樣に續く茶畑の中から、緞頭つけた女の音頭につれて白い姉さん冠の女逹が一聲に唄ひ出す茶摘歌に聞惚れて足を止るてせう。更に雨の日ならば畑に續く東寺の山吹の花の濡色に對し一層の趣をそえるのであります。

○陸奥の三月　青森縣　松尾俊子

妾の地方ては三月になりますと始めて雪が消えそめますそうすると街道は水が五寸も一尺も深くなつて高い方から低い方へと流れます其頃は俥も馬車も全く通りませんほんとうに不便てあります。

○梭の音　新加納　佐野富美子

胡機に名の高き三十戶に足らぬ山里の一日は少女子が操なす梭の音に明け初めて梭の音に暮れ行く、御祭り盆正月、此處彼處、此音ハタト止んて、此の辻彼の軒、赤き袂がひら〳〵と。

○靜子さんと私　豐　後　菅原芳子

ある日仲よしの靜子さんが遊びに入つしやつて和歌のお話を始めました友は昔の和歌が歌らしうて好きだと申ます、私は新らしき想て壯嚴なのが好きだと申ました、そして歌會に何時も行く時は靜子さんは千代田歌集を持ちて私は夢の華を持ちて行きました。

○言葉のくせ　靜岡縣　青木靜山

姉さんが、「まあ」といふのがくせ、田舍の叔父樣がハツテネ、叔母さんがアレー、東京の叔父さんがチガイナイ、お父さんがスペツターロンダと云ふので皆な、よると大笑をします。

○石塲　　佐賀縣　島津留

我等の町は陶器に富んでゐる處で、千戸あまりの命をつなぐ人の御金は皆深い深い地の中より、掘り出す物です、年中馬車人車の運搬は絶え間なく、見物者は引も切らず、中より掘取る石は、泉の如くわき出てて、しかも無盡藏の寶ぐらと云つてもようございましよう。

○朝起き　　麻布　細谷櫻村

薔薇色に淡紫に横雲長く棚引ける東雲の空、梅の香は軒端をめぐりて幸多かれと囁くやう朦朧たる森は霞をこめて神秘を語て居ります、此莊嚴なる空氣に包まれつゝ庭面をそゞろ歩きますのは誠に心地よいもので有ります。

○月一つ　　長野縣　瀧澤さつき子

懐かしい東京の友と手紙で、互に親愛なる女子文壇の二月の定期増刊の祝意を表すべく約した、時は二月拾日午後八時半を期して、友は東京下谷の自宅の庭に妾は信州筑摩の里の我家の庭に、互に空に輝く月を仰いで、君が代の唱歌を三度吟ずるのです。

○山　　若狹　松屋きく枝

駿河には日本で二番の富士山があると先生に聞きました若狹には青葉山といひまして一寸富士山によくにた山がありますの、其故人々は皆此山を見て若狹富士と云ひます此頭はいつも雲がつもつてゐて實に美しくあります。

○鯨肉　　土佐　美枝子

土佐の沖で鯨の砲殺が澤山ですから其肉が極めて廉くあります、それで妾の手になる鮮肉の料理も弟や妹に又復鯨のお汁かと冷たき一言で排斥せられます。

芳ちやん



大坂　奥西はる子

○山の幸　　徳島縣　かへて子

私の家は山奥にあるので、皆様の様に都びた遊びは出來ません。そして此頭は野苺が澤山あるので、温かな日には毎日お隣の清ちやんと野にいつて、おいしい苺を取つて喰べて居ます。

○友の家　　芝　やよ子

友の母の云はるゝまゝに案内しつたはなれに行くと、東向きの障子は開かれて、琴のおかれた前には紫の蒲團が冷たそうにある。床の間の寒紅梅は香を室に漲らし、縁先には嘴赤い小鳥が暖い日をあびながら囀つて居る。友は居ない、然し緋の鼻緒の草履は踏石の上に揃へてある。すゝ廊下傳ひに衣摺れの音がする。

○猫　　山口縣　紅梅女史

妾がお飯を食べに出ますと家の駒(猫の名)が、いつでも付いて出て妾の膝の上にあがります、決して他の人の處へは行きませぬ、妾も大さう可愛がつてやります、それで駒が居ないと淋しうあります、亦妾が居ないと駒も淋しがつて鳴き歩くさうであります。

○兄妹　　相模　野島里子

汽車は男性、電車は女性、前者は兄さんで後者は妹です。京濱八里、兄さんは山に添ふて、妹は桃のとれるを、何れも暖い日光を浴びながら、仲睦まじう通ふてゐます。

○新親類　　京橋　藤田操子

姉さんは今晩お嫁に行くので私の家では大騒ぎをやつて居ます。姉さんが居なくなると大へん淋しくなりますけれど親類が一軒多くなるので嬉しうございます。私は今度の日曜に姉さんの宅に遊びに行くはずで樂しみにして居ります。

○車　　岐阜縣　柘植ちか子

姿の向に水車があります、春の日永にゆるう廻つて、眠たさうな音をします、人車は日本人の發明と聞くだにうれしく、今朝買ひし薪は荷車に乘りしもの、乳母車は妾には用なく、馬車には嗄の身のかなしさ、乘りし事なく、時々人の口車にのるは馬鹿らしく、汽車は早し。

○榾火　奈良縣　中宮よしみ

榾火は山家の名物である、一年中で最も暇な冬の日に、平和の色深き其焔から、絶へず多くの同情と慰藉とは湧いて居るのである、時には美しい戀も作り出されるであらう、立派な詩も生れるであらう、かくて一年の苦は全く燃え終つて、苦の結果のみ倉庫の中に殘るのである。

○雪の日　越後　松村芳子

すゝ降るわ／＼、いかに越後の雪は名物とは云へ、朝からもうこんなに積つた貳尺四五寸もアレ姉さん御覽よ人がせはしそうに走て行くと其後から面白そうにちさい犬も。

○私の身の上　兵庫　明月

私の義兄「實姉の夫」は姉との仲も極く睦じいでしたが、私をも非常に可愛がつてくれましたのを、姉は餘り喜びませんでした、終に兄や私に對して誠の優しい人でなくなりました、夫故で私は、あゝ私さへゐなかつたらと思つて戀しい都を去りました。

○わが村　山形縣　杉葉女

岩山が屏風の様に西に峙つて、北から東へかけて流るゝ鏡の様な清い谷川を前に控えた妾の村、南の一面は打ち開けて丘亦丘の陰にまで植ゑられた桑樹の幾十萬本、嗚呼これは實にわが村の生命なのであります。

○冷水浴　伊豆　少女

凜結ぶ曉、清鮮な空氣を呼吸しながら、私は毎朝冷水浴を致しますの、それは初めのうちこそつらい事と思ふて居りましたが、最早なれた今日では何とも思ひません、私は日々良藥をのむよりはるか樂かと存じて行つて居りますのよ。

○火の番　駿河　松永しげ子

或晩ふと目を覺すと、北風が恐しい勢ひで沈默の町並を吹荒れてます、妾の看板のことこと鳴るのが何とも云へぬ不安を抱かせました、すると南の方に幽かな火の番の鈴の音が響いて、それが追々明確してきます、妾は其儘深い眠に入ました。

○私の家庭　愛知　河村林子

父様は嚴格で而も慈愛深く母様はおやさしくて可愛がつて下さる私はひたすらに女徳をみがゝんとたのしい學び舍に通ふて居る、かくしておだやかな私の家庭には花も散らず風も吹かず樂しい日を送つて居ます、折もあらば記者様お出遊ばせよ。

○雛祭　下谷　橋本なみ子

飾つた初日は上段に氣を移られて、チヨコンと坐り、「奇麗だ、奇麗だ」と許り云つてた美い坊が、次の日は内裏樣を棚から落して鼻缺けにし、三日目には中段の豆煎で散々劫れ　四日目には泣きながら下段のお膳を一人で占領した。

○蝶　大分縣　中村美枝子

妾が裁縫してゐますといつ舞ひ込んだのやら一羽の蝶がしきりと障子の腰硝子にぶつかつてゐます、お庭の花が透ひて見えるからでしよう、妾はマー馬鹿な事を爲てゐると思ひましたが若し神樣が御覽になつたら我等も此の蝶の様な事を爲てゐるのではありますまいか。

○火鉢の灰　世良田せき子

私は毎夜火鉢に火を入れてあたりながら勉強しますから火がとぼつて灰が少しづゝ貯つて參ります、私は毎日はやく灰が火鉢一ぱいになればよいと思つて居ます、そうすれば望の高等師範へも入れやうかと思つて。

○十一時後の鍛冶橋　京橋　三好まさる

御濠を吹いて來る風が肌をさす様に寒いので思はず橋の袂に身をすくめた、眞黑な空には星も見えぬが月がよく澄んで水に影を落してる、岸につないである舟から煙が見えて折り／＼話聲が聞える。

○紙屑　近江　太田靜花

我家の職業は紙屑買ひである。私等は夜仕事に屑よりをするので、今しも夕飯を終つて睦じく例の通りやつて居ると端なく目に着いた物がある何心なく見ると小學校生徒出席減用紙の書きつぶしあちこちにラバーだとか戀愛とかの文字が見えた私の胸は異樣に感じた。

○深呼吸　美作　澄子

四年昔の事です、毎朝きつと庭園を散歩しながら旭に向つて深呼吸をしてゐました、所が或日隣の老母が「貴女はお若いに感心ですな、毎朝何樣を御信仰ですか」と問ひましたから何と答へてよいやら……一寸私も閉口いたしました。

○美人　德島市　河里子

絹さんは針仕事をし弟の孝吉さんは豆腐賣りて姉の手助をして居ます父樣が病氣て仕事が出來ませんから容貌はよし孝行娘てあるし近所ては大評判てす絹さんこそ眞の美人だと思ひます。

○時間割　新潟　大淵すみれ生

六時。目覺時計がちりん／＼と鳴る、呼吸運動を一回二回三回、朝飯まて數學と理科の下調べ、七時八重子さんと女學校へ、退けてから白山公園に詩を探り、晩飯後は、ひめ鏡と、須磨の曲に心をやり、二時間のおさらひが濟むと女子文壇を讀んて日記をつけます。

○初聲　紀伊　保子

妾の村ては正月の朝暗い内からお宮樣へ初聲舉げに參りますて妾もお隣の花子樣と約束しまして晦夜はとく／＼眠らず五時の打つのを待ち兼てお隣へ行きました未だ花子樣お休みなの、二聲三聲おこしましたら初聲は妾にと笑ひながらおきました。

○こはかつた　兵庫縣　難波美枝子

夜はもう十時頃でしたろう、お友達の家からの歸るさフト思ひ出した怪物屋敷、と思ふとゾツとして縮み上る樣てした、恐はく／＼ながら通り拔けやうとした途端がさ／＼とした物音と共に飛び出した眞白な物、ヒヤツと思ふと氣も心も一固りになつて家に歸つたのはどうかへつたやらそれさへわらなかつたわ。

○小日和　伯耆　春江

庭の櫻の花も、大分咲いて、春の溫和な日は、ほかほか照らして居る。美ちやんは様がはて、餘念なく人形をいぢくつて居る。空ては鳶が大きな輪を描いて飛んて居る。木の下ては、猫が細目になつて居眠りして居る。するとすつと春風が吹いて來て、櫻の花を、美ちやんの方へ飛ばした。

春の月



大坂　今西こゆき

○私の弟　伏見　幸子

日曜に姉さんと二人て、よもぎを摘んてお餅をこしらへまして、お二方と、祖母樣と、弟を、御ちそうしましたら、弟は、お祖に僕は、姉さんの好きな、葦を摘んてくるよと、眞面白なので、皆大笑ひいたしましたの、ほんとに、弟は罪のない子ですわ。

○不幸と幸福　岩手縣　佐藤篠

幸子樣は羨ましい程、幸福な御身の上て、私と同時に小學を出ましたが、すぐ高等女學校へ御入學なされ、毎日お車てお通ひ遊ばされます。けれ共皆樣より成績が不良との事てす。私は幸子樣とは主人と僕婢程身分が違つて居ますが、成績は人に負けません。

○文章が一番すき　長崎縣　彌富朝子

私は文章が一番好きです、そうかといつて上手にはかけない、そうかといつて廢めるのは死ぬよりも苦しいやうな感がいたします、さらばと筆把ればいつでも不満らない、でも熱心にやらうと思つて居ます、たんと笑つて下さい。

○足袋　茨城縣　塚田菊子

お母さんの足袋が九文半で、姉さんのは十文、妹のは八文で、妾のはお母さんのと同じなの、そして姉さんの古足袋はお母さんのふだんはきにお母さんの新いのは妾が他所ゆきの時に……。

○お猿廻し　上毛　河内星子

お猿になつて踊つて居た春ちやんは、お猿廻しが來たので、さも嬉しさうにまた思案顔に見て居たが、お猿がデン／＼太鼓を持つと、母の膝から立ち上つて、眼を丸くして、春ちやんのだと云つて、手を振り上げて泣きだした。

○ある夜　遠江　伊藤みどり

お母さんと聲かけて見たい程、それはよく似た後姿、もしやと、思うたが、氣の病だ六年も前に逝かれた人に此世で逢はれる筈がない、梅の花咲く角を這入る迄見つめていた、後姿、ふと我れにかへれば、月は無心に涙をてらして居た。

○氷滑　仙臺市　原霜峯

いつになく、早起きして氷滑に出掛ける、例もの西洋人の可愛らしい少女と、學生の二名が、最う來て居る、編上靴にスケートを附けて窮束なくも、鏡の樣な池の上に立つた時、Sの字に走り來つた小女、やさしい日本語で、會話を始めた、彼女は今日から、氷滑の先生になつたのであつた。

○妾の境遇　羽後　紅涙女

妾の家は貧しいので、女學校に入學する事も出來きませんで、毎日朝から晩まで鍬鎌を提る身の上です、何時もお母樣は、お前もお父樣さえお亡くなさらなかつたなら、こんなに働かせないのにと仰しやいます、けれ共妾は露程も悲しい顔を見せた事はないのです。

○犬の子　秋田縣　佐々木千代子

お母樣は先達叔母樣の家から愛らしい犬の子を貰つて來ましたが、未だあまり小さかつたので、私毎晩抱いて育てたら、此の頃はむく／＼太つて實に可愛くなりました、私は大きくなつて子供が出來たらやはりこんなに可愛いでせうか。

○初風呂　下野　鈴木さだ

私の村には井が三つしかないので實に不自由ですから妾の家では此間掘りました、新しい井の初水で風呂を立てゝ入ると長命をすると云ふので初水をくんで立てましたの、すると隣のおばあさんやをぢいさんが來て悦んで入つて先づ御陰樣で長命が出來ますと云つて歸りました。

○讀書の心得　茨城　谷貝梅枝子

妾は誌友の皆樣にお願ひ致します、本をお讀みになるときは、唯聲を高くはりあげて、讀むのばかりが我が身のためにはならないの、行儀正しくつゝしみて、心の底をよくすまし、人が十たび讀むときは妾はもゝたび讀みますよ。

○樂しい時　伊豫　曉子

末の妹はもう始終殺ると、幼稚園をよして小姉樣の樣にお袴をはいて學校へゆきますとお客樣がある毎に嬉し相に話して居ます。そして大きな妹は女學校を卒業したら如何しようか知らなどと、折ふし窓に散る櫻の花ひらをうつとりと眺め乍ら深く考へてはまた妙にほゝ笑んで居ます。私もあの樣に樂しい時がありましたの。

○御姿　沼津　八代美代子

誌友の御姿を拜見致しました私は何となく、赤倉富子樣は櫻、林千代子樣は海棠、吉松信子樣は白百合、近藤とく子樣が野菊で、飯田富美榮さんが白芙蓉、そして古志谷子樣が半開の薔薇の樣な感じが致しました。

○すがゝき　上總　牧野とよ

月淡き今宵の春、八重ざくら亂るゝ小櫻の端居や昨日賜はりし歌ひらきて、平調の琴にのぼすに、すがゝきの指細うて、思ひの、胸に多き。もしはしなくも呼にのらば、わが戀えつと歌抱きてその君に告りまゐらせむ。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

二等

神の顔佛の顔や春寒き　千葉縣　石井はる子

三等

羽衣の舞朧げや夜の舞臺　和歌山市附近岡崎村寺内岡崎楠太郎方　さき子

四等

行く秋の男にもろき涙哉　越後國中頸城郡寺野村　藤原鶴子

秀逸

水仙の花に夢ある夜寒かな　福井縣　小川よし子
唐人を招ずる梅の書院哉　磐城　光子
寺の灯を舟から拜む十夜かな　茨城縣　黒田如柳子
春雨の路に小さき下駄のあと　熊本　かたほ
初夢やさめてはかなき古机　安房　澤の女
泉水の魚靜なり春の雨　駿河大倉　光代
竹やぶや出て道近き椿宮　周防村谷　芳子
袷着てまゆもそりたるをんなかな　大阪大西　幸枝子
獨居の感ある雪の今宵哉　大分縣野田　なるみ
琴抱いて訪ひ來る子や春の雨　仙臺中目　のぶ
南窓に木枯聞くや醉詩人　上毛駒　子
朝寒く髪の亂るゝ病後かな　四谷八重　子
こひれこや月もおぼろの垣のもと　盛岡田中　ゆたか
明月の馬場に弓ひく若衆かな　本所秋山　欽子
春の人歩りき倦みてや摘草す　奈良縣下　澄女
大雪に默して飛ぶや朝烏　阿波　むらさき
春の野に胡蝶の墓ふりボン哉　京橋今泉　磯千鳥
鶯の鳴く音に君を懷ひけり　沼津渡邊　とよを
春風や女連れたる伊勢參り　丹後楠田　露子
川岸につなぐ小船に吹雪哉　岐阜縣日野　欣子
山茶花の門に入りけり女醫者　京都山口　愛華
大雪のつもりて低し木曾の軒　德島河　里子
竹の雪落ちて夢覺む枕哉　近江竹村　芳枝
古寺や梅に立ちたり女繪師　伊勢佐々木　らく子
幾かへ神の御杉や風薫る　飛驒　ゆき子
孫連れて彼岸團子を買ひに行く　滋賀縣島田　かず
紅梅や賓人迎ふ白書院　大阪鹿島　綾子
結ぼれし春の思ひや常陸帶　遠江拾　小舟女
化粧して襟あし白し春の宵　下關　豐子
元朝を詣ずる宮の古松かな　下野　くに子
はらはらと銀杏散るなり初時雨　白露
初雪に横川の杉のながめ哉　安房文　江女
村に來てこの長閑さや梅の花　石狩椎の　藤波
此窓の櫻ちりけり夜半の風　上總齋藤　秀子
檜扇の風に胡蝶の春の舞　尾道清　月女
桃咲くや襟の汗ふく女坂　下谷橋本　なみ子

ちぎれ來て雲一つゞゝ時雨れけり　安房　花子
渡しよぶ人寒げなり利根の水　京橋　三好まさる
鶯やいつ來る年もめづらしげ　常陸　露月女
いけ水に氷りし松の落葉かな　周防　松田つれ子
春の日に蠶飼ひ給ふ妃かな　京都　きく子
植曳の今日山出る小春かな　横濱　新堀紫子
荒城や堀に風立つ三日月夜　いさゝ川
丸髷の娘も見たり松の内　京都　藤村華子
茶の友もなくてくれけり冬ごもり　上總　鹿田みどり
流れ行く水にも春の匂ひ哉　埼玉縣　渡邊文子
寒月や狂ひ女の笑ひ聲　鳥井戸　織澤露舞子
夜櫻や丸行燈に小酒もり　相模　野島里子
壷郭の途に逢ひたる時雨かな　豐後　西野袖子
石段の音も寒しや朝詣り　京都　中村さち
春寒き貧苦の中の孝女哉　熊本縣　松本つい子
元日にぬれて歸りぬ晴衣裝　千葉縣　佐藤榮枝子
野芹つむ少女の袖や夕嵐　近江　藤岡とく子
夕月や厠の窓に梅の影　大阪　高田明子
朝ぼらけ五位の一聲秋の空　南筑　ひさ子
月涼し金波銀波に千鳥飛ぶ　羽後　三浦花の舎
いそ村や山に背て梅の花　陸前　藤井光子
糸柳水も音なく流れけり　下總　三橋なみ子
梅の宿に又參るなり歌使　芝　眞崎靜子
前栽やもやもやの彼處に殘る月　肥後　石寺とりふ
獨居のしみ〲見るや秋の月　伊豆　少女
初汐に來るや高麗の貢船　伊賀　露本邊子
紅梅に誰が短册の女文字　遠江　木下冬子
物の怪のかくて幾年草萌えぬ　常陽　良子
古寺や木枯し吹て鳥鳴く　下總　長田雪洲子
永き日も知らで小猫の寢床かな　府下　森田なか子
三日月の細身の太刀に光りけり　常陸　酒樂貞子

山茶花の散る椽に髮結ふ人よ　名古屋　奥村晃子
春風や京に二里の川堤　土佐　高橋白ばら
如月のまだうら寒き柳哉　藏岡町　安田すみのゑ
若水を汲むや少女の十八九　備前　我澤素枝
お飾りの橙にさす初日かな　伊賀　山村龍子
おぼろ夜や僅に見ゆる花の塔　青森　村林やす子
朝夕の落葉に作る籬かな　上總　渡邊若葉子
花の茶屋お花と申す女あり　越後　村松芳子
火事映るお庄屋樣の土藏哉　伊賀　伏見鹿子
機姫の機音繁し春の暮れ　山口縣　紅梅女
山陰や吹雪やみたる暮の鐘　土氣　井内津加子
槍持の尻の下行く燕哉　上總　久我まさ子
春寒し厨の下のこぼれ炭　越後　五十嵐よしの
石像の女神の裾や風ひかる　新潟縣　高梨靜春子
舟中に人の聲あり歸る雁　青森縣　近藤貞
古文書を閲する春の日も閑に　千葉縣　石井はる子
落武者の袖に落葉や冬の月　豐後　立川つや子
一本の梅散る池や水ぬるむ　金澤　堀越蝶子
春雨や旅發め勝ちなる旅の客　京都　石崎いま
柴の戸や文箱開く花明り　神戸　水野てる代
孫連れて子連れて花の初芝居　山梨縣　奥山かつ子
雪道や車を洩るゝ緋の袴　新潟縣　丸岡孤羊
少女子の指の細さや梅の花　近江　みどり子
累繼切る山の夕日や赤蜻蛉　陸前　小野寺節子
朝顏の下に庭掃く少女かな　無名子
留守居して炬燵に本を讀む夜哉　麻布　吉田かつ
梅咲や雪も少しは翻れ　信濃　花ぞの守
初蟬や名もなき山を先に降る　越後　有明
蝶とんで春の日沈む港哉　周防　谷滿緒子
物思ふ枕やこけて秋の雨　遠江　原木滿子
古る寺も聞こえぬ鐘や初御空　富山縣　高瀨きよ

節分に[illegible]打ち笑ふ一家かな　静岡縣　良水
学ぶ身に嬉しき夜のながさ哉　上總　藤田靜子
一聲は木立隱れにほとゝぎす　羽前　笑花賤女
大根ひく男も戀の小唄哉　茨城縣　翠子
萬歳と踊りつゝゆく小道かな　渡島　妙子
ひつかゝる風に散りけり松の露　富山縣　經田はる子
白菊の只一輪のけだかさよ　天鹽　菅井女
集ひ見る梢の木乃伊や時鳥　磐城　遠藤華子
霞に夜明けて春の山遠し　三重縣　尾崎都月子
まる窓や花に朧の物語り　大阪　淺田ゆき
月高く風上の人の微吟かな　山城　村田冬子
春の人夢野に若菜摘みて居る　千葉縣　秋山花馨子
小雨して地藏の膝に紅葉かな　堺市　河野清子
小夜更けて誰れ待つ窓や梅かをる　上總　木内きん子
回廊に滿ちくる潮や春の風　讃岐　十河春江子
煤掃きや轉がり出たる犬張子　下野　川端柳子
鶯の高音や雨の晴れ間〱　富山　小林芳枝子
黄昏れて鄙唄高しあきの山　香川縣　さつき
春立つと軒の氷柱の雫哉　神奈川　山本綾子
初市や田舎娘の高島田　靜岡縣　秋子
雪殘る小藪續きや落椿　八王子　花扇女
如月や梅の垣根の忘れ雪　北海道　吉岡つゆ子
すむ月に北風寒き夜店かな　府下　森田なか子
行く秋をかゞしたふれて風寒く　大分　姫ゆり
一輪の朝顔咲きぬ小六月　大阪　服部浪子
老松に山雀の鳴くや秋日和　下野　三淵花香
夕月や松の梢に鷺一羽　伯耆　木村恒子
宮島や怒濤に浮ぶ松の月　周防　品川清野
小夜千鳥なくや渡に人一人　下野　佐藤高子
干す傘や梅の雫のなつかしき　岐阜　小川糸子
草餅の草は知らじな都人　千葉縣　翠山はつ子

高殿に誰が爪琴ぞ冬の月　香川縣　峰子
使して玄關の寒き宵疊　大和　久保榮子
清水の塔から霞む都哉　京都　澤田鶴子
浪速津の古りし驛や桃の家　大阪　大村花子
初藤や近道すれば橋普請　香川縣　井川もと
衣あらふ里の小川に鮎上る　鳥取　上山千重子
萩散て師の君逝くと聞く夜哉　奈良縣　中時枝
名もしらで草摘みにけり都人　舟橋町　えい子
銀屏に夢温かし雛一對　香川縣　須田もと
巣にもどる鳥の音遲し春の月　宮前　靜月女
庭中に笛ふき居れば月のぼる　越中　瀟子
鶯啼くや山根離れぬ朝の雲　上毛　堀越律子
窓明けて欠伸して居る日永哉　福井縣　片山千里
春寒き杉の木間や小提灯　高岡　葉山靜枝
陽炎に繪日傘つゞく彼岸かな　福岡　秋月
仲わしき隣ざかひや桃の花　相模　鍋田美代子
行暮れし旅の一夜や春の雨　鹿兒島　山下豊子
春風や障子の穴も俗ならず　山梨縣　田中ふえ子
暮れて又雪見の舟に霰かな　濱田町　三明千鳥子
米をとぐ桶へひら〱今朝の雪　新潟　佐野富美子
雪三日渡しも人も見えぬなり　若狹　津田かよ子
戀猫の聲行燈にうつりけり　羽前　秋海棠
春の人暮るゝも知らで若菜つむ　青森縣　松尾俊子
里の子が集ひ行く野や初霞　長崎　一瀬みどり
春雨の若草山を洗ひけり　遠江　安原幸枝子
朝月や閼伽汲む尼に鷄啼く　加賀　小島蓮尼
久米舞に露うたへ梅の花　石見　靜子
大原や小馬群れ居る春の草　千葉縣　越川つれ子
春の夜や君みし夢の美しき　若狹　津田汐汀
朝霧や鷗鳴渡るゝ小村哉　茨城縣　永井誠子
よき橋を過ぎて桃さく小村かな　豐後　菅原芳子

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

二等　○同窓會の模樣をしらす

白菊

秋も更けゆき候此頃、木の間下りくる枯小葉の行衛見送り候てはたゞ何となくあはれ身にしみて覺え候、久しく御目にも掛り申さず、盡くともつくまじき御物語は昨日の同窓にこそと存じ居り候ひしを生憎御さしつかへのよし御缺席との事承り候折は殘念さやる方なく、皆樣にもいたく物たらぬ御樣子に見受け申候、誠に昨日は近頃になき盛會にて先生方も多勢御出席下され同級の方も大かた御出でなされ候。勝浦樣もはや御二人御持ちなされ候よし下の坊樣御連れなされ候。友田樣もいよ〳〵このたび學校の方は御やめなされ近藤と御改姓相成候、口惜きはこのまどゐに櫻井樣の連り給はぬ事にて春の集ひに奏でさせしヴワイオリンの音まだ耳にさながら殘り居り候ものを實にはかなき人の世とまたしては申し出してうら若き名手を惜しみ申候高岡樣相變らず學校時代の氣樂さ、折から運動場にネットはりあり候ひしに「久し振りなりいかに」と促したまふを「御ぐし鏡にうつして給へや」と例の定子樣すかさず仰せられ候ひしにさすが御つむりの手柄と同じやうの御顏色なされてなほ「さる事いはぬものぞ」とほゝ笑み給ふ、例の膝丈の袴鍵ざきしたまひし頃そのまゝの御面影。御痛はしきは三好樣、無造作に束ね給ひし束髮は切かみよりもつらき御涙にしめるらむと申し上げん言葉もなく片言まじり愛らしき事のみ語らるゝ遺子の君を見ては御心の中推し量るだに涙さきだたれ申候ひき。思へば學びの庭を出でゝ四年、かはるは人の上に候よ、校舍の窓よりすきみ致し候ひし世の中といふものは實に私ども勝手に作りこしらえ候世の中なりしよと今ぞ思ひ知られ候て罪なく行く末を語りあひし頃たゞなつかしう御座候なほ〳〵萬づは來月發行の會報にて御承知下され度友の御消息の一はしばかり傳へ參らせ度くて、かしこ。

（評）行文暢達句々活躍せり、且つ筆者が主觀を叙するあたり句短けれど痛切を覺ゆ。

三等

○故郷の友に

大阪市東區　辻　廣子

きのふ今日いとゞしく吹きすさぶ木枯しに、むさし野の芒がくれをゆく水の、それと見らるゝ迄冬がれて候。ましてや、信濃路の見る目かひなき山里にて候へば、身も心も覺えぬ程にわびしからむは、人事ならず察しまゐらせ候。龍田姫の衣とて織りなされしもみぢ葉は、はや殘り少なに散りはてゝ候ふべく、夜ごと〳〵に、夢結ばれぬ夜寒の床に、さらでだに涙にもろき御許樣の千々にみだれし斷腸の思ひ、さてこそと、雲山遠く隔てたる身も、一つ心によそながら袖を絞りて候よ。あはれ去年の春、共に手をとりあひて、上野の森を逍遙ひし折、何にをか語り候ひし、何にをかきゝて候ひし、世は夢にて候。朝ごとにおきまさる霜の氷りて瀬戸の堀井もくむに堪へずとこそ思ひやられ候を、今朝何となう雲ゆきあやしきまゝ、いよ〳〵心許なき故郷の空あたり、遙かにふりさけ見つゝ、一筆のたよりまゐらせ候になむ、あはれ、今宵はしも、雪になやめる子狐の悲しき聲をきゝつゝ、ありし昔を忍びておはすらむか。お返し待ち入り候、かしこ。

（評）情に於いてよりも文に勝れるもの凡手にあらず。

お使ひ　上毛　青木寸子



四等

○夫の許に

埼玉縣大里郡玉井村　中村紫香子

今宵岩代國須賀川町にお着の由、さすれば最早御歸宅も程なき事といとゞ嬉しさに堪へず候。九十日餘りの御旅寢定めし御勞れの事と察上候お留守中は母上樣はじめ千代子も別條なく暮し候ひしが只二つ變りし事それも嬉しき事の御座候。お歸りを待候てゆる〳〵申上んと存じ候へども、堪え難く候まま一寸申上げ候。かの御出立の折のお言の葉しみ〳〵と嬉しくそれよりは私の身の限り、心の限り注意いたしお仕へ申候ところ、もとより御賢明の母上樣故いと〳〵御優しくおなり遊ばし此頃は勿體なき程にて誠に嬉し涙に咽び居候。今一つは千代子事いと大きう相成「カブ〳〵チ

ヨーダイ」等覺え誠に可愛く早く御覽に入れたきものと毎日母上樣と語り居り候。何はともあれ早う／＼お歸り遊ばし母上樣の御優しさ、千代子の愛らしさ御覽ぜられ度委細は其時ゆる／＼申上んとわざと書殘し嬉しき御姿拜さん日を一日千秋の思して待ち居り候。かしこ。

（評）少しも飾り氣なく若き母人が待ちわびたるさま目に見るやう。

五等

○紙に添えて

小石川　唐崎秀子

叔母さん先日の御話ては敷物を作るので紙が澤山いるそうですが家に私の書いた反古が御座いますから御屆け致します。高等二年時分からのですからそれは／＼下手に書いたのがありますなるたけ下へ御張り下さいまし今度御倉の掃除を致しますからそしたら又御屆け致します。さよなら。

（評）文意明瞭「なるたけ下へ」の一句活躍せり。

秀逸

○暖國なる友への返し

壽子

一日々々とくらす中何ごともなくてはや今年も年のくれと相成り申し候折しも。ます／＼御機嫌よく御出て

遊ばされ候由、何よりも御目出度存じ候此方も御蔭にてみなみな事なく暮しをり候間はゞかりながら御心安う思召下され度候、先日は誠に／＼御珍らしき筍あまた御惠み下され有難く厚く御禮申上候、なつかしき御許樣よりの御贈物如何なるよきものならんと、籠を前に家内一同とりかこみ弟妹等はお密柑よ柿よいや林檎よと評し合ふ間に手早く繩とり開きしに、こは思ひもよらぬ筍にて一同驚き且つ喜び申候、さても／＼御地の暖かきは此の筍にてもおしはかられて御羨ましく存じ候、昔の唐の二十四孝の筍堀りも思ひ出され申候、當地の如き雪國にては、今頃は只鑵詰あるのみ筍と云へば四五月頃ならでは見受け申さずげに初物をたべ候はゞ七十五日長壽致し候とか、これは思ひもうけぬ珍物なれば定めて初物の比にあらず長壽致し候はん此のまゝ宅のみにて頂くもをしきものよと父上の仰せらるゝまゝに早速親類の誰かれに少しづゝ分ちやり申候、さて此の鱈は誠にめづらしからぬものなれども北海道よりおくりこし候もの、未だ試み申さず如何かとはぞんじ候へども、御うつり迄に御目にかけ候まゝ御笑ひ納め下されたく候。かしこ。

（評）繩とり開きし時のさまげにと思ひやられて面白し。

○病める友に

大阪　木村春江

かりそめとのみ仰せしにまだ惱ませ給ふ由妹子樣より

の御通知にて痛う驚き申候翼なき身は此處に殘れど心はとくに馳せ參りて御病の御樣子もほゞ推し申候並ならぬ御心痛の程推し上候へども今は甲斐あらじ御身だに壯やかに復し給ひて氣長く時をまち給ひなば何の望か叶はざらん去年雪に埋れ居し庭の梅今見事なる色香に匂初め候異郷の空のはるけさに一枝と申難きが口惜しう存じ候今朝開きしばかりの一輪つれなくつみしも君が爲小さき匂に深き心を味ひ給はゞ嬉しうこそやがて咲くらんかの花蔭に、花咲かばと宣ひけむ去年のかね言よも忘れ玉はじ思出の蔭にまた新たなる睦語りて遠き行末の榮を希はん花も必ず待つらんに我も神かけ祈り居候へばつとめて御いたわらせ玉へさらば程もなういゆべし小さき胸にあまれるのみ心の病は逢ひ見し曉我こそ受けめ、今は只何事も忘れ玉ひて一日もはやう御全快あらまほしうくり返し〳〵申上候只今小包にて差上候人形名は文子と申し最愛の妹に御座候可愛き樣の折柄御なぐさみに相成候事もやと。かしこ。

（評）此の文得し人定めし病も忘れしならむ文も心も情にみてり。

○友に

土佐　高橋白ばら

久々にての御消息昔にも增してさへざへしう渡らせらるゝ由嬉う目出たう拜し參らせ候日常を語れとや。なかなかに罪深き言にて候かな別れ參らせてより三年いよ〳〵高くいよ〳〵美しき御年月にひきかへての私のわびしさ昔のまゝの里住みながら妻となり母となりてはさすがに日々のつとめも繁くて書よむ事も筆とる事も心のまゝならず候机上にばらの香なく、ありし詩集も影をひそめて日記やら簿記やら料理法やら育兒法やら雜居の有樣にて候、朝は下女と共に夜は最後にひとり火や戶じまりをあらためて十一時頃臥せり申し候……納屋より藏、長き門より裏門迄のうす闇も、今は淋しくも何ともなく候……袖長き羽織は立居に不自由にてかつは書生らしきと隣の人の私語も恥しうてこの程二枚計りくづして筒袖の半纏と致し申し候書きたき事は山々ながら夜も更け候まゝこれにて失禮致し候、御身御大事になさるべく候。かしこ。

（評）さもこそとおもひやられ候へどもそこに言ひ知れぬ樂しさのおはすらんと存上候。

○寫眞に添えて

奈良縣　中富よしみ

前略、山より山を逍へる我が家庭も此度は人里近き山林に買當りて、遠からぬあたりに寫眞師の住めるを幸に、先日同人を山に招び撮影せしめし其一葉別封にて送り參らせ候間、何卒我等が生活の實況御笑覽下され度候。

先づ寫眞の左に、怪しげなる小屋の二三ならべるは、

我等に取りては金殿玉樓にも等しき住宅と、つゞいて炭藏浴塲等にて、丸木と杉皮をもて造りし粗末なる假屋に候。次に雜木の立てる間に山襦袢山袴を着し穿てる夫が手に握れるは、我等が生命たる斧と鋸とにて、戰爭の繪などに見る鹿柴の如きもの後ろに廣く重なれるは、夫が此二器をふるつて伐りたほしたる山林の光景に候。右の方圍なき小屋の奥に見ゆる炭燒竈は當山に於て初めて試みし、木炭を取るの外に烟を利用して、木タール及び酸液をも得べき最新式の構造なれば、燃燒中と雖も烟は外に出でず候。竈の傍にをかしき風體なせる妾が膝にある幼兒は去年葛城の山中にて生れし一人子、手にせる冊子は泣菫氏の子守唄にて、炭燒と副産とは妾が子守をしつゝする仕事にて候。

あゝ此の寫眞にて久しく都門の生活になれ給ひし貴女樣が御目には定めて御珍らしくも候はむ、されどされどかゝる山奥の家庭にも溢き愛の光の輝けるのみは、少しも都にかはり申すまじく、浮世はなれし仙郷に於ける一家團欒の樂みも、中々に趣味あるものにて候よ。先はこれにて筆とめ申すべく候。かしこ。

（評）げに都をのみ望む虚榮の人に讀ませたきものなり。

○妹が里より　飛驒　ゆき子

都の春はもはや花にて候はむ、されど田舍は未だ冬に候。解けたる雪にて濕りし街道は小さき流れが、凍た

肥料の重りし間を流れ居り候。垣の外の景色は例の御存知の南向きの庭のみ木も芽萠え、心地よき春風に枝を鳴らし居り候。今朝少しく降りし雪は、今解け、雫が枝からも、軒からも、屋根からも滴り、雀は小さき羽にて喧しく囀り廻り居り候。太陽のあたる方は何もかも生き〳〵し、空にも地にも人の心にも若々しき精神と、幸福と、希望とが叢生り居り候。硫黄山の煙も今日はなぎ居り候。君戀し、都なつかしと筆とり候も、書く事も候はて田舍の消息と成り終り候ひぬ。四月には都の花を眺めん身なるに、それまでは待たせ給へや。

（庭の松の落つる音頻りに聞え候）あなかしこ。

（評）簡約ながら田家の趣味自らこの中に躍如たり。

○養女に望まれしといひ越せし父母への返し　本所　秋山欽子

校友會報編纂掛りの任務と、運動會記錄と、學期試驗とかち合つて一寸の暇も御座いません。上京後の摸樣といつて別に變りも御座いませんが、數學は目立つて進み、從つて興味も起りましたし、和歌はいつもいゝ點を頂きます、御喜び下さい。此家では皆樣がさばけた方ですから、少しも、遠慮がなく心やすう過ごして居ります。さて、御申越の事に就いては、私はちやんと決心致し

て居ります、私は富の爲に人の子になるやうな浮薄な人間には御座いません、今、目前に黄金の山を築かれたとて、どうして目が眩み心が亂れませう、私によ前途に學の光が輝いて居るので御座います、一身の安樂の爲に、平凡な人間になりたくないと思ひます、苦を積んで安を貯へるのが處世の秘訣でせう、頭上に大鐵槌が下つても、私の決心は崩れますまい、私の決心は私の名の樣に堅いので御座います、而して私の名の樣に、映ゆい光をやがて放つ時が來るでせうと豫想して居るので御座います、どうぞ、以後此事は仰つしやつて下さいますな、御願申します、

併し、いかに、いかに貧すればとて、武士氣質の御父樣が、こんな事を、御口に遊ばすとは、どんなに御苦しみなすつた果でせう、思ふと、もう書けません、たゞ、今暫らくの御辛抱、御身體を御いとひ遊ばして私が、人らしい人になるのを どうぞ御待ち遊ばして下さいますやう、はるかに御願申します、

左官　長崎みどり



また、御母樣にも御似合はない事を仰つしやいます、都に居ては、みなが、さぞ美くしい衣を着て居るのを見たり、紅白粉つけたよいとこの御子を見たりして、御前もどんなにかつらいだろう、彼家は村での豪家、殊に子はなし、どの樣な事でも、との仰せ、私を思ふてのあまりとは御推し申しますが、あんまり情けない私は譬ひ、布子を着て、眞黑な顔をして居りますにしろ、人の皮きた美くしい人の前で少とも恥かしくは、御座いませんの、心に確かな信念を持つて居りますからどうか御安心下すつて、先方へは斷然、御斷りを願ひます。

大分寒が烈しう御座います、私が居りませんで、さぞ朝夕は、御母樣御忙しいて御座いませう、今に屹度、御樂に致します、夜なべは、およし遊ばせ、また御持病に障るとよろしく御座いませんから、そしてお炬燵ですつかり御溫りなすつて御やすみ遊ばすやう、また御父樣も御老年、決して過ぎた御仕事を遊ばしますな神かけて祈つて居ります、先は右まで、あら／＼かしこ。

（評）決心や嘉すべけれど語句おだやかならず、今少しやさしく女らしくは書けぬものにや。

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈



三等

○　若狹小濱香取　山田鐵葉

幾度となく問はれた年の十五と云ふのもけふ限り

新歌謠でなければ歌はれないところ。

四等

○　奈良縣吉野郡賀名生村　中宮よしみ

天狗山姥仙人などの國へ出そうな山のみち

想像が面白い。

五等

○　臺灣　中村政子

濱の松原一人で行けば松と浪とが話する

あつたやうな趣向で未だ斯う云ふ風には言てない。

秀逸

○　周防　梨喜子

君は東に私は西に遊ぶ胡蝶は其中に

○　吉備の里　悦入女

月の夜道になく虫の音を入れて置きたい蓄音機

○　長崎市　子鴉

田舍娘も十八や花よ黒い蝶々がしたひくる

○　府下　森田志満

府下で名高い青梅の梅にや都人さへ山家まで

○　泉南郡　紫雲女

縄が二島を結んであれどすそて波立つ二見浦

○　播磨　孝壽子

妾の住む里向ふが海で貝を拾ふて細工する

○　長野縣　唐津きへ

人はともあれ私はひとり娘時代に戀はせぬ

○　山口縣　紅梅女

宵寢朝起き辛抱は金よためて求めた繻子の帯

○　旅行中　泉たつ子

沖の島守自慢て話すたった一度の京のぼり

○　廣島縣　笑花

太鼓たゝいてふし面白く入って來ました猿廻し

○　北海道　長谷川ます子

天の河原の小草がゆれて露が散ったか流星

○　下谷　むらさき

人も通らぬ峠の茶屋に乙女椿のほつと咲く

○　大阪　鹿島綾子

こんな雪ても朝の戸叩く牛乳配りの苦學生

○　伊豆　杉原やを子

伊豆の天城はうれしい山よわさびしひたけわいて出る
○
遠江　増田ぎん子

京は四條の紅屋の町の屋根にや燈籠おぼろ月
○
伊勢　佐々木らく子

花の盛りの隅田の堤一目見せたや母様に
○
山下武子

あゝらめでたくまんざいさんよつゞみうて／＼ちよかけて
○
茨城　はぎ子

おいて行かれた男涙を慕ひあはとくだけてちる女涙
○
遠江　林　德子

妾ら知りたい雲雀の歌を知れば歌ふよ大野原
○
岐阜縣　柘植ちか子

窓戸あくれば小雨がかゝる母の御身に氣がかゝる
○
佐賀縣　樋口御幸子

雪は降る／＼學校通ひ今日の足跡妾ばかり
○
神田　藤掛應登里

お染十八戀ゆゑ死んだ烏にからすが泣いて居る
○
相模　野島里子

桃の日和を都へ八里汽車と電車のかけくらべ
○
越後　五十嵐よしの

織る手休めて何をか思ふ赤い襷に花が散る
○
備前　我澤榮枝

備前名物かず／＼あれど中で名高い吉備團子
○
長岡市　土田りた

ふれよふれ／＼お雪の神よ家のお庭にたくさんに
○
麻布　吉田かつ

赤い蛇の目にあは雪受けて破布の人行く片町を
○
韓國　吉谷美津

わしの姉さん村での美人田植さすのがいとうしい
○
上野　大沼染子

妾が毎朝鎮りをあげる宮の松から日が登る
○
佐野富美子

今日は八日よ朔風吹けば家のお米の値が上る
自註「舊暦十二月八日、八日吹きとて朔風吹けば、米の直上ると古しへより語り傳ふ」
○
兵庫　明月

愛の涙は山わきいづる岩清水よりもまだ清い
○
鹿兒島　貫島よし子

地位も名譽も望みはせぬが胸の青毛と野に居たい
○
沼津　靜山女

まふな蝶とまれよ梅に其のまゝはがきにゑがきたい
○
札幌　齋藤月花子

長いと思ふた此お休もすぎりや一夜の夢のあと
○
豐後　菅原芳子

聞いてみたいよ靈の花に蝶のつげたる戀がたり
○
信濃　岸波子

春は花見とおしやれもするが秋は收穫冬仕度
○
新潟　佐野富美子

あすは嫁入り此の晴れ姿見せて上げたや亡母上に
○
飛騨　船坂道子

猿の手をどり狸の皷雀のおしやくて小酒宴
○
蒼海漁娘

私お育ちは若狹の隅で主が住むてう野が湖
○
大阪　花桂女

他人まじらず今年も嬉し親子四人の樂天地
○
大阪市　生田みのり女

四社の神殿はるかに見えて松の中なる大宮居
○
靜岡縣　大木みよ

ふじの裾野できたへた體寒さ位にやまけはせぬ

滑稽談

編輯局選



▲規定　實際にありし滑稽談もよし、所謂一口噺もよし、摸倣や有りふれた作は採らず、二十一字詰五行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章に限る、締切日は毎月十五日懸賞は乙種。

【二　等】　○辛抱致します　　播磨　たかす子

お隣りの、花嫁樣初めて私宅の風呂へ入りなすつた時丁度、私が裏へ水汲に參りましたら、何も云ふて居ないのに「どうかおかまい下さいますな、これ位なら辛抱致しますから」……。

【四　等】　○大切の物　　上毛碓氷郡磯部村登坂　もと子

親友の花子さんが居らしつて雨が降りましたので傘を貸して上げました、翌日妹の米さんが返しに參りました、段々近くなつて見ますとオヤまあ私共の傘をさして御自分のは大切層に小脇に抱へて居らつしやるのよ

【五　等】　○要點だけ　　鹿兒島市加治屋町百六十二番戸　山下豐子

物理の先生がね、あるかなきかの極くわずかなお髭を生やして御出だので或る生徒が問ひますのに「先生のお髭は少けないいてすね」

先生「へい私は要點だけをつかまへて居るのです」

○お發見　　若狹　津田汐汀

教師「皆さんがお客さんの前へお茶やお菓子を持つて行く時は何う云う樣にしますか」生徒「妾は持つて行く途中先づお發見をします」

○石　油　　信濃　犀波子

甲「君水油は菜種から搾ると云ふが石油は何からとるか知て居るかれ」

乙「そりや無論石からとるに違ひないさ」

○小包に足　　京都　島谷かずゑ

或日私は田舍からスッポンを小包郵便て送つて來たのを知らずに預つて置くの内に見へなくなつたので心配して居ますと夕方お隣の女中さんが此小包はお宅のではありませんか只今井戸端て水を飲んで居ましたと持て來られてまづ安心。

○破　約　　近江　道子女

令孃「貴郎は隨分武はかな御方てすれ、あれ程まで堅く婚を約束して置きながら、今になつてたちまち破約するのは！」紳士「左う御立腹ては痛み入ります私の心ては私より最些と宜い嬌さんを貴孃に御周旋いたしたいと思ひまする。」

○電話に敬禮　　愛媛　寺尾昇子

兵卒「中佐殿第一師團から電話がかゝりました」中佐「あゝよしよし」中佐は電話室に入る。○「あのれ馬五十頭此方へ廻してくれないか」中佐は横柄に「よしよしして君は誰かな」○「おれかおれは大谷だ」中佐は椅子を飛びのき「中將閣下てございましたか」と起立して敬禮した。

○檜さがし　　甲斐　矢壽子

姉「此中に何があるか探してごらん」妹「あたしどうしてもわからないの」下女は傍てクスクス笑つて居る。姉妹「ジヤ竹やにはわかつて」下女「まあお人の惡い是は女學生がご本を持つて居るのじやありませんか」とつんとすましたもの。



空中 海底 通信

一等 大震動

丹後加佐郡河守町字新　鹽見千代子

北風烈しい日、凧に乘つて飄然と空中に、舞ひ上りました、すると見え出したのは大理石の宮居、門の隙間から覗いて見ると、まぶしい程に輝いて、何萬年生きてゐるのかと思はるゝ樣な、白衣の男女が、愛と平和に熔けん許の宴會の席、思はず内に一足踏み込めば、あら不思議忽然起る大震動の響、邊は暗くなる。私はまろぶが如くに門外に出た。

大震動の意味が深い

二等 姫に仕へて

土佐吾南諸木　高橋白ばら

只今佐保姫につかへて雲の上にたゞよひ居り候姫君のみ手より絶えず下界にそゝぎ給ふ香ある粉、伺ひまつれば花の精にて候由、北に落ちては梅となり南に向いては櫻とにほふとかや、やがて白金殿の御歌會に連り名譽の月桂冠をいたゞきて歸るべく候、月淸き夜、白露しげきほとりに待ち居ませ。

美文の上乘

三等 海の都

青森市米町　村林やす子

私は平家がにが子供につかまつて、困つて居るのを助けてやりましたら御禮だと云つて海の都に連れて行つてくれました、安德帝の天皇で弟橘姫が攝政二位の尼の女官知盛の陸軍大臣廣瀨中佐の海軍大臣です、私は安德帝に御拜顔の榮を得たので、陸海いづれの都が御心安う思されますかと伺ひましたら、玉の御聲さわやかに「海が心安い」とのたまはれたので私は思はず淚にくれました、なほ中佐や尼からいろ／＼御話を承はりまして惜しい袂を、さしくる潮にふりはらひ陸地さして歸りました。

安德帝のみ言葉が本文中の珠玉

四等 銀河のほとりより

奈良縣吉野郡賀名生村　中富よしみ

たゞ今天の河畔に着しました、滔々と流れる河の水が一面にさんらんたる光を放つ、其の壯觀と、河畔の立派な宮殿から響く、織女と云ふ姫君が孤獨の淋しさを自ら慰める琴の調のきよらかさとは、先づ自分をして神樣になつた樣な心地させました。

ふと我にかへつて河の彼方を眺めますと、珠玉の光で飾られた星の家居は甍をならべ、はるかに月宮殿の嚴かなる姿は神々しき木立の間より見えて居ます。

無難の作

五等

黒鯛

駿河清水町
松永鍼吉方　松永しげ子

あまり歩いて疲れたので、錨があつたのを幸ひ早速腰を下した。頭の上でぼちよんと幽な音がしたから何だらうと目を据えると、小指程の白い物が静々と落下して來る、能く見ると釣針で、餌は鰕が一尾であつた、何か釣れるかと、暫時ぢつと見て居ると、右の手を掠めて大きな黒鯛が泳いで來て、ぱくりと餌を飲んだ、はつと思ふ間に黒鯛はゆうゆうと去つて、針は銀色に光つて居る

理窟を抜きにして見たゞけを叙したるは甚だ好し

秀逸

○山姫

靜岡　貞水

妾は霞の霧を吸ふて居る山姫であります、年の暮には北風が吹いて寒くてなりませぬが只今から仕度をして此迎信が女子文壇へ出る頃から、野には菫蒲公英蓮華を始め種々の美しい花を咲かせ、若草をそよ吹く風に靡かせて、山には桃

お孃樣



長門　中津江照子

類から櫻のたぐゐ、色々と奇麗な花を咲かせて、萬物の靈と仰しやる人樣を喜ばせてあげます、其時は女子文壇へ投書なさる孃樣達、詩や歌や文章に筆を染めて妾等の咲かせる花々を褒めて下さりませ。

○月の宮より

筑後　永松翠子

去年の秋の夜、雲がくれした輝子から、下界に春を作りにと天降りましたお姫樣に還歴手紙を託して來ました。

可いお月夜、讃美歌を唱つて三保の松原を徜徉ひてゐると、羽衣着られた女神樣がお出て、可い處につれて行きますと、五色の雲に乘せ玉ひ遥い〳〵此の月のお宮につれて來られましたすると立派な宮殿に導かれて多くの姫樣が非常に可愛がつて下さるので、最う下界には歸り度うありません。そして不思議なことには土が無く何處も水晶ばかりで水は雲が何處からか汲んで來まして下界よりよほど良うムいます。何卒御安心なすつて頂戴……。

月の宮殿の輝子より

下界の里の
御兩親樣

○母のそば

德島市　河里子

私はあのお月さまの所へ行けば屹度お母樣がゐらつしやると思ふて恐さも構はずづん〳〵行きますと恰度兎さんに逢ひましたもちつきに來たがいざよひてすから歸りだそうてす兎さんにくはしく道をたづねましてこひしいお母樣のおそばへ行く事が出來ました。

○開けたる龍宮

埼玉縣　もみぢ子

浦島が乘し龜に乘り海底に下れば海底電線と鐵道と有り鯛の汽鑵手、章魚の車掌、龍宮に着けば乙姫樣の㒒迎下さる姫は浦島に似たる幼兒を連給ふ龍宮は電氣眩く發電所の技師は電氣魚也歌舞伎座には章魚の柔軟體操、人魚のダンス、鮫の擊劍　鱶の柔術等あり巡査は海老、郵便配達

は飛魚、御園は十六箇有て蟹兵横行す駐河大使は鮭侯也時のたつを恐れ訣別を乞ば玉手函を賜はる恐る／＼明くれば今日は目出度き三月の節句なりけり。

○海底の仙島

紀伊　西よね子

熊野港を解纜して妾は愈海底深く進みました時とある孤島を發見しまして其島へ上陸しましたすると人々は悦んで妾を迎へてくれました、そして親切なことは妾を同胞の樣にしてくれるものですから數日其所に遊んで居ました、其人々は不思議にも世界の言葉に通じて居まして、其人の話に依ると、この島は四季が島と云ふて春夏秋冬は常に定つて居ますと云ふので、妾は夢の樣な氣がしましたが、其夏と教へられた所へ往きますと、不思議にも蟬は八釜しく鳴いて居る、次の場所には秋風が吹いて紅葉が散つて居るかと思ふと、向うの場所では櫻がひら／＼と散つて居た、亦春の所は百花咲いて、其間に蝶舞ひ鳥歌ふて居ました、そして此島の人々は親切で正直で罪を犯す者もなければ法律もない奇妙な孤島であります。

○無線電話

廣島　花霞子

ヒカツヒカツもし／＼地球さん妾は鼠姫樣の侍女て菫と申しますが今夜海底の龍宮城に大宴會が有のて、是非行き度から日暮迄に席空縦を用意して置て下さい子「ハイ承知仕ました」さわ姫樣參りましよう用意は出來ました、あら御覽遊ばせ幽靈樣が迎へに參りましたよあれ彼處に見えるのが龍宮城ですエ乙姫樣の兄樣が何遊ばしたのまあそうおせき遊ばさなくつても行けばわかりますわ。

○龍宮城にて

磐城　山下修子

龍宮城に着き先づ東戸を開き見るに春の景色と悦ふ梅櫻咲き亂れ柳糸の風に靡き霞の中より黃鳥の音ゝ軒近く何れの梢も花盛り南は夏と見え池の蓮は露かけて汀涼しき邊に水鳥多く遊び居り木々の梢も茂り夕方すぐる蟬聞より聲立て過る時鳥啼音に夏と知られぬ西は秋にて四方の梢も紅葉して霧立ち圍むる彼方の野に聲いとすごき鹿の鳴きつゝ縫が露を分け行きぬ北は冬の景色にて四方の梢も冬枯れて山は白妙の雪に埋られ谷よりは心細くも炭釜の烟にしるき煙が幾冬と知らする景色かな之なん龍宮城の常の數。

○雷邸入門

愛知　舞鶴子

第一信。妾事昨夜出奔致し直に雷公の邸を訪ひて門下に入り、師弟の宴を磐梯山の噴火口に於て催し候。愈々妾が天地に活動す可き時季は到來致し候。

第二信。先生より太鼓打つ役仰せつけられ候間昨日午後四時より淺間山の中天に於て腕の揮ふ程縦に撥叩きければ、人樣は縮み上がられ候事と思はれ候。誠に笑止の至りに御座候。

第三信。三河地方に參りて野中に落ちし處、運惡く人を殺し候あいだ後白浪と逃げ戻り候。今頃は大騷ぎの事と存ぜられ候。

○空中電信

上毛　青木もり子

太平洋を橫斷する海底電線は甚だ多く近時アメリカの計畫せるパナマ運河が開鑿されたら太西太平兩洋は勿論東西南北よりの空中通信の者を始めとして交通益々繁くなるでせう其時は吾が日本は其の中心てすから郵便電信の交換局です其時こそ吾が女子文壇社が第一番に主任となつて通信事務を取るのも間近い事でせう又空中の事務を取るものは無線電信を具へて八方の恒星やお月樣の世界の山や川人や花ご殿などある事なら何かの便りがありませうそれを一々紙上に掲げ女子文壇の通信の異常に出る事萬々たるを知らしてやりたい。

○雪の扇

信濃　花園守

天つ樂園では今日しも花の眞盛りを園遊會が催された。招待された一人の青年、之れぞ、月姫が寵妹、星子姫が戀人なので。築山の陰、亭に休らへながら語らふ二人、姫は少さき胸に秘めた想ひのたけを打ちあけたのである。が、青年は下界で味ふた悲慘な戀を思ふて、頑として應じなかつた。と姫は怨の舞扇を取つてと立たれたが？　黑雲起り、風荒れて落花紛々……之ぞ下界に多くの人をなやませた大吹雪である。

○一筆

常陸　鶴野井紅玉

先日は御見送被下難有御禮申上候海中には魚車數多有之便利にて候途中浦島仙人御出迎被下

鯛兵卒魚巡査の護衛にてまはりの状態めつゝ無事龍宮へつき申候乙姫は玄關に出迎はれ色々と御辭儀けり早速宴會場へ案内され種々御馳走を致され候來會者は無慮二萬餘にて仙人各大臣文武官にて種々の餘興を以て閉會致候明日は蜃氣樓等案内下さる筈に候先は。

○彗星の失戀

牛込　しら　うめ

妾は去年の夏休みに、星宮へ遊びに行きましたら、丁度彗星様もお見えになりました。妾は今迄彗星様は、恐しい男星と思つて居ましたが大違ひ、それはもうお優しい女星。夫は何んでも結婚して間もなく、戰爭に出征て、名譽の戰死をなされたのですつて、それからは精神が變つて、今では丈なす星髪を振り亂し、下界に戰爭がある度に、若しや夫君はおはさぬかしらつてお尋ねなさるんですつて、それは隨分お可哀想なのよ。

○能く見える

丹波　室谷ひさ子

貴女旅行なすつたつて何處へ入らしつたの」「妾ねお月様になつて空中を旅行しましたの」「マアー御笑談斗り」「イヽエ實際よマア聞て頂戴アノネ御月様が少しお風を召したから妾が代りに出ましたのそして下界を見渡すと夫は／＼色々の事が見へるのよ豁所で下女が座眠りをしてるのや笑い合嬢の琴の彈や若き男女の戀を語るのやよく見えてよ貴女も道雄様と御一所に女子文壇を讀んで入らしたでしよう」「オヤ／＼ひどいのね」「ハアすつかり拜見してよまだ／＼深山見たけれど此位でもうよしませうよ。」

○怖しい

近江　竹村　芳枝

名も知れぬ魚が處々にゐるし實に珍らしい世界です大きな珊瑚の森やかいめんの山があつて森には海の神様が居給ふそうて諸魚が集つて幸福な啓示を仰いでゐるし山の麓には美くしい魚嬢様が戀物語をしてゐますけれども私は何だか怖しい様な氣がしまして……此時銀砂の上に金鵄の様な者が落ちてゐるのに目が附いたのでそつと拾ひ上げたらそれではなくて白骨でした呼此の骨！日露戰爭の時藻屑と化した廣瀬様の骨がこゝ迄流れて來たのでせうか。

家路



青森　やす子

○海底めぐり

仙臺市　相澤　張子

私は海底に旅行した事がございます、時は丁度入月て皆様が暑い／＼とて避暑をなすつた頃私は涼しい海底に更なしのぎました、初めは難を通る船におどろいたり宿の珊瑚屋をわすれたり電線につきあたつたりしましたが地中海を通る時は早や地上を歩むより樂になり色々學問上の話を島の女神にきゝながら無事に日本に歸りました。

○空の文使

上野　大沼　染子

妾が織姫の姫の文使として、あの遠い遠い星宮迄參りました其間のお便り申上ます、出立したのは夏の最中でありましたから隨分難儀も致しました、途中迄ゆくと恐ろしい風の神は妾の袂を捕へて肌へに秘めた御文今や奪はんとした時に、何神様か知りませんが、霞の帶りを引張つて下さつたので、危い處を免れました、それから少しゆくと、何だかごと／＼天界の人の聲とも思へないさゞめきが聞えるので、心配して行くと、これぞ下界に名高い富士の高嶺に登つて來る人が六根清淨を唱へる聲でありました。

○日の御殿

神奈川　木村　はる

私斯う思ひますのお日様は必とからすて御殿が出來て居て昔からの名高い人は皆集つて居らしつて出來る丈の御威光をお發し遊ばし我が國をお守り下すつて其守られた中の賤い人が御殿へ行つて其上光をそへて守つて下さるので旭の昇るが如く我國は盛へお月様は日と同様で只お姫様丈の遊びてお居は侍女よく尾を引いて流れる星は善をせず下界に禍を與へる罰を受けて清い天には汚らしくてお月様に追ひ出されるとおもへます

學校生活

○東の御空

鹿兒島市　露萩子

學術技藝共他の公私立の學校に劣らぬのですけれ共、私立の口惜しさは御眞影が御座いませぬ、それて去る天長節には、金波閃々たる錦港の波打際に一同整列して、紫雲たなびく東天に向ひ、嚴肅に御祝詞申上げました、折柄祝砲が前の櫻岳を震はして何とも言へない心地よさを感じました。

（入賞圖書切符金七十錢）

○遲刻

伊豫國宇摩郡關川村字井上　井上いち子

私の通つて居ます學校の道程は一里半もありますので、折々遲刻する事があります、もう學校へは五六丁になると學校はまるみへになるのです、それていつも間に合ふ時は瞭子一ぱいあけはなして居りますが、皆締め切つて何となく靜か氣な時は遲刻てゐります、すると直ぐ心細く成て來ます、或時は遲く成つて大急ぎて歩いて居ますと向ふから小使は郵便局の方へ來よる事があります、其時には二十分か二十五分かは必ず遲刻して居ます。

（入賞圖書切符金五十錢）

○花壇

下谷　桝崎佐喜子

私の學校は神田にあります。裏の方に廣い美くしい、花壇があつて、一級一坪づゝ、春夏秋冬きそつて、美くしい花が咲きます。て生徒は競爭して、やれ西洋花それ何と、珍らしい物を持つて來ては植ゑます。夏休み後九月一日學校へ行くと誠に驚くのてす。大きな大きな、ひまはりが敎室の窓をのぞいてゐるのてす。それから米國の鳩や日本の鳩、小鳥の珍らしいのがたくさんゐます。來客方は之を見ていつも賞められるので、それが私共にとつては實に嬉しさが身にしみるのてす。

○田舍みち

遠江　原木菊子

私等が行く學校は一里半ばかありて、其の道を毎日往復致します、その途中には繁華な所があるかと思へば、また田舍の困窮極まつて、屋根の半分むけた家など様々てす。一ッ氣に付くのは、田舍とは雖も進歩の一ッ、以前の大洪水て堤防が流れ流されたそれの普請に鐵道を引き、トロコを付け是れにて土或はガラス等を運送致しますよ。

○オルガン

越後　廣子

妾の村には小さな尋常小學校があります生徒と申したら皆寄せてもたつた五十人許りこゝを卒業しますと町の學校へ行きます私共の此學校に居りました時より今は餘程開けましたそれに只今の敎員が熱心な人て生徒も元より成績が大層よく成りました今年はオルガンを取り寄せるといふ話て生徒は大喜びてあります。

○わが樂園

鹿兒島市　智滿子

飛び立つ思て、故里を出て、初めて出校しました時は何だか淋しい所てしたが、今ては私等ノ第一の樂園となりました。先生は、親切な方ばかり、校長は、何だか恐いようてすし、受持の先生は、私共を我子の様に懇に敎へて下さいます、今は各學校の入學期も近よりました、豫備校に入つて居る私等は一生懸命勉强します、てすから縣下て大變評判がよう御座ります。

○私の母校

伊勢關　福島初子

母校は町の眞中にありまして街路から七八間北へ入つて居ります生徒は百六十七人ありまして皆よく先生の敎を守ります尙出席者多數の級へは立派ながクをいたゞく規則なので雪の降る日も風のふく日も一年一日の如く勉め勵んて居ります。

『學校生活』募集

▲諸孃が毎月通はれる學校の有様なら何でもよろしい▲學校全體の近況でも又は一部の近狀でも▲學校の評判、特色、學科、敎師、生徒、或は風景なり建築なり凡て學校と關係したこと▲又諸孃が御自分達と學校との關係も面白い▲原稿は十行内外▲佳作には賞品を呈す

誌友倶樂部の擴張

我が誌友倶樂部の毎號盛んになつて行くことは天下の愛讀諸孃が御存知の通りでございますが、益々是を擴張して諸孃の爲に精神上にも生活上にも多くの便宜を與えたいと思ひます、擴張と云つても別に多くの欄を設けるのではありませんが誌友倶樂部全體を開放して諸孃が自由自在に御交際をひろめられたいと望むのです假に諸孃の交際とか編物交換とか欄をわけてはありますが、此の欄目にかゝはらず、廣く、一般に、諸孃の言いたいこと、望むことなど幾許ても誌友倶樂部の中に送つて頂きたい、要するに誌友倶樂部ばかりは諸孃の共同椅子です、誰が腰を掛けても異論はない、遠慮も入らない、之れを善用して諸孃の益となることが少しても有りましたら記者は滿足します、文章の上手下手も此處では餘り關係がない、何の手數もかゝらない、只思ふことを書いてさへ送られたら載せると云ふのですから散歩に出るより無造作てす、皆さん此んな好い遊び場所は外に無いてはありませんか、少しもためらはず盛んにお出て下さい。

紹介欄（新設）

▲紹介欄は其名の通り何でも紹介します▲紹介欄には信用を置いて頂きたい諸孃も誠實に本欄を善用し記者も誠實に本欄を擔任したいと思ひます▲紹介欄には例へば諸孃が遊學の便宜、就職の應答、職業の欲しいと思ふ人、女子を使ひたいと思ふ人等、何れの便宜ても計ります、貸間の紹介、小間使の紹介、女書生の紹介抔も本欄で扱ひます▲本欄へ出す分に限り住所姓名を紙上だけは隱しても差支えありませぬ、記者までには必ず住所本名を知らせること▲本欄へ出すには少しも手數料も何も入りませんけれど、本欄の記事に就いて問合せある方は三錢の郵便切手を入れて下さるか又は往復ハガキで問合せて下さい▲原稿は半紙半枚位に書いて紹介欄と云ふ文字を端へ書き添えて下さい。



読友倶樂部

黒髪ながくやはらかき、女ごゝろを誰か知る、男の語る言の葉を、まことゝ思ふことなかれ。

藤村

文學顧問

●注意● 文學顧問欄は本月から誌友倶樂部に合併しました、誌友倶樂部をにぎやかにして變化あらしめやうと思ふ爲てす なほどし〱お尋ね下さい。（記者）

問　記者樣へ一寸お伺ひ申し上げます第三卷十二號の本誌の和歌當選五等工藤以津樣のお作に「ちやふかき朝戸によりて白百合のさゝやききくかうつゝなの人」とありましたがそのうつゝなの人と云ふのゝ理由を存じませんで非常に困つて居りますからお敎示下さいませ（藍海、科實光子）

答　うつゝなの人とはうつゝなき人で、夢のやうなことを想ふて居る人と云ふことです

問　太閤記光秀が母の言葉に「主に背かず親に仕へ仁義忠孝の道さへ立つはもつさう飯の切米も百萬石にまさるぞや」とあります「もつさう飯の切米」の意味御敎へ下さいまし（南海傀儡師女史）

答　もつさう飯とは佛樣に具へる飯器をもつさ

うと云ふ處から來たらしく、一飯何程と極つた御飯のことてせう、切米は昔の武士が祿米を貰ふのに金にかへて貰うて何程と是も極りのある事を言ふ、つまりあてがはれたる僅のきまりきつた扶持米て生活して居ても百萬石に勝ると云ふ意

問　詩集などに『糸遊』と言ふ言葉がありますが其意味をお敎へ下さい（茂登子）

答　糸遊とは又『かげろふ』とも言ふ、春さきの暖い日光を受けて、空低く眼さきにキラ〳〵とちらつく糸のやうな光を指して言ふ言葉てす、眼には見えても手には取られぬもの丶譬などにも引く

問　齋藤弔花先生の只今のお住所は何處てせうか（田名村千能子）

答　東京日日新聞社に尋れて御覧なさい

問　蒲原有明先生の詩集『春鳥集』、上田敏先生譯『海潮音』、薄田泣菫先生の『ゆく春』、以上詩集の價と賣捌所を敎へて下さい（宮地すみ）

答　『春鳥集』（七十錢）『海潮音』（一圓）以上本鄕區東片町本鄕書院發兌『ゆく春』は發行元に於ても品切てす

問　與謝野晶子さんのお宅は何處てす（富原紫紘子）

答　東京府下千駄谷町五百四十九番地

問　女子師範の外に官費の女學校ありや（淀橋にて松野緑子）

答　なし

問　下田歌子先生は學習院退引の後は千駄ケ谷とかにお移りになつたさうてすが千駄谷とは何の邊てすか（楓葉子）

答　下田先生のお住居は千駄谷字原宿百七十六番地てす、青山行きの電車に乘り青山四丁目て降り右へ曲つて五六町てす

問　和歌と新派和歌とは何う云ふ處がちがふのてすか（信子）

答　新派和歌は明治になつて起つた歌風て、單に和歌と言つてゐるのは以前から古くある和歌のことてす、併し新派和歌も和歌にちがひありませんから和歌と言つてもよいのてすが、習慣上さうなつてしまつたのてす、これからは追々新派が盛んになるのてせうからこんな區別はいつまても置きたくないのてす、此外同じ事を問はれた二三の方もありますが答は同斷てす、なほ新舊兩派を詳しく說明することは本欄ては不可能てす

誌友と記者

○記者樣及諸姉樣無事てすかお伺ひ申上ます、さて本誌にお伽噺を募集せられたのは誠に宜しい事と思ひます、お伽噺は第一家庭の敎訓となるものてすから女子には非常に宜しい、第二には面白くあります（岡山邑久郡豐村五明内田なつ江）（記者曰、何うか面白いのをお作り下さい）○記者樣誌友の諸姉樣はどれだけばかりいらつしやいますか又布哇にも外に澤山居られますかもし居られぬとすればちとこれから誌友を募りませうどうぞ知らせて頂戴（在布哇、上木井定子）（記者曰、誌友は幾萬あるか分りません、布哇にもありませう、なほお心あたりがあつたら誌友におすゝめ下さい）○記者閣下妾は元來小說好きて學校にをる時から雑誌や新聞の短篇物を好んで見ました而して妾も下手の横好きて今まで四五十篇も作りましたが投稿するのは今回初てすが幸ひ掲載下さるならばどし〳〵寄稿致しましよ尙ほ妾は小さな字が下手て困りますが最も容易にかく方法と多少筆も撰ばねばならんてしようが其の方法と筆の種類又習字の良手本あれば敎えて下さい（千葉、北田豐子）（記者曰、小說好きはよろしいが字の下手なのを直す方法と言つた處て、習字をおやりなさいと云ふ外はありません、別に細字の好い手本に心當りはありませんが、上手に書くと云ふことより鄭寧に明瞭に書くと云ふことが第一てす）○私は永らく病氣てありました故醫師から書見を止められて居ましたが全快しましたから本年より本誌の愛讀者になりたう思ひます如何にしたら愛讀者となれますか規則がありましたら固く守りますから御世話ながら誌友倶樂部欄て御知らせを願ます（名古屋市熱田新宮坂町ふく子）（記者曰、愛讀者たるに規則はありません、本誌を求めて繼續愛讀して下されば愛讀者てす）

誌友の交際

○どなたてもかまいませんが繪畫を研究愛好さるる方がありますなら是非ゑはがき又は繪畫紙へ描いて御取換へ下さい必ず御返事致します（横濱市眞金町二丁目七番地桑原白龍）○誌友の諸姉樣何卒美しい繪葉書や玉章の御交換をして下さい（京都新京極四條上ル櫻軒方上田多計路）○妾今は盛岡女學校の本科三年のものてすが今度家内か八戸地方に移りま

すので今迄三年も通學致しました學校を逆くはなればなりません。それに付きまして八戸の女學校に入學致すと存じますがたやすく入學を許して下さるでせうか皆様の中に八戸地方で、女學校の事情にあかるいお方は何卒々々御知せ下さい(盛岡市馬場小路七番地大澤孝子)○今年も相かはらず御交換ねがひます、きつと御返事をだしますからね(京都四條寺町弥井方中島花子)○私はしばらく御交換を止めて居りましたがどうぞ又繪葉書やうつしゑの御交換をして頂戴な(岩代國福島市陣場六十三番地大久保方岡野清子)○早速皆様とお別れ致さればならぬ事となりましたからエハガキや玉章下さつた御方様に厚く御禮申上ます(京都府相樂郡高山村森西歌子)○妾は音樂好きですから誌兄姉様方の内で新曲譜御存じの方は御敎へ下さいませんか御禮は必ず致します(奈良市東包永町植石内武林風子)○妾はこの度一身上に大變化があつてこの懐しきしたはしき女子文壇にお別れせなければならないのです記者様私は實にかなしいのですがこれも運命で仕方が有りません又女子文壇にお目にかゝれる日を待つより外に仕様がありません御手紙下さつた皆々様あつく御禮申上ますこれで御別れ致します(埼玉縣入間郡川越松江町木下深子)○倘、妾は繪はがき、玉章や編物の交換が大好なの、だから心あるお方は何卒おとりかえつこいたしましようね、さよなら。(千葉縣長生郡一松村字小關石井富美子)○四方の御姉上様不肖の私にさへ御手紙や繪はがき下さいまして有難うございました、又變らず御交際して給へ。(下谷區入谷町二四二宇津木様方燕雨子)○私は今家事上の都合にて或る處に事務員となり苦學なし居るまことにおはれなる者に御座ります御寫眞繪葉書の御交換を偏に御願ひ申になん御情深き姉上に(東京本郷區本郷五ノ六保延清次郎方眞女子)○私は鬼渓山の奥にかすかに日をおくつてる淺學もので兄弟もなく友達もありませんから皆様に御交際願ひます(君津湊町、勝作子)○第一號拜讀、内容の目新しいの何より嬉しいです、各欄選者の御肖像など中々ですね、規定もあのやうにして戴くと大層便利です、表紙の繪は奇麗でうれしいけれど：ま少し考へて戴きたいわね、小栗風葉先生の小說選任とはほんとにうれし、冒頭のお顔を拜して勿躰ないけれどお父さんと呼んで見ました(南湖松原ふん子)○妾は此の度四四番吉田方へ寓居しましたから皆さんよろしく(福井縣大野町西四番吉田方小川よし子)○諸姉様へ御願ひ申します御交際して下さい玉章や繪葉書の御交換も御願ひ申します(岐阜縣武儀郡下牧村吉田美知)○情深いお姉さん方、妾かなしうてたまりませんわ　それは此頃、お母様に別れました事なのさびしうて／＼涙がかはく時がないのよ、こんな時、お姉さんたちの、なつかしいお手紙を頂いたら、どんなに、うれしいか知りませんわ。(新潟縣新潟市西仲町永井方大淵貞子)○誌友の皆様何卒姉妹と御思召し下さつて末遠く御交際を御願致します(高岡市御馬出町五十九番地桃川謙子)○私は花が大好きですから何に限らず草花の種を給はらん事を乞ふ、繪畫等も賜られん事御禮は必ず仕ります(大分縣中津町高畑やま川咲智)○十六七才の御方で永しへに御交り下さる御方がありますればどうか御願ひ申します又姉様方のおよみ古しの小說おありなさらば御送り下さい私よりは小說又は栞や肘つき寫眞出にて御禮致します(讃岐多度津東濱町香川政子)○山里の事とて樂しきこともなく女子文壇を無二の友として居ります姉上様方よ妹と思召し繪葉書や玉章の交換を願ひます(岩代國安達郡和木澤村和田永作方根本直江)○シンパシーにとめる誌友の皆様方よ、妾は奥羽の雪深き山里に病魔をかゝへて悲しんで居るはかないものよされどうれしき皆様のみことの葉をたのしみに病床の中に指折りかぞえてまつて居ますからなぐさめて下さい(宮城縣栗原郡金田村上おぼろや弓月君子)○諸嬢よ、妾は玉數の清き田舍に住む者よ、同じ心の詩人の君よ繪葉書や玉章の交換を永久に願ひます(茨城縣稻敷郡岡田村大字下根永井誠子)○何卒玉章やエハガキで永久に御交換を願ひます私は新附の交換も願ひます(栃木縣宇都宮市材木町小川とよ子)○佐賀市に住みなし給ふ御方様へ一筆示上遊らせ候去年の彌生姿初めて御地をおとづれ候てより轉た懐かしさに堪やらずあはれ心有らん人よとこしなへに妾が親敷友と成り給らずや(長崎縣對馬國嚴原久田道町倉成綱作方春暉子)○神奈川縣内の小學校に奉職してゐらつしやる方は不束ながら私も教員志望者なのですがまだやつと小學を卒へた計りですどうぞ手續などの事もお敎へ下さいな(神奈川縣都筑郡岡村今宿四七四、鈴木りの子)○玉章は云に及ばず和歌或は俳句など白い葉書に書いて送つて下されきつと御禮は致します(土佐國安藝郡土居村土居森田

林子）○みなさんよ、私も盟友になりましたから、宜ろしく御交際下さい（上總國茂原町　盟栗區鹿田みどり子）○誌友の皆様私は谷間に住んで居て何も知らないものですが初めてお仲間入り致します　どうぞ永久に御交際をねがひます（愛知縣額田郡河合村森梨緑ヶ賀かつ様方秋月女）○大阪の紫蝶子様とやら先日は結構なる御礼玉章有難う御住所が御座います（大阪市西區靱北通二丁目二十三番地沖野英子）○お姉様方お初にお目見得致します　何卒宜しく御願申上ますそして繪葉書や寫し繪の交換を願ます誓つてお返詞いたします（靜岡縣小笠郡掛川ステーション前內田屋方　杉山富佐子）○今迄御厚情に預りました諸姉上方よ私事都合により下名より退學する事になりましたから此處に御手紙下さい（京橋區月島二號地岸本様別莊內　田村ゆかり子）○誌友の皆様にこの貴重な交際欄を拜借して一言申し上げます　皆様の中には繪葉書交換に男子から來たとか男子には返事をやらないとかいつて非常に男子を嫌はれますが男子の中には本誌を愛讀なさる方もありませうし又匿名偽名にて投稿なさる方もありませうからとても男子を排斥する事は出來んでせうと思ひますそしてあながち男子の方は皆惡い方ばかりでもないでせうと思ひます　神聖な交際又は眞面目な男子とならば交際は差支へないでせうと思ひます　皆さんどう思しめしてか私は男子の肩もちをした譯じやありませんから惡く取つて下さるなよ失禮々々（尾張國に住むクリスチャンの小野丹彩子）○誌友の姉様よ妾は草深き山奥で自然を友として日を送て居る不束者なのよ繪葉書玉章の交換を

御寫眞を送りて下さつた方には奈良名所一組に妾の見ぐるしき寫眞を添へて早速御返禮致します（京都府相樂郡西和東村字白栖　松田種次郎方松田操子）○敬愛なる諸嬢様どうぞお心安く御交際を垂れ玉へ（紀伊田邊町大字江川町　室井靜三內白蓮女）○誌友の姉様私の樣な拙ないものですが何卒妹と御思召なさつて今後久しうあたたかい交際をして下さい　御願ひいたします（高田市御馬出町　五九棚川露子）○妾姉妹といつては一人もありませんのですから猶は諸嬢が御なつかしいですわ（大坂市西區　松島町貳丁目川村寅子）○誌友の姉上よ私は風荒き北海の空に空しく日を送つて居る者ですがどうぞ永久に御交り下さらんことを御ねがひしてよ（北海道早來村陽増多美子）○親愛なる諸姉様よ繪葉書玉章の御交際を願ひます　亦御寫眞の御交換なども（栃木縣河內郡姿川村下欠下字貫田鐵子）○諸姉様の內一度ぎりでなく末永く交際して下さるお情け深き姉様よ繪葉書玉章の御交換を願ひ升（丹後國宮津町字金屋谷二〇小西綾子）○親愛なる讀者諸姉よ妾は此九月に最も仲の良い一人の御友達に死に別れました悲い境に居る者で御座います故何卒繪端書寫眞等御送り下さい（府下北豐島郡瀧野川　千九百三十一成瀨香保留）○私は信濃國の田舍に住む不束者でありますが今度本誌の愛讀者になりましたから満天下の諸姉様方よ何卒御交際を御願申します（信濃國東筑摩郡波多村五九八四淺田いと子）○諸嬢の中で水彩畫御研究の方で御自筆の水彩繪葉書を御恵賜下された御方には極くまづいですが私ので御返禮致します（羽前南置賜郡廣幡村小山田清野きよを）○私は南總鬼涙山の極々奥で別に兄弟もなく之れと云ふ友達も一人もなく只々六十あまりのおばあさんと其日を漸くすごし又文壇を讀んで樂しんで居るから姉上様方以後何卒御見捨なく御交際を願ひます（君津郡加藤、鶴織勝子）○誌友の御姉様妾は此度左記の處へ參りましたが前にかはらず御交際を願ます（長門厚狹郡宇部東新川邸様方藤井讓子）○妾は羽後の片山里に住む不束者です　何卒繪葉書で玉章で親しくお交りをして頂戴ね（羽後國仙北郡土川村　千葉榮津子）○皆様よ何卒不肖な私に御玉章御めぐみ下さいまし　私は字が下手ですから其御つもりて下さいまし（東京小石川區餌差町三拾四番地　波多野方宗崎秀子）○常陸愛讀者の姉君たちよ私も同國よ何卒　御見知りあつて英文又は香り床しき御玉章恵み給へ（築地女子語學校內　田村波津子）○私は田舍に住む一少女で御座います寫眞玉章繪葉書の交換を願ふ猶は茨城縣の女學生諸嬢には願ます（茨城縣新治郡　田余村大字上玉里須崎綾子）○私も近來本誌の愛讀者となりました寫眞玉章　繪葉書交換を願ふ（常陸國新治郡田余村大字上玉里橋本ふく子）○諸姉様よ自作和歌や俳句の色紙短册の御交換を偏に希ひます亦繪葉書も切に（岡山縣川上郡大賀村　仁賀廣江落子）○嗚呼なつかしき諸姉様方よ、妾は九、本州の果てなる長州の國玄海灘に面したる海岸に獨り淋しく朝夕日を送つてをる一少女ですよ、御交際を願ひます（山口縣豐浦郡粟山村一ノ宮有田白萩）○皆様おひさしぶりでございました私は八月頃より病氣で當地大學病院へ入院して居ましたが御陰様で先日退院いたしましたもし

しろす中にお手紙を下さつた方がございましたら御知らせ下さい妾は大變面白い人ですよ★、★、これは失禮（京都市聖護院町中河原町岸村文平方岸村季子）

圖書換讀

○圖書の御交換を何書を問はずあります先着七名に限り妾のみにくき寫眞を（靜岡縣駿東郡北郷村大御神、天野英子）○漫さんの手許に土佐日記源氏物語、又は寫眞器械御ゆづり下さる御方には、月琴か『バイオリン』（鈴木製第九號品附屬品もみんなついてゐます）『ハーモニカ』か御望の品をきつと御送りします（德島縣名東郡國府村笠原靜子）○誌友の姉上様よ多情多恨又は思出之記を御持の御方は妾の篩子又は女學生と御交換を願ひます（熊本市上通五丁目三二岩松德子）○皆様の内に夏子高斎提右衛門美辭寶典不如歸寫眞を御送り下さいませぬか御禮には源氏物語言海作歌自在己が罪仇浪等を御送し申します（京都府相樂郡東和束村原山藤澤喜助方宮前照子）○私の手許に少女界十餘册不用のが御座いますから皆様の内少女世界編物御持ちの御方は御交換下さい（常陸土浦川口町高橋しん子）○諸嬢の中で『枕頭山水、芭蕉全集、ひげ男、國文軌範、檜木笠、湯島詣、ふところ子（眉山、鏡花）』をお持ちの方は私の『日光、ほとゝぎす、脚本金色夜叉、中央公論、俳句集、中學生、文藝倶樂部、女學世界、寫眞畫報、其他數種』とお交換を願ひます（千葉縣夷隅郡國吉町刈谷今井なをし）○御手許に明歌游艶の栞か須磨の曲かゞ御座いましたなら御賜り下さいませんか御禮には六段の曲信濃の宮、讃岐の院、弱の琴、信濃の落秋、杜鵑の内どれでもさし上げます（信濃國上水內郡大豆島村市川野治郎方青木茂子）○御手許に實用刺繍術、實用造花術指南、日本女禮式大全、女子普通禮式、新撰小學女禮式、生花嗜等の御不用のが御座いましたら二週間程御かし下さいそれから妾の手許にも女子美文の資料續美文の資料造花獨けいこ和洋諸禮三體千字茶の湯の手ほどき女子學術訓蒙一から一八迄等ありますから御手紙で御申越になれば送ります（愛知縣幡豆郡寺津村四一八齋藤光子）○犬うつ浪、女夫波、破戒、無花果、コブシ御持合せの方は私の家庭小說、濱子、斷腸花、月に立つ影に美しき繪はがき添へますから御取りかへ下さいませんか（靜岡縣駿東郡御殿場齋藤しま子）○私に蛙齋の小說小れこ、烏水の不二山不如歸の欣喜朗一口ばなしなど不用になつて居りますから相當の物と御交換へ御願ひ申上げます（福岡縣早良郡入部村西野しほ子）○妾の許に紅葉全集吾が猫である、戀無情、颶風戀風、日出島、情的大革命、不如歸、いひなづけ、ABC組合、草枕、理科辭典、作文辭典外不用になつて居りますから篩子、夏子、富美子夫人、伯爵夫人、破戒、青春、多情多恨等交換致します（千葉縣夷隅郡大多喜町船子押日屋方新井くに子）○私は女學世界、薩摩琵琶歌、藤村操歌、小笠原女禮式等ありますからエハがき花菜不如歸歌、いろ〳〵、女夫波等おもちの方は何卒御交換か御願いたします（千葉縣長生郡茂原町森田冬美子）○皆様の内で吉川弘文館發行の小野鵞堂先生のいろは帖及消息の御手本持つて居らつしやる御方はなくつて、妾の持ち居る日本女禮式、編物と刺繍、婦女子之本分、理想の母何れにても諸姉様の御望みの本と御交換を願たう御座います（羽後小鹿郡沼館町本町二十七泉川賢子）○皆様のうちでお伽ばなし『初航海』『絶島漂流記』『世界冒險譚』御不用の方は私の女學世界、婦人世界、女子文壇と御交換を願ひます（大連市磐城町八十三號地小泉商店方林民子）○皆様のうちでオルガンでもバイオリンでも宜しう御座いますから面白い新しい曲を御作知の方は御敎へあそばして下さいそれから落合直文先生の中等國文讀本全部宇治拾遺方丈記等御持參の方は御ゆづり下さいませんか（兵庫縣明石四中の町白旗清子）妾は日本文學全書の第二編、己が罪上中下の三部、琵琶歌集、博文館の美文辭書などの新らしい不用書籍が御座いますが交換御望みの方々は下名まで御申込なされませ（近江國長濱錦町瀬谷いし子）○天下のお嬢様方よ私には博文館發行の文藝倶樂部増刊ふた昔、女學世界、大平洋其他澤山有升から葉書にて申込ば皆様に送升（函館榮町一三五村田とみ子）○皆々様のお内で晶子先生のみだれ髮、毒草、小扇、戀衣、舞姫、夢の華お持ちのお方は私の明星、文庫、日本と日本人、ムラサキ、女學雜誌、女學世界、女子文壇、せり籠、埋れ木、金帆、等とおとりかへ下さいませ。お望みの方は（松山市西堀端文明堂御中にてと御申こみ下さいわかつき）○諸姉上様私は片田舎に住て居る小說ずきですしかし求めるのが困難ですから大變困つて居るのですが皆様私の內に田舎かゞみ、照葉狂言、紫被婦、怪傑奇賢、電力艦隊、榊秀男、歐

青心中、國本金色夜叉、かたえくぼ、小猫、二葉松、いざさらば、新小説・うたゝね、徒然草講義、千山萬水、遠足の友、美文自在、學生訓二册、青年訓、百字文二册、明治才媛文集二册、金帆、ざふきばやし、其外新小説文藝倶樂部百册ばかり不用書ありますから 皆様の内にて己が罪全部大打浪三册コブシ三部緣不緣嘘無情麗子夫人錦子 百合子乙女の操青春金色夜叉等御持の方は御送り下さいませんか（羽前最上郡新庄町 金澤町長東堂内長南日出子）○皆様のうちで女夫星、町女房、母の心、小猫、不如歸、奴島田いづれにても御持ちの方は私の多情多恨、にせ紫上下、新學士、新夫人、いさゝ川、戀と戀、血の涙、煩悶、己が罪などゝ御交換下さいませぬか 又御望なれば當地名產箱根細工物で御返禮いたします（神奈川縣足柄下郡箱根塔の澤 士屋泣影）○皆さん私の手元に、乙女の操、天打つ浪、幻影、極樂村、雲中梅、花問答、文藝倶樂部、新小説、健全、秋の日、千草の錦、明治俳句、都々逸一千題、明治新俳句集、天地有情、家庭辭書、新俳句俳誌ほとゝぎす、高等艶麗文集、百字文の栞、美文の資料、家庭文藝、中學文壇、新聲、新潮、其他秋の下露、新女房、等があり升 皆さんの内に己が罪全部、青春、女男波、にせ紫、伯爵夫人、不如歸、多情多恨、金色夜叉、漢和大辭林、紅葉全集、夏子、濱子、旅子、麗子夫人、無果花、隨想錄、踏雁の薫、造花術新書、造花具一組、水彩畫手引を以て申込んで下さい（安藝甲立 局區内深瀨笑岡しず子）○どなたか平家物語と私の大鏡水鏡と御交換下さいませんか、尚は玉むしの極く新しい奇麗なのがありますから 帝國文庫の八犬傳か三國志、赤穗復讐全集水滸傳紀行文集落語大全どれでもようございますから一册と御交換願ひます（横濱宮川町三ノ三九市川）○暮笛集、花守 湖畔の悲歌、嫁が淵、魔風戀風、金色夜叉の前編、不如歸、御持の方は妾の詩集金色夜叉の歌、斷腸、小説黑潮其他の雜誌と御交換下さい（栃木縣河内郡豐川村鶴田 三瓦井方小川喜久枝）○誌友の皆様 私ホトヽギスの歌なほしく有りますが私の女子文壇とおかへ下さいな誌上でお知らせ下さいませ（滋江、白菊）○皆様の中に夏人の自白全部（四册）御送り下さる御方には私の手元にある新不如歸、戀無緣、天地有情、離れ小島の歌、新小説、文藝倶樂部等の中御望みのものを二册差し上げます なほ御望みの方には羽製しほりを添へて上げます（米澤市立町西村方加藤はる子）○皆様の内で嫁がふち、紅葉全集（何れか一卷）不如歸、人の兄、玉蟲、金色夜叉の歌、己が罪の歌等御持の方は私の順禮仇討、勢姫、上下、あらわしのつめあと、とびのり太郎、源平せいすゐ記、楠公一代記、少女界、文藝倶樂部、孝女白菊の歌、不如歸の歌等と御交換下さい（大阪北區相生町一二八、木田兵吉方梅子）○文學的の雜誌であればいくら古くともよいから多少にかゝはらず御惠送下され度い御禮は乾度いたします（山形縣西置賜郡 南小國小學校内桐岡紅子）○私の手許に 女學世界、中學文壇、ハガキ文學、少女界、少女世界、英文消風集、月刊食道樂及び新編婦女用文 おてがる料理法等の不用物があります姉様方に女子學術講義か文章世界秀才文壇婦人畫報等お持ちでしたら交換下さいよ（野州宇都宮市材木町二、三小川豐子）○皆様のうちで婦人世界の二卷四號をおもちの方は私の女學世界及び本誌自然と人生のうちどれとでも交換して下さいませんか（札幌南四條西六丁目 安彦節子）○不如歸、魔風戀風、青春、夏子、其の他寫眞采り編みもの類を送つて下さる御方には近江八景の美麗なる繪はがきで御禮申します（近江伊香郡大字雨森 田中靜吉方みどり子）○諸姉様の内たれか不如歸の歌和歌入門、御持の御方は何卒譲つて下さいませんか相當以上の御禮はきつと致しますから（山口縣周防岩國町三室烈守）○皆様の内で婦人の日常生活法最新育兒法健全なる家庭 貴族畫報家庭百科全書造花稽けいこ 大日本國民英語學會發行英語講義始科等御もちの方は知せ下さい私の宅へ宛てゝ私は女の雜誌又は明治女用文 三尾先生纂明治の女子用文文の書方ちらし書手本編物自在裁縫教科書道徳全食道樂其外澤山 有り入用の方は（武藏川越石原町佐久間支店内 久榮子）○私は『編物と刺繡附 押繪細工』と昨年中の女學世界及増刊共もれなく 不用ですが皆様の中で『蕪村詩集』『水彩畫手引』『水彩畫指南』『若菜籠』等御不用でしたら御送り下さいませ（播磨明石大藏谷 佐久間紅花）○姉様方の中で『孝女白菊の歌』『不如歸の歌』を御存じの方は私の『枯野』『雁』『老將軍』『亡友』『波肉』『千代田の宮』『我古鄉』『琵琶湖』『三部』『奈良の都』『離れ小島』『鶴龜』『織姫』『鏡なす』『五常の歌』これらの歌幾種なりと御交換下さいまし（臺灣臺北 農事試驗場官舍秋貫美都子）○私の許に 不如歸の歌、金色夜叉の脚本、肱まくら、新氣遊、食人國探險、落語其他女學世界、女子文壇、婦人世界等 澤山ありま

すから皆樣の中に女夫波、伯爵夫人、濱子、百合子、怪美人、滑稽大集等御持ちの方は御交換下さい（岐阜市京町二丁目林みや子）○乳姉妹想夫憐御持ちの方は少女界少女世界四條綾仙と御交換下さい伏して御願ひ致します（盛岡市志家四番地五日市方にてきよ子）○妾の手許に小說秘密の怪洞へーグ奇怪塔文藝倶樂部女學世界婦人世界寫眞術報滑稽百話新體詩作成自在筑前琵琶の本等の不用書が有ります皆樣の內に不如歸の歌己が罪の歌其他面白い小說お持ちの方は御交換を願ひます（福岡縣筑紫郡住吉村字花園建部良久子）○私女學生の戀大學生のゆめ松のこゑ花寶女の唱歌またお小夜など學校で習った野ばらの花など澤山ありますからめづらしい歌と御交換を御願ひ申ます（京都市高辻新丁四服部しつ子）○皆さん花守、有明集、行く春、二十八宿などの不用物が有りましたら惠んで下さい私藤村詩集、みだれ髮、二十五絃、伯爵夫人、濱子、夏ひさし、小さなハート、夏子の中御好の書に栞を添へて御返禮しますわきっと（越後見附上町高野機業店內雪子）○皆さまの御內にて明治四十年發行の新小說新聲文庫新潮女學世界婦人世界ムラサキはがき文學女子文壇秀才文壇明星白百合その他の雜誌御惠み下さる方には御禮として到着の順により私の手許にある濱子火の柱神の小島洋食のけいこ眞人の自白落葉集藤村詩集不如歸の歌女夫波の歌金色夜叉の歌續々金色夜叉朱と紫貴族の戀少女の煩悶七つ星小夜しぐれ續しぐれ想夫戀府人の妻都會生活金帆不知火綠葉集か翠か肉か差送附いたしますから何卒御疑念なく御惠みの程願ひあげます（岩手縣岩手郡巻堀村高橋ちか子）○誌友の御姉樣よ妾は此の春學校を退きて田舍の淋い處に住て居ろ不束者ですから何卒古雜誌や寫眞の交換を願ひます男子にてもいとひませんから早く送て下さいな（茨城縣稻敷郡朝日村宮田鈴村勝子）○皆樣の中に不用の小說あらば下さいれ返禮には御望みのもの（富山縣上市町安田崎子）○私の許に、文藝倶樂部、女鑑、婦人界、ムラサキ、家庭百首、小供のしつけ、春日局等、ありますから、小野先生の草書の習字手本、土佐日記、憐れな小說、戀愛小說、詩集などお持ちの方は御交換下さいな（東京市神田區美倉町十三齋藤春生）

繪葉書交換

○皆さん妾は草深き東奥の里の淋しき月日を送る者で御座いますが妾は俳句を好みますから交換なし下さる方には上等繪葉書にまづき自製の俳句を一々書添へ必ず返禮致します（岐阜縣加茂郡和知村下牧野日置桃花）○年に鑑みて、人眞似ではないが、繪葉書御交換を願ひます（秋田縣椿鑛山用度內宿山喜樂子）○誌友の諸姉樣方美しい繪葉書澤山有難う何卒永久に御交際を願升（京都四條寺町赤井方上川靜波子）○皆樣妾に繪葉書の交換をして頂戴名古屋のお人は遊びにお出て下さい（名古屋市那門前町一丁目五十二、井關たか子）○妾は繪葉書と面白い唱歌や長唄が大好きなのよどうぞ送つて頂戴なきつと御返禮は致しますよ（秋田縣山本郡八森村椿中濱小松とく子）○私は本州の北端に住んで居る不肖ものですが繪葉書の交換をして下さい和歌や俳句も好みます（青森縣三戸郡三戸町大字馬喰町久保石子）○繪はがきの交換を願ひます私は美しい上等繪はがきて必ずお返ししますから皆樣も頂戴な（茨城縣稻敷郡朝日村字柏田鈴村勝子）○皆樣美しい繪葉書を有難うございましたどうか皆樣御交際下さいませ（滋賀縣栗太郡志津村大字山寺宇野晴寶子）○諸國風景の繪葉書や美人繪葉書にて送つて呉れた御方には外國の切手にて御禮致します（下野國那須郡烏山町山口孤泉）○繪葉書の御交換を願ます妾よりは霞ヶ浦葉書や土浦葉書を送ります（常陸國稻敷郡舟島村竹來三三松本美泉子）○お優しき女子文壇愛讀の諸嬢樣お美しき玉章の交換を願ひます英文でも結構で座いますから何卒御交換を願ます（東京市牛込區水道町十六番地二宮方正木はな子）○自製繪葉書を交換して下さいどんなのでも宜しうございます下手ながら屹度お返し申します（青森縣八戸町下組町山田てる）○遠國の姉妹樣よ筑波山の姿を見た事のないお方は私の地方發行繪葉書の中にありますから空の誌友樣よ、押花造花寫物などにて申し込んで下さい（茨城縣眞壁郡五所村山崎木村宿雨子）○諸嬢樣何卒御交際をお願申ます普通葉書、繪葉書でもよいですからね古今の金言を御存じの方は一枚に五則以上楷書に書いて御惠送下さいな御禮致しますわ（千葉縣長生郡豐岡村萱葉第二區古山明子）○皆樣も自製繪の繪はがき交換を願ひます（千葉縣印旛郡本郷村大野光子）○廣く全國の繪葉書御熱心の御方と交換したいと思ひます和歌か俳句をかいて（近江國大津市上京町駒村松月）○誌友の皆樣何卒ゑはがきあみものなどをどし〳〵交換して

下さい（和歌山市茶屋町十番地 辻幸子）○誌友の諸姉様よ妾の處に上等繪葉書（六十枚）紀念繪葉書が（四十枚）觀兵式紀念繪葉書スタンプ付北海道の風景葉書も名刺形寫眞機械もありますから風景はがきか編物したりて申込み下さい私は男子の方でも情け深い方なら何方でも御交換を願ひます（小樽區稻穗町一四 岩村旅館方鈴木まさ子）○御手紙や繪葉書を交換して下さいませんか、美人繪葉書なんぞは詰りませんから成るべく趣味のありますのを（東京芝區車町三十七番口方森おちば）○諸姉様へ何卒繪葉書交換又編物御文通を願ひ致します（岩手縣花卷川口町梅木幸子）○私は近頃の愛讀者です繪葉書の御交換を願ひたう御座います玉章の交換も願ひます（北海道宗知郡狄志内市街地角舘方伊藤たかみ）○三十九年四月凱旋大觀兵式擧行の時遞信省にて發行した紀念葉書に同スタンプ押捺したもの御惠み下さいその御禮にはカード栞、繪葉書、雜誌、小説など何にても御好みのものさしあげます但しスタンプばかりでもかまひません（豐橋市大字鍛冶神谷小三郎方 榮女）○妾は今手元に觀艦式、觀兵式、滿洲軍凱旋、韓皇即位、東宮山陰、九州、韓國行啓、統監始政、鹽竈神社大祭等其他の紀念葉書及舶來の優美なものを澤山持つて居るのよ御望の方は各地のスタンプ付觀兵式甲種紀念葉書を未使用封筒に入れて御申越下さいまし（大阪府堺郵便局區舳松村役場前清水なみえ）○繪葉書御寫眞などの御交換をもして下さい御送りのかたには先著拾名に名勝繪葉書を差上升（千葉縣東葛飾郡福田村字下三ヶ尾熊野藪内藤秀子）○誌友の諸姉様よ御自身にお書きに成た肉筆繪葉書を御惠み下さいな（殊に水彩畫を好む）御禮には京都風景の水彩畫其他總て肉筆の上等を御送します（京都油小路九條北入大森興兵衛方谷子）○白鞘の繪葉書や附近の名勝の繪葉書や雜誌の交換を御願します（越後中頸城郡斐太村大字五日市早津喜作方早津月子）○諸嬢さま美しい繪葉書を澤山御惠送下さいまして誠に有難く拜受致しました澤山御交換下さい（北海道石狩國妹背牛局區内字和吉永豐子）○本誌々友諸嬢よ、御通信は奇麗な繪葉書に句など認めて下さい。御返事はスタンプ付關の地藏或は姨捨山の繪葉書に拙い句を認めて差上ます（伊勢鈴鹿郡關新所町大原傳七方しづ子）○私も愛讀してゐる田舍娘ですが末永く可愛がつて下さい、うるはしき繪葉書の交換もして下さいれ、直に返葉いたしますから。（飛驒國高山町長谷川すみれ）○盛に繪葉書の交換を願ひます又寫眞の交換も願ひます（和泉國泉北郡南池田村大字萬町高橋耶子）○本誌知名の讀者方にて有名な畫伯又は書家の門下に入らせらるゝ姉様とお交際を願ひます附は讀者一般に繪葉書交換願ひ上げます（京都市下京區五條大橋東詰北入ル大井順子）○誌友の姉上様 私は十五歳ですよ 繪葉書交換の中間に入れて頂戴よ（千葉縣長生郡本納町本納 古山はつ子）○和歌か俳句を繪葉書にしたゝめて送て下さいよ又雜誌の交換もお願申ますおのぞみのを書そへて下さい手許には種々有ます（京都市三條烏丸西入上原芳子）○誌友の皆様私も繪はがき玉章の交換をお願います（丹後宮津町字金屋谷 津田きぬ）○舶來繪端書に限りての交換と寫眞の交換とを誌友の諸姉様にお願ひいたします（上毛沼田町東覺寺内 都野きん子）○以後不相變御繪端書の交換を願ます（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷 永井清子）○私は玄海の荒風に袖をひるがへしつゝ朝夕淋しく詩を友として日を送る一少女ですよ文美しき繪葉書や玉章の交換をどし／＼願ひます（山口縣豐浦郡勝山村楠乃有出白萩）○姿皆様と永久に繪葉書の交換を願つてよ畫面に俳句五句以内書いて下さい（讚岐三豐郡和田村俳句會内十河春江）○おかげ様にて繪葉書四百枚になりました就きましてお禮の印として此の度五百枚を祝として其の中から上等品に心ばかりの賞として左の物を差上げますからあと當て送つて頂戴な未使用でもいいのよ一、金色夜叉合卷二、魔風戀風三冊、伯爵夫人二冊、四良人自白四冊、五世間二冊六等以下雜誌及繪はがきなのよ（東京市本所區番場町磯野すみ子）○麗はしき諸姉様繪はがきに御自作の和歌なり俳句なり書いて送つて頂戴よ（三重縣飯南郡射和村大字射和川原葉子）

剽窃詩文の注意

一號のうち○土佐、山の女。新體詩三等『土塊』は以前の『文庫』に掲載されたる三谷蘆葉氏の作を○佐世保、いちじく子。日記文五等『蝶日記』は『明治才媛文集』中きよ子女の作を○追江、増田たけ子。新狀論四等『死んだ娘』は『女子文藝』一卷七號幾町瑞女の作を、何れも剽窃。○仲山、松掛淑子。新笑話五等『花ちやん』は本誌一號發行の女學世界にも同作を掲載されたにつき當選無効とす。

今回の注意を與へられたる諸嬢は。尾道、清月○大阪、春雨子○廣島、天眼山女○大阪、染香女○上毛、ゆき子○小樽、信子○栗子。

文壇餘興　お勝手（課題）

上は王侯貴人の邸宅より、下は九尺二間の裏店にいたるまでお勝手の無い家はない、お臺所と云ふも、お勝手と云ふも同じ事、つまりは女と關係の深いことは竈の前を都と云ふ諺もある位で諸孃が御存知の通りです

▲「お勝手」の裝飾何でもよし見聞した通りに作ること▲最も容易く作れる方法は諸孃が御自分のお宅の勝手元を有りの儘に文章に作つてみることとです▲新式の瓦斯竈もあらうし、舊式の甕で狹くやうな地竈の大きなもあらうし、都會と地方でお勝手もさまゝに違ふのも面白いでせう▲お勝手の樣子を有りのまゝに作ると共に、お勝手で諸孃が爲すことを作つてもよろしい、又お勝手の失敗談、經驗談、おさんどんの噂や、母君の心得噺なども有益です▲文章は例の通り十六字詰十行内外、振假名はつけずともよし▲懸賞は一等一圓の圖書切符、以下は五等まで例の通りです▲〆切本月二十日

雜録

○春粧の寫眞　時や春、諸孃は新しい晴着を新調されたでせう、それと共に寫眞も撮られたでせう、然して女子文壇の誌友面影に出すことを躊躇されてはいけません、お一人の分でも、大勢の分でも、又以前に寫されたものでも歡迎します、用濟次第返しますから送つて下さい。

○津田梅子女史　先般歸朝されたる津田梅子女史と長谷川喜多子女史の歡迎會は前月十五日麹町富士見軒に開かれて盛んであつた。

○女高師の卒業生　本年度の女子高等師範卒業生は文科十九名、理科二十六名、技藝科二十二名、合せて六十七名である。

○詩集『明眸』　吉田常夏の月刊詩集『明眸』は近々出版の由。

○圖案募集　愛國婦人發行所では今回出版する筈の女德論叢と云ふ書物の表紙圖案を廣く一般に懸賞で募集してゐる、一等十五圓、大きさ四六形、〆切は三月末日

○『女醫顧問』の發表　先頃から誌上で募集する女醫者は澤山に原稿が集りましたから『女醫顧問』と改題して愈四月號から發表します

懸賞呈品

（甲種）

▲壹等	金拾圓	貴金屬品
▲貳等	金參圓	呉服物
▲參等	金八拾錢	小間物
▲四等	金五拾錢	圖書切符
▲五等	金四拾錢	圖書切符

（乙種）

▲壹等	金五圓	絹張洋傘
▲貳等	金壹圓	帶止半襟
▲參等	金六拾錢	文房具
▲四等	金三拾錢	圖書切符
▲五等	金貳拾錢	圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期增刊年四回（二月、五月、八月、十一月の十五日發行））

一冊（大判百頁）	前金拾錢	郵税共前金拾壹錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除ク）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓貳拾錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六拾錢

振替貯金又は爲替に限る事

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料何もいらぬ安全の送金法

此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

◎此方法にて送金の節は登記料二錢算入を乞ふ

明治四十一年二月廿七日印刷
明治四十一年三月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、夏明堂

廣告料

特等	一頁三十圓	半頁……
上等	一頁廿五圓	半頁十三圓
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓
一行四拾錢		

部數多く有効に比し無類の割安

〆切毎號十五日前

特約取扱　○神田　博報堂　○京橋　中外廣告會社　○京橋　日本電報通信社

▲來る四月十五日臨時増刊『文壇の花』は定價郵税とも例號の倍額（價二十錢郵税二錢）です其お積で拂込を願升



寒氣と『レート』の關係

烈しき寒氣の爲めに皮膚の脂肪分泌を奪はれ折角美しく生れ得たる貴重の身體を、あたら疵物にせんとする季節に在ては先づ是が豫防の第一として乳白化粧水レートの準備を要す蓋しレートは牛乳の主成分を以て精製せる一種稀世の衛生化粧料にして其特効は恰も無形の頭巾手袋を着用すると一般皮膚の乾燥より生ずる總ての憂苦疾患を除き完全なる家庭的化粧料として毫も遺憾なからしむ。

發賣元
東京市馬喰町
大坂市南久寶寺町
平尾賛平

定價特別大瓶金壹圓、大瓶金五拾錢、小瓶金參拾錢、送料金八錢

「女子文壇」愛讀者に限り右定價の一割引○各地の文明的化粧品を販賣する店にあり、

◎にせもの、あり乳白化粧水レートの文字及發賣元平尾賛平に御注意を乞ふ。

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



婦人良藥　中将湯（ちうじやうたう）

中将湯は子宮血の道より起る左の諸症を全治す

● 子宮病　● 下腹痛み　● 難産流産　● 月經不順　● 胸先差込　● 白血長血　● 癇高ぶり　● 逆上頭痛

● 血の道　● 夜眠れず　● 氣ふさぎ　● 産前産後　● 腰足冷込　● こしけ　● 月經滞り　● 月經痛み

定價

一日分	十錢
四日分	三十五錢
一週間分	六十錢
二週間分	壹圓十錢
三週間分	壹圓六十錢
五週間分	貳圓五十錢

本舖

東京日本橋通四丁目
津村順天堂本店
振替口座一六八〇番

大阪市堺筋大寶寺町
津村順天堂支店
振替口座三一六二番



下り腹止めヘルプは家庭の常備藥なり

ヘルプを常に家庭に備へ朝夕二三粒宛服用すれば恐る可きコレラ赤痢等の惡疾を豫防するの特効あり又旅行者は必ず本劑を携帯し汽車汽船中等の應急に適用せらるべし

効能

◉痢病◉腸加答兒◉赤痢◉虎列剌◉暑氣あたり◉時候あたり◉水あたり◉食傷◉總て腸胃を整へ下痢を治し腹痛を癒し身體の衰弱を回復せしむ

定價　十錢　二十錢　三十錢　五十錢　一圓　郵税二錢

ヘルプは全國到る所の各藥店にあり

東京市日本橋通四丁目
本舗津村順天堂本店

大阪市堺筋大宝寺町南
支舗津村順天堂支店

女子文壇　無比廉價　金拾錢　郵税壹錢

（東京秀英舎印刷）